
シークレットゲーム KILLER QUEEN ~エピソード5~ 【文香編】

桐島 成実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シークレットゲーム K I L L E R Q U E E N ｝エピソード5｝ 【文香編】

【Nコード】

N 2 4 2 5 M

【作者名】

桐島 成実

【あらすじ】

目が覚めると、そこには見覚えのない部屋だった。

だれかに誘拐された？そんな疑念を持ちつつ行動を開始する総一。

すると、受付嬢とおぼしき人物と出くわす。それに沿って次々と他の人達とも遭遇していった。

行動を共にしようという総一、文香の意思を無視し、各々で動き出すプレイヤー達。そして主催者側からの数々の横槍。

2人の力を合わせ、活路を見出すことが出来るのか!?

文香「私が、あなたを絶対に守ってみせるから」

第1話「プロローグ」（前書き）

この小説は、PS2「シークレットゲーム」KILLER QUEEN」を元に、私が独自に作成したものです。

本作をプレイしていない方、又はプレイしたのが大分前の方は<http://www.yetigame.jp/secretgame/main.htm>を確認して下さい。

ただし、プレイしていない方はこの小説を読むことはオススメしません。幾分ネタバレを多分に含んでいますので。

なお、この小説はストーリー上、ダーク調な面が強いのでご了承ください。

ちなみに、本作でエピソード1～4までありましたので、それにあやかってエピソード5と命名しました。

第1話「プロローグ」

シークレットゲーム 〽 KILLER QUEEN 〽 「エピソード5」
作・桐島成実

第1話「プロローグ」

総一「ん・・・んん・・・」

目をうつすらと開けると、そこには見慣れない天井が飛び込んできた。

総一（・・・？）

思考を巡らそうとした瞬間、頭がズキリと痛んだ。

目覚めたばかりにしては、不自然な、頭の芯に響くような痛み。

総一「なんだ、ここは・・・？」

身体を起こすと、そこには見たこともない光景が広がっていた。

そこは一面コンクリート造りの小部屋だった。場違いともいえる派

手なカーペットが敷かれ、いかにも高級そうな木目の棚や机が置かれていた。

しかし、部屋全体は薄汚れている上に、どの家具も古ぼけており、総一が寝ていたベッドに至っては、汚れだけでなくスプリングが飛び出していた。それがかえって異様な雰囲気をかもしだしていた。

ズキリ

再び襲ってきた頭痛。総一は何度か頭を振りながら、必死で記憶を遡った。

自分の中の一番新しい記憶は？

いつものように学校で授業を受けて、放課後に部活動をして・・・。

1人帰路について、歩いて駅へ。電車に乗り、最寄り駅で自宅に戻って・・・。

戻って？・・・それでどうした？

そこで記憶は途切れてしまっていた。

誰かにいきなり何かで顔を塞がれたような気もしたが、そのあたりの記憶は曖昧だった。

気がついたらここにいた。

分らない。

一体何が起きた？

事故？

一番初めに総一の脳裏に浮かんだのは、その言葉だった。

総一はあわてて身体中を調べた。

・・・怪我はない。服もそのままだし、財布や携帯もある。何もかわってはいない。それに、そもそもこの薄汚れた部屋が病室だとはとても思わない。

服装も記憶の通り制服のままであることから、記憶障害やその類ではなさそうだ。

・誰かに勝手にこの部屋に連れてこられた、ということなのだろうか？

総一「まさか、誘拐、とか？」

しかし、誘拐にしても、何かがおかしい。誘拐なら拘束されていてもおかしくないはずだ。俺はただ、この小部屋に放り込まれているだけだ。

総一「そうだ、携帯だ！」

総一は先ほど確認した携帯の電源を入れた。

しかし、画面には圏外の文字が浮かんでいるだけで、通話は出来なかった。

電波が届かない場所？昨今の携帯ならよほどの場所でないかぎり圏外にはならないはずだ。このビルが山岳に建っているとか、地下室だとか……。

などと思いながら、仕方なく携帯を再びポケットにしまった。

いよいよ何もわからない。

総一「どういうことだ、一体……」

いまだに痛む頭を軽く振った時、首のあたりの違和感に気づいた。

カチッ

総一が指を伸ばすと爪先が何かにぶつかった。

なんだ？

指で触れてみると、そこには硬くて滑らかな金属の感触があった。

総一「首輪？」

なんだこれは？

両手を首の周りに這わせた。しかし、金属製の首輪は密着していて、指をすべりこませる隙間がない。自分の首に巻きついている状態なので、見ることもできない。繋ぎ目らしき感触も指からは伝わってこなかった。

総一「いつの間にこんなものが・・・？」

どうやら意識を失っている時に取り付けられたようだ。

首輪を軽く引つ張ってみる。・・・まるで外れそうにない。首が絞まって苦しくなるだけだった。

このままでは埒があかない。

そう判断した総一は、部屋の周りをぐるりと見渡した。とにかく現状を把握したかった。

さっきまで気づかなかったが、部屋には電気が通っていて、照明が点いていた。完全な廃屋ではないようだ。

総一が寝ていたベッドに、古ぼけた家具。その中央にテーブルがあり、その上に総一が学校帰りに背負っていたスポーツ用のリュックサックが置いてあった。

ベッドから立ち上がり、テーブルに近づいた。

リュックサックだけかと思っていたが、他にも別の何かが置かれていた。

総一「なんだこれは？」

リュックサックの傍らに、小型の電子機器のようなものが置かれていた。手のひらサイズの四角い機器。液晶画面があり、そこに何かが大写しになっている。

総一「スペードの、エース・・・」

そこにはトランプを模した画像。そういえばこの機器自体、まるでトランプのような形をしている。液晶画面の上には英文字が刻印されていた。

総一「P、D、A、か」

メーカーの名前か？それともこの電子機器の名称を指すのだろうか。

下部にはボタンらしきものが一つある。

種類の異なる端子が、左面と下面に覗いている。

総一は何気なしにボタンに触れてみた。

すると画面が切り替わり、同時にバックライトが点灯して画面が明るくなった。

『ルール・機能・解除条件』

画面には上から順にその3つが表示された。

なんだ？ルールだって？

しばらく考えたのち、指先で画面に触れてみた。

すると画面が切り替わった。どうやらタッチパネル式らしい。

ぴっ

軽い電子音、同時に触れた『ルール』という項目の文字の色が変わった。そして新たな文章が表示された。

総一「なになに、ルール１・・・」

カタッ、タッタッ

その時、総一の背後から物音がした。

それは総一が気をつけていなければ気づかなかったであろうかすかな物音。

誰かがいる。

突然背後から聞こえてきた物音に、総一は緊張を隠せなかった。

失念していたが、総一が自分の意思でここに来たわけではないので、当然誰かがいるはずだ。恐らくはここに自分を連れ込んだ誰かが。

総一は謎の電子機器をポケットに突っ込むと、足音を殺して慎重に部屋のドアに近づいていく。

タッタッタッ

誰かの足音、間違いなくこのドアの向こうから聞こえてきている。

心臓が高鳴る。

総一はドアにそつと耳を傾けた。

タツタツタツ……

足音はだんだんと小さくなっていった。てつきりこちらに向かっているとはかり思っていたので、少し拍子抜けした。

総一「ふうっ……」

もしかしたら誘拐犯と鉢合わせになるかもしれないので、こなくて良かったといえれば良かったのだろうが。

しばらく耳を傾けたが、何も聞こえてこなかった。

このままここにいてもどうもならない。そう考えた総一はドアノブに手をかけた。

キィ

ドアの開く音がいやに耳につく。

ドアの先には、通路が見えた。コンクリート造りの飾り気のない通路。それが両側に広がっていた。

先ほどの足音の人物は、ここを通っていったのか。そう考えるとゾツとした。壁一枚を隔てたその先に、謎の人物がいたのだ。

総一は慎重に通路に歩み出た。

足音は左側に行ったように聞こえた。すると右側に行ったほうが少

しは安全といえるのだろうか？

少し考えたのち、右側に進むことにした。状況は把握したい。だが、謎の人物　恐らく誘拐犯の後をついて行く気になれなかった。

通路を進んでいくと、いくつかのドアが見えた。それらを一つずつ慎重に開けていった。どこの部屋も、自分が最初にいた部屋とほとんど同じで、錯覚すら覚えてしまう。しかしめばしいものは何もなかった。

しばらく進んでいくと、通路が二手に分かれていた。真っ直ぐに進む道と右側に進む道。

どちらにいくこうかと考えていると、右側の通路からドアの開く音が聞こえた。

総一はびっくりして、慌てて壁際に身をよせ、右側の通路を覗き込んだ。

その向こうに、ドアから出てきたであろう人の姿があった。

ごくっ・・・。

緊張が一気に高まる。

その人物は、腰に手をあて、しばらくじっとしていたかと思うと、こちら側に歩んできた。

や、やばいっ！？

隠れる場所もなければ、慌てて逃げてしまえば、すぐ気づかれてしまう。

考えあぐねている間に、すでにその人物はもう目と鼻の先まで来ていた。

ど、どうすればっ!?

どうしていいかわからず、総一は目をグッと閉じた。

??「!?!、あなたは・・・?」

総一の目の前で、その人物はそう言った。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

第1話「プロローグ」(後書き)

総一くんが出会った人物とは一体・・・？
次回は第2話「迷い人たち」乞うご期待

第2話「迷い人たち」

第2話「迷い人たち」

作・桐島成実

??「あなたは……」

総一と出会ったその女性は、目を見開きながらそう言った。

総一は固まった。どうするべきかと考える前に、その女性は問いかけてきた。

女性「あなたが誘拐犯、ってそんな感じじゃないか」

総一より少し年上だろうか？その女性は、総一を一瞬警戒したようだが、総一の戸惑いぶりを見て、そうではないと感じ取ったようだ。

だが、相手の女性のその台詞からすると、総一と同じく誘拐された側の人間だということだろうか？

総一「え、えつと……」

女性「文香よ」

総一「えっ？」

文香「私の名前は陸島文香、あなたは？」

堅い表情をくずした文香は、そう尋ねてきた。

総一「あ、えっと、総一です、御剣総一」

総一は戸惑いながらも、そう答えた。

文香「総一くん？ふーん、いい名前じゃない」

文香はそう言うのと微笑んだ。

総一「えと、陸島さん」

文香「文香でいいわよ」

総一「じゃあ文香さん、もしかしてあなたも誘拐されてきたんですか？」

文香「ええ、私は会社の受付嬢をしてるんだけど、仕事が終わったその帰りに」

そつえば、なんとなく受付嬢の格好に見える。

総一「犯人とかは見たんですか？」

総一はそう尋ねたが、文香は首を横に振った。

文香「残念だけど、見てないわ。おそらく後ろからいきなり薬が何かがされたんだと思うわ」

文香はそう言って視線を落とした。

二人は、ほんのしばらくの間無言だった。犯人は見えていない。じゃあ一体犯人は誰だ？複数いるのだろうか？それに、ここに閉じ込めた理由は一体・・・？

総一は思考をめぐらせていると、文香が提案してきた。

文香「ねえ、総一くん。もしかしたら私たち以外にも誘拐されてここに閉じ込められている人がいるかもしれないわ」

総一「そうですね。他にもいるかもしれないわ」

文香「じゃあさっそく探してみましようか」

文香はそう言うときびすを返した。

総一はあわてて文香を呼び止めた。

総一「ちよ、ちょっと文香さん。探すったって、どうやってです？今どこにいるかわからないのに・・・」

そう言われた文香は、こちらを振り向いた。

文香「それもそうね。うーん、困ったわね・・・」

文香はそう言うと視線を落とした。

総一「あつ、そうだ！」

総一は何かを思い出した。そしてポケットの中に手を突っ込んだ。

総一「これだ、これに確か・・・」

総一が取り出したのは、例の電子機器だった。

総一は液晶画面に指を触れ、最初に見た項目の一覧を呼び出した。

総一「たしか、これに『地図』っていう画面があったはず。あ、あった」

総一は『地図』の項目に触れた。すると地図が、画面いっぱいに広がった。

総一「こ、これは・・・」

文香も液晶画面を覗き込んできた。

文香「この地図かしら？」

総一「そ、それしてもこれは・・・」

どう控えめに見ても尋常じゃない広さ。それだけでなく、通路と部屋がやたらと入り組んでいて、迷路のようになっていた。

総一「本当にこれがここの地図なんですかね？」

文香「にわかには信じがたいけれど、今まで見てきた部屋や通路を見る限り、あながち嘘ともいいきれないわね」

文香はそう言つて腕を組む。

文香「けど、仮にこれがここの地図を示すものとしても、どこにいるのかわからないわね」

たしかに、地図は画面いっぱいにあるのだが、現在位置を示す印などはなく、どこにいるのかもわからない状態だった。

総一「たしかめてみます？今まで通つてきた通路や部屋が、この地図にあるかどうか」

総一はそう提案する。

文香「そうね……。えーと、この部屋に来る前は……」

総一と文香は、今まで通つてきた道の記憶をたどり、現在位置を探し出した。しかし、一から探し出すのは思ったより大変な作業で、探すのに20分ほどかかってしまった。

総一「ここです、きっとここですよ！」

総一は地図のある一片を指さす。

文香「そうね、ここで間違いないわね」

文香はそう言っつてうなずく。

文香「それにしても、見れば見るほど広い地図ね・・・」

たしかに、ざっと見ても、縦横数100メートルの広さがあり、東京ドーム数十個分はあった。しかも、それが6階分あるのだから驚きである。

総一「それで、これからどうします？」

総一は文香にそう尋ねる。

文香「さしあたってどこを目指すのか、よね」

文香は自分のPDAを覗き込みながらそう呟く。

文香「さっき地図を見回してる時に、エントランスらしき場所が見えたでしょ。そこを目指しましょう。ここから出られたらそれに越したことはないんだし」

総一「そうですね、じゃあそこに行きましょう」

総一も同意する。

こうして二人は、地図を見ながら、移動を開始した。

・
・
・
・
・
・
・

エントランスのすぐ近くまでやってきた総一たちは、エントランスの中に人影がいるのを発見した。

総一「誰かいます」

先行していた総一は文香の元へ行き声をひそめた。文香は無言でうなずき、通路の角から、エントランスの方を覗いた。

がらんとしたホールは、地図でみるよりもはるかに広く感じられた。そのちょうど中央に立つ若い女性がいた。ごてごてとした衣装を身にまとった、この場には似つかわしくない格好だった。

総一「とても誘拐犯には見えませんね・・・」

総一は小声でそう伝える。

文香「どうする？話しかけてみる？」

文香は女性と総一を交互に見ながらそう尋ねた。

総一「そうですね、もしかしたら俺たちと同じ境遇かもしれません」

文香「なら決まりね」

文香たちは、そう言って立ち上がり、エントランスの方へと歩んでいった。

総一「あの、すみませーん」

総一たちは少し離れた位置から、その女性に声をかけた。

女性「はあゝい？」

呼ばれた女性はこちらに振り向きながら、やたらのんびりとした返事を返してきた。一応誘拐犯の1人である可能性を考えて、警戒していた総一たちは、その声に脱力感を感じた。

文香「・・・どう思う？」

文香は総一にだけ聞こえるようにそう呟いた。

総一「・・・ノーコメントで」

そんなやり取りをしている間に、その女性はトコトコとこちらに近づいてきた。

総一「あ、えっと、あなたは？」

総一の前までやってきた女性に、そう尋ねてみた。

女性「こんにちは。綺堂渚といいます」

その女性、渚さんは丁寧な仕草で頭を下げた。頭を下げた拍子に、長い髪の毛や何層にも重なった服装がパサパサと音を立てる。

総一「どうも、御剣総一です」

文香「陸島文香よ」

総一達はそう返事を返すと、

渚「総一くんに、文香さんですかぁ。よろしく」

渚さんはニツコリと微笑んだ。

文香「え、えつと、それで、渚さん」

文香は気を取り直して、さっそく疑問をぶつけてみた。

文香「渚さんは、ここで何をしてたのかしら？」

文香がそう尋ねると、渚は表情を少し引っ込めて話し始めた。

渚「えーとお、この建物から出ようと思って、出口を探してたんですけど」

渚「あちこち歩いて、このエントランスまで来て、やっと出れるんだぁ、って思ったんですけど」

渚はそこで少し首をかしげる仕草をした。

渚「どうやら、ここも出られないみたいで・・・」

総一「えっ？」

総一と文香を驚きの声を上げた。常識で考えれば、エントランスであるはずのここから出られるはずなのだが・・・。

渚はそこで話を切ると、出口があるはずの方向に視線を移した。

総一達もそこに目線を向けると、そこには出口らしきものが目に飛び込んできた。

ホールの奥の方に、並ぶようにガラスのドアがあったが、それらはすべて重厚なシャッターが下りており、外の光の一切を遮っていた。

総一達はシャッターの方に近づいてみた。その後ろから渚もついて来る。
。

総一は割れたガラスの隙間から、シャッターを押してみた。

ガシャンガシャン

重い音が響きわたった。どうやら鉄製のようで、構造もかなりしっかりしているようだ。

文香「これじゃ出られないわね」

2人はシャッターを見上げていた。そこに渚も加わる。

渚「向こうのシャッターに穴が空いてるんですけど、やっぱり出られそうもないんですう」

渚はそう言って向こう側のシャッターを指した。

総一「えっ？」

文香「出られなくても、外の様子ぐらいは伺えるかしら？」

総一達は渚の指すシャッターへと向かった。

外の光ぐらいは見えるかと期待したが、それも叶わないことがすぐにわかった。

総一「これは・・・」

その部分のガラスは砕かれ、シッターにも穴は空けられているのだが、その先には、なぜかコンクリートが敷き詰められていた。

文香「コンクリートにも掘ったような跡があるわね」

恐らく自分達の前に誰かが掘ったのだろう。だが、問題はそんなことではなかった。

総一「これ、いつ頃掘られたんでしょうね」

文香「恐らくだいぶ前に掘られたじゃないかしら、ホラ、掘られた部分のコンクリート、だいぶ黒ずんでいるわ」

たしかに掘られた部分のコンクリートは黒ずみ、埃もかぶっていた。少なくとも昨日今日掘られた跡ではない。この穴が示すことは恐ろしい現実だ。

総一「俺達の前に、だいぶ前に誰かが閉じ込められたってことですよね」

そしてその人物は、シャッターに穴を開けて脱出しようとした。掘られた跡から、数時間掛けて掘り出されたに違いない。しかし、いっこうに出口が見えず、あきらめたのだろう。

そして、コンクリは今もなお、壁として総一達の前に存在している。決してここから逃がすまいと。

総一「しかし、一体なんのために・・・？」

総一が疑問に思っているのはそこだ。総一達を逃がすまいとするなら、わざわざこんな手の込んだことをする必要はない。総一達を拘束すれば済むことだ。

総一が考え込んでいると、総一達が来た通路の反対側の通路から、呼びかける声が聞こえてきた。

男性「おい、そこの君達」

男性は、通路の角から少し出たところから、遠くにいる総一達に向かって叫んでいた。

総一たち3人は一斉にそちらを向いた。

男性「話がしたい。そっちへ行っても大丈夫かい？」

総一「何者ですか？」

総一達は警戒しながら、その男性に注目した。

男性「僕達はここに誘拐されてきたんだ。君達と争う気はない」

中年男性はそう言って両手を挙げた。

どうやら、総一たちと同様に誘拐されてきたらしい。『僕達』ということは複数人いるらしい。

総一達はお互いを見合わせた後、総一が代表して返事を返した。

総一「わかりました。こちらにも争う気はありません」

男性「ありがとう。今からそっちへ行く。それじゃ行くつか、咲実君」

男性はそう言っすぐ後ろにいた少女にそう呼びかけた。

咲実「はい・・・」

咲実と呼ばれたその少女は、男性の後ろからエントランスへと姿を現した。

総一が、その少女を見た瞬間、愕然とした。

似ている、あいつに。総一の大切な人に。

だが、そんな筈はない。そんな筈はないんだ。

だって、あいつは、もう・・・。

総一はそのまま身体が固くなり、動けなくなってしまうていた。

総一の、そんな様子に気づかず、男性と少女は総一達の元へと歩んでいった。

・
・
・
・
・

第2話「迷い人たち」（後書き）

次回、第一の犠牲者が出てしまいます。一体誰が・・・？乞うご期待

第3話「ルール違反」

第3話「ルール違反」

作・桐島成実

現在の状態

「グループA」		P D A	状態	総一との
関係				
御剣 総一	(A)	健康		
陸島 文香	(?)	健康	普通	
綺堂 渚	(?)	健康	普	
通				
「グループB」				
葉月 克己	(?)	??	知らな	
い				
姫萩 咲実	(?)	??	知らな	
い				

男性「では、こちらの番かな？」

総一達の自己紹介が終わった後、中年男性はそう切り出した。

総勢5人となった彼らは、エントランスの中央に円を組む形で対面していた。

葉月「僕の名前は葉月克己、そしてこちらのお嬢さんが・・・」

葉月はそう言っ隣にいる少女に目線を送った。

咲実「姫萩咲実です・・・」

咲実と名乗った人物は、緊張した面持ちで名乗った。

総一はそんな彼女を凝視していた。

やっぱり似ている。けど違う。だってあいつは・・・

彼女はそんな総一の視線に気づいてたじろいでいた。

文香「こらっ、総一君。いくら彼女が綺麗だからって見とれてないの！」

文香がそう言ってたしなめる。

言われて総一はハッ和我にかえった。

総一「あ、す、すみません」

総一はあわてて頭を下げた。

葉月「続けていいかな？」

そんな様子を見ていた葉月が、話を促した。

葉月「僕は公務員をしている。どうやらその仕事帰りにさらわれたらしい」

咲実「私は学校の帰り道に・・・」

咲実はおずおずとそう言った。

文香「犯人の姿とかは？」

葉月「いや、見てない。気づいたらベッドの上、という状態だ」

葉月はそう言つて深いため息をついた。咲実も首を横に振る。

葉月「そんなわけで、僕もイマイチこの状況が分かっていない」

葉月はそう言つて肩をすくめた。

文香「私達と同じ境遇つてわけか。それにしても、これだけ居るってことは、あながち13人居るというのも本当かもしれないわね」

総一「えっ？」

総一は驚きの声を上げた。

それを見た文香は、地図を見ていたPDAを操作し、ルールの一覧を呼び出した。

文香「ホラ、ここ。参加者は13人居るって書かれているでしょう」

文香はそう言って総一にPDAの画面を向ける。

総一「あ、本当だ」

たしかに、PDAにはそう書かれていた。

葉月「そのルールなんだが、僕にはとてもじゃないが信じられる内容じゃないよ」

葉月はPDAの操作は最初は分からなかったが、咲実と出会ったことで、なんとかPDAの内容を見ることが出来ていた。

だが、あまりの内容に、とても鵜呑みに出来るような内容ではなかった。

しかし、ここに書かれていることが真実なら、この建物内には13人の人間が居ることになる。

とはいえ、それを今すぐ確認する術はないが。

エントランスから外には出られない。今の状況が打開できず、総一達5人は手詰まりになっていた。

しばらく無言の5人だったが、おもむろに総一が切り出した。

総一「とりあえず、別の場所を調べてみませんか？もしかしたら俺達と同じ境遇の人と会えるかもしれませんし」

文香「そうね、この状況じゃそうするしかないわね」

文香も同意する。

葉月「わかった、そうしよう。渚君と咲実君もそれでいいかい？」

葉月は反対側にいる咲実と渚の方を向いて尋ねた。

咲実「あ、はい」

渚「はい、分かりましたあ」

異論はないようだった。総一達5人はエントランスを後にした。

・
・
・
・
・

総一「手がかりになるようなものはないですね」

あてもなく歩いていた総一達は、あちこちにある部屋を一つ一つ調べまわっていた。

しかし、部屋にあるのはボロボロになった日用雑貨が入ったダンボールの山や家具など、手がかりどころか何一つとして役にたたないものばかりだった。

そうやって5、6箇所ほどの部屋を探っていたが、これでは埒があかないので、部屋をざっと見て回る方針に切り替え、かれこれ10数箇所の部屋を見回った頃。

咲実「え・・・？」

総一達が部屋に入り、最後に咲実が入ろうとした所で、何かに気づいた。

渚「どうしたの？咲実ちゃん」

すぐ前を歩いていた渚が尋ねる。

咲実「今、何か物音が・・・」

総一達のいる側からではない。それは通路の向こう側から聞こえてきた。

渚「ん～？」

渚は不思議そうな顔をしながらも、耳を傾けてみる。

渚「あ、ほんとだ」

葉月「どうしたんだい？」

咲実達のやりとりに気づいて、他の3人も通路の外に出てくる。

咲実「向こうの方から、何か物音と人の声らしきものが聞こえてきたんです」

咲実はそう言って通路の先を指さす。

文香「誰かいるのかしら？」

総一「いつてみましょう」

総一達はそう言って、声のする方へと目指した。

・
・
・
・
・
・

総一達は、声のする部屋の前まで来た。どうやら、この中に人がいるようだ。

自然と総一達の動きも慎重になる。

??「いい加減にしてくださいっ！」

女性の声だ。その声は甲高く、話し相手に対して怒鳴り声をあげていた。それに被さる様に男性の声が聞こえてきた。

??「いいじゃないか、お嬢ちゃん。ちょっとだけじっとしてくれればいいんだ」

どうやら、女性と男性がもめているようだ。

総一は、すぐ横にいる文香と葉月に目で合図した。文香達が無言で

うなずくと、そつとドアのノブに手をかけた。その間も中の2人の言い争いは続いていた。

女性「いやだったらっ！」

男性「うおっ」

男性が軽い悲鳴をあげる。話の内容からすると、言い寄る男性を女性が振り払ったのだらう。

総一はドアのノブをそつと回して、ドア越しに中の様子を覗いてみた。

すると、白いワンピースの女性と、小太りの中年男性の姿が見えた。2人とも首に例の首輪がされており、どうやら総一達と同じ境遇であることが伺える。

男性「むう、こつ、小娘のくせにっ！」

小太りの中年男性は振り払われたことに憤慨し、女性につかみかかった。

女性「い、いやっ！」

その様子を見ていた総一は、再び文香達に目を向けた。

総一「助けにいきましょう」

総一は小声でそう提案する。

文香「わかったわ。彼女を放っておけないわ」

文香も小声でそう返事する。

総一は、おもいつきリドアを開いた。それと同時に、文香達が中になだれ込む。

総一もその後が続いた。しかし、そこで総一達の予想だにしない光景が目に入った。

男性「なっ・・・」

男性は驚愕の表情を浮かべている。そして、彼の首輪が、赤いランプを発しながら点滅していた。

『貴方はルールに違反しました』

同時に彼の首輪から、合成音声が出始めた。

『貴方はルールに違反しました。15秒後にペナルティが実行されます』

総一「こ、これは一体・・・？」

総一は啞然としていた。いや、総一だけでなく、前にいた文香や葉月も、そして言い寄られていた女性も、皆その首輪と無機質な音声に注目していた。

文香「ルール違反？ペナルティ？」

文香もわけが分からないという風だった。

そして全員まるで金縛りにあったかのごとく動かず、時間だけが過ぎていった。

そして、変化は突然訪れた。

ゴロン

部屋の端の方から物音がした。

総一はその音に気づき、そちらの方を向いた。

総一「な、なんだあれ・・・？」

そこには、コンクリートの壁があった。その一部分が、まるで切り取られたかのように丸い穴が空いていた。

そして、その穴から出てきたのだろう。丸いボールらしきものが床に落ちていた。

文香「ボール、かしら？」

その間も、中年男性の首輪は点滅を繰り返し、合成音声は同じメッセージを繰り返している。その男性に向かって、まるで意思があるかのごとくそのボールは転がっていった。

男性「な、なんだ・・・？」

いまだ呆気にとられている男性の足元に、そのボールは近づき、そ

して

ズウウウン

一瞬何が起こったか誰にもわからなかった。だが、男性の様子を見て、すぐに状況を把握した。

総一「な、何が？」

男性「ぐあああっ!!」

男性はもんぞりうつて、床に倒れこんだ。そして注目すべきは、彼の右足だった。ズボンが焼け焦げていおり、その周りにはプラスチックの残骸が転がっていた。

男性は一度倒れこんだものの、身の危険を感じてあわてて立ち上がろうとした。だが、さっきの爆発で怪我をしたのか、苦痛に顔を歪めた。

総一「なっ・・・」

総一達は驚愕した。突然の出来事に頭が真っ白になった。

男性「ひいつ、ひいいいつ！」

一方足を怪我した中年男性も、何が起こったのか認識出来ずにいたが、自分に危険が迫っていることを瞬間的に感じて、片足を引きずりながらも、部屋の反対側にあるドアへと向かい、部屋を飛び出した。

総一たちは、状況が飲み込めず、ただ動きを止めていたが、突然総一達のPDAから、アラームが鳴り始めた。

総一「な、なんだっ！」

総一はあわててPDAを取り出した。するとそこには、さっき見たボールの写真と共に、ボールについての説明が表示されていた。

葉月「追跡ボール?!」

葉月が自分のPDAを見て、驚きの声をあげる。

そこには、こんな説明が書かれていた。

追跡ボール：体当たりをして自爆する、ルール違反者や首輪の解除に失敗した人間を殺す自走地雷

移動速度は時速6キロ。爆発の威力はそれほどでもないから、何個か当たらないと死なないし、走って逃げれば大丈夫かも!?

総一「まさか、さっきのは・・・」

総一は啞然としていた。だが、大変な状況になっている事に気づき、すぐ側にいる葉月達に向かって叫んだ。

総一「あの人を追いかけましょう!」

葉月「わ、わかった」

葉月も慌てて追従する。

渚「総一君、葉月さん、待って」

渚も後からついて来る。咲実もそれに続く。

文香はまだ凍り付いている白いワンピースの女性に声をかけた。

文香「大丈夫？」

女性「え、ええ・・・」

女性はやつのことでそう返事する。

文香「ついてきて！早くしないと総一君達とはぐれちゃう」

文香はそう言って、女性の手を掴み、総一達の後を追った。

・
・
・
・
・

総一達は部屋の外に出て、左右に広がる通路を交互に見渡した。しかし、通路を曲がったのか、男性の姿はすでになかった。

あの男性が部屋を出てからさほど時間は経っていないはずだ。総一はそう考えていると。

コロコロコロ

いつの間にあつたのだろう。総一達のちょうど足元に、さっきのボールが転がっていた。

総一「うわっ」

総一は慌ててそのボールを避けたが、そのボールはまるで総一には興味がないと言わんばかりに、そのまま総一の足元を横切っていた。

葉月「大丈夫かね！？総一君」

すぐ後ろから来た葉月が、総一を心配する。

総一「大丈夫です。それより」

総一はそう言つてボールの方に目を向ける。

ボールは、総一達が出てきたドアから見て左側に転がっていった。そして、その先にある十字路を、右に折れて進行していった。

総一「あっちか！」

その向こうにさっきの男性がいることを察知し、総一達はボールの後を追いかけた。

そして総一達が十字路を右に曲がろうとした時。それは聞こえた。

男性「ぐあああっ！」

男性の悲鳴、そして再び低く重い爆発音。それが総一達の向かっている通路の向こう側から聞こえてきた。

葉月「総一くん！」

悲鳴を聞いた葉月は、総一の名を呼んだ。

総一「急ぎましょう！」

総一達はすぐ前を転がるボールを抜き去り、通路の突き当たりまで走った。

この角の向こう側にいる。さっきの悲鳴の感じからすると、すぐ近くのはずだ。

そして、総一達が突き当たりの所までたどり着き、左側の通路の方を向いたとき、それを見た。

足を怪我した男性、漆山権造は、Ｔ字型の通路のちょうど真ん中で立ち止まっていた。

彼はそこから動かなかった。いや、動けなかったのだ。

彼のいる場所から、左右と正面にそれぞれ通路があった。そして、その３方向すべてから例のボールが転がってきていた。

左から３つ、右からも３つ。そして正面からは２つ。そのボールから少し離れた所からボールが４つ・・・。

計１２個の追跡ボールが、まるで包囲網を作る形で、漆山に迫って

いた。

すぐ近くには逃げ込める部屋もない。右足を怪我した今の漆山では、この状況から脱する術はなかった。

彼はただ、自分に迫りくる恐怖に怯えるしかなかった。

ボールが自分の足元まで来るほんの数秒が、彼にとって無限に感じたに違いない。

総一達が、そんな彼を目撃したのはちょうどその時だった。

そして

漆山「うわああああああっ!!」

ガシャンバリンドカングシャッ

ボールの爆発音。無数に飛び散る金属やプラスチックの音。そして漆山の断末魔が、通路に響き渡った。

咲実「ひっ」

咲実の喉が鳴った。総一達は、目も覆いたくなるような惨劇を見ているはずなのに、視線を離すことが出来ないまま、漆山の無残な最期を見届けることになってしまった。

そんな時、7人全員のPDAからアラームが、けたたましく響いたが、総一達はそれすらも耳に入らなかった。

『ゲーム開始から6時間が経過しました。お待ちいたしました、全域での戦闘禁止が解除されました!』

そのPDAには無情にも、そう書かれていた。

・
・
・
・
・

第3話「ルール違反」(後書き)

目の前で死んでしまった漆山。さて、残された総一達6人は今後どのような行動をとっていくのでしょうか？

次回は第4話『戸惑いと疑念』お楽しみに

第4話「戸惑いと疑念」

第4話「戸惑いと疑念」

作・桐島成実

現在の状態

「グループA」		P D A	状態	総一との
関係				
御剣 総一	(A)	健康		
陸島 文香	(?)	健康	普通	
綺堂 渚	(?)	健康	普	
通				
葉月 克己	(?)	健康	普通	
姫萩 咲実	(?)	健康	普通	
女性	(?)	??	知ら	
ない				
漆山 権造	(?)	死亡	知らな	
い				

総一達一行は、漆山が死んだ現場を離れて、近くの部屋に集まっていた。

誰もが、あの男の凄惨な死を目の前にして、大きくショックを受け

ていたが、いち早く気を取り直した文香の提案で、この部屋に集まっているのだった。

総一「・・・あのボールは何だったんでしょう?」

皆は思い思いの場所に腰掛けていた。あまりのショックに疲れがドツと来たようだ。

特に咲実は顕著で、あの出来事があって以降まともに歩くこともままならず、総一と文香に半ば担ぎ上げられる形でここに来ていた。

文香は、そんな咲実を介抱しながらも会話に加わってきた。

文香「ルール違反、って言ってたわね」

あの男の首輪からは、たしかに『ルールに違反しました』と合成音声が続り返し流れていた。

総一「ルールって、もしかしてこのPDAに書かれてたことですよ
ね」

文香がうなずく。

葉月「うん、僕もそう思うよ。僕のPDAに書かれているんだが、恐らくルールの8番が原因だと思う」

ルールの8番。

『開始から6時間以内は戦闘禁止とする。違反した場合、首輪が作動する。正当防衛は除外する』

葉月はルールを読み上げたのち、こう説明する。

葉月「首輪が作動する前、君とあの男性が言い争っていた訳なんだが・・・」

葉月はそう言つて総一達とは少し離れた位置にいる女性に視線を向けた。

葉月「それで、相手の男性が掴みかかってきたから振り払つた。そうだね」

女性「はい・・・」

普段の葉月なら、嫌なことを思い出させるような発言はしなかっただろう。だが、事が事だけに気配りをする余裕はなかった。

葉月「それは正当防衛だからルール違反にはならない。だが、その後男性はさらに掴みかかってきた。これは正当防衛ではないから戦闘行為と見られてしまった」

そして首輪が作動した、ということだろう。

文香「そうね、首輪、PDA、ルール。冗談か悪戯だとばかり思つてたけど、どうやら本当のことみたいね・・・」

文香の言葉に一同はしばらく沈黙する。

総一「とりあえず、ルールを全部確認を行ったほうが良いんじゃないですか？」

総一の提案に、葉月も同意する。

葉月「たしかに。僕のPDAだけじゃルールの全貌が分からないし、このままではまたルールに違反してしまう人が出てきてしまうかもしれない」

だが、総一のその提案を、文香が制した。

文香「総一君、おじ様。ルールの確認よりもっと大切なことがあるわよ」

総一は最初何のことかわからなかった。

文香「私の名前は陸島文香よ」

だが文香のその言葉と、白いワンピースの女性を見ていることで、総一は気づく。

文香「あなたの名前を覚えてくれないかしら？」

皆はこうして、自己紹介とルールの確認を行ったのであった。

・
・
・
・
・

総一達は自分達のPDAのルールの項目を順に読み上げ、それを総

ーがノートに一つ一つ書き込んでいった。

ルールを確認し終えた一同は、全員言葉を失っていた。それはルールの9番を葉月が読み終わった後のことであった。

ここにいる誰もが、あまりの内容に驚きを隠せなかったのだ。

殺害・首輪の作動・破壊・皆殺し。

到底受け入れられる内容ではなかった。だが、さっきの男の死を見せられた直後だけに、それが返って現実感を増していた。

部屋中に重い沈黙が支配する。その空気を破ったのは、意外にも白いワンピースを来た女性、矢幡麗佳だった。

麗佳は無言のまま、部屋のドアの方へと近づいていった。

文香「麗佳ちゃん、一体どこに行くの」

文香が呼び止める。麗佳は一瞬だけ足を止めた。

麗佳「このままここにいても、進入禁止のルールによって首輪が作動してしまいます」

麗佳は少しだけこちらを振り向き、そう言った。そして、再びドアに向かって歩み始める。

文香「それなら私達も一緒に」

ガチャ、バターン

文香が言い終わる前に、麗佳は早々に部屋を出て行ってしまった。

文香「麗佳ちゃん!？」

文香のその声も、部屋にむなしく響き渡るだけであった。

文香は呼びかけるのを止め、立ち上がった。

総一「文香さん？」

文香「総一君、彼女を追いかけましょう」

文香はそう言って早足で麗佳が出て行ったドアの方に向かっていった。

総一「え、でも・・・」

総一はちらりと咲実の方を見ていた。動けない彼女を置いて出て行って良いものだろうか？

文香「このまま彼女を一人にはしておけないわ!」

なおも迷う総一を、葉月は察したのか優しく声を掛けた。

葉月「総一君、咲実君のことは任せておいてくれ。早く麗佳君を」

葉月のその言葉に、総一はようやくと立ち上がった。

渚「総一くん・・・」

渚の心配そうな声。

総一「大丈夫ですよ。すぐに連れ戻してきます」

総一と文香はそう言っで部屋を後にした。

・
・
・
・
・

文香「たしか、今向こうの方に」

先に部屋を出た文香は、右側の通路の角を曲がろうとする麗佳を目撃した。

しかし、総一が来た時は、すでに彼女の姿はなかった。

文香「行きましょう」

文香はそう言っで、麗佳の姿を消した方へと走っでいった。

総一もその後にくく。

文香が通路の角を渡ると、そのずつと先の方に麗佳の後姿が見えた。

麗佳は追いかけてくる総一達に気づき、自身も走り出した。

麗佳「ついて来ないでっ！」

麗佳がそう叫ぶ。そして、通路をさらに左に曲がっていった。

文香「麗佳ちゃん、まって！」

総一達も後に続く。

麗佳「あなたたちと一緒にいても、首輪を解除する事は出来ないわ！」

お互い走っているせいか、その声も自然と大きなものになっていた。

そうやって数ブロックを移動した総一たちだったが、麗佳はある部屋のドアの前で立ち止まった。

そしてドアを開け、部屋の中の様子を一見した後、その部屋の中に入ってしまった。

総一達もすぐに追いつき、その部屋に入ろうとしたのだが、

ガタンッ

文香「えっ！？」

ドアの向こう側から何かで塞がれたらしく、ドアは少し開いた状態でつつかかえていた。

文香はドアに身体を押しやり、強引にドアを開いた。

どうやら全く開かないわけではなく、向こう側に何かを置いて塞いでいるようだった。幾分かドアは開いたものの、鉄製のドアであったことも重なり、少してこずっていた。

バターン

その時、部屋の向こうからドアの閉まる音がした。おそらく、向こう側にもドアがあつてそこから出たのだろう。

総一も加勢し、なんとかドアを開き部屋の中に入ったものの、もうすでに麗佳の姿はなかった。

文香は部屋の奥にあるドアを開いた。その先はまた通路が左右にながっており、麗佳の姿はなく、どちらに行ったかさえも分からなかった。

文香は麗佳を見失ったと判断し、がっくりと肩を落とした。

文香「これじゃ、麗佳さんを見つけるのは無理ね・・・」

文香はそう言つて、今自分が出てきたドアを見つめた。重厚そうな金属製の扉が、まるで麗佳の拒絶を表しているようだった。

総一「仕方ありません。葉月さん達のところに戻りましょう」

総一もがっくりと肩を落としていたが、残してきた人達の事が気がかりとなり、すぐに行動を再開した。

・
・
・
・
・
・

総一達は地図を手がかりに、元来た道を引き返していた。そして、葉月達がいる部屋の中へと入っていったが、そこで総一は思いがけない状況を目にする。

総一「いない・・・」

その部屋は静寂を保っていた。そして、本来居るはずである葉月達の姿が、そこにはなかった。

文香「どういうことかしら？」

文香のその疑問にも、総一は答えられなかった。

総一達が部屋を出て、ここに残されたのは、葉月・渚・咲実の3人。

一体、総一達が戻ってくる間に何があったというんだ？

文香「とにかく、ちょっと辺りを探ってみましょう」

文香はそう言って、部屋のあたりを見回した。

だが、目に入ってくるのは、ダンボールの箱や、イス代わりにしていた木箱ばかり。葉月達がないこと以外は、さつきと何も変わっていないように見えた。

文香「総一君！ちょっとこっちへ来て」

文香が総一を呼ぶ。その声は切羽詰っている感じに聞こえた。

総一「どうしたんです？」

文香「これを見て」

文香は総一達が出入りしたドアとは反対側にあるドアの前にいた。なぜかそのドアは開放された状態になっていた。

総一は文香の前まで行き、ドアの真横に積まれているダンボールを見た。

そのダンボールの下から3番目。ちょうど総一の肩の部分の高さぐらいになるだろうか。そこに細い棒状の何かが、ダンボールの正面から真っ直ぐ刺さっていた。

総一「これは、なんでしょう？」

文香「・・・恐らくは」

文香は青ざめた顔をしながら、その棒を引き抜いた。

その棒状のものは細く、ちょうど端から半より先が、刃の構造になっていた。

それを見た総一はこれが何なのかを悟った。その顔には驚愕の表情を浮かべていた。

総一「そ、それって、まさか、ナイフ・・・？」

文香「・・・そうね」

文香も表情が冴えない。

手に持っているナイフは刃も柄もスリムで先端が尖っており、通常のナイフではなく、手投げ式のナイフであることを伺わせた。

総一「さっき俺達がいた時、こんなありましたっけ・・・？」

文香は首を横に振る。

文香「じっくりこの部屋を観察したわけじゃないから、はっきりとはいえないけど」

文香は手に持ったナイフを見つめたまま、うつむく。

だが、元からあろうとなかろうと、そこにナイフが刺さっているという現実が、総一達を恐怖に駆り立てていた。

もしかして、葉月さん達がいなくなった理由って。

その考えに行き着いた時、総一は自らを震撼させた。

総一「・・・あ！」

泳いでいた目線が、ふとあるものを捕らえる。

それは、ナイフの刺さったダンボールより、さらに下。一番下のダンボールに付着した赤い染み。赤い斑点の模様があった。

総一「これは、まさか・・・」

血！？

総一「文香さん・・・」

総一はナイフと文香を交互に見た。文香もその赤い染みに気づき、文香の表情をこわばらせた。

総一「葉月さん達は誰かに襲われて・・・」

その後の言葉は続かなかった。

誰かが負傷した。その最後の言葉を発することが、今の総一には出来なかった。

・
・
・
・
・
・

第4話「戸惑いと疑念」(後書き)

行方知れずになった麗佳と葉月達。彼女達の運命はいかに・・・？
そして、総一達は再び、みんなと合流することが出来るのか！？

次回は第5話「前触れなき波乱」お楽しみに

第5話「前触れなき波乱」

第5話「前触れなき波乱」

作・桐島成実

現在の状態

「グループA」		PDA	状態	総一との
関係				
御剣 総一	(A)	健康		
陸島 文香	(?)	健康	良好	
「グループB」				
綺堂 渚		(?)	??	普
通				
葉月 克己	(?)	??	普通	
姫萩 咲実	(?)	??	普通	
矢幡 麗佳	(?)	健康	疎遠	
漆山 権造	(?)	死亡	知らな	
い				

ここは総一達がいる部屋からさほど遠くない場所にある倉庫。そこに一人の女性が入ってきた。

??「ふう、うまく分断出来たわね」

彼女はそう言うなり、手元に持っている2本のナイフを床に放り捨てた。

彼女の名は郷田真弓。彼女もこのゲームのプレイヤーとして参加しているが、実はゲームの進行を調整する役割を担っていた。

つまり、彼女はこのゲームの主催者側に人間なのである。

郷田「これで、彼らも危機感を持ったかしら？」

彼らというのは、葉月達のことを指していた。

自分の命が狙われる脅威。それを行う者と、受ける者が存在しなくては、このゲームは成り立たない。

郷田は、そんなことを思いながら壁に背を傾けていると、突然ハンドバックの中からアラームが鳴り始めた。

それに気づいた郷田は、手に持っていたハンドバックの口を開けると、中からPDAを取り出した。

そして、それを素早く操作する。

郷田「私よ」

郷田はPDAに話しかけた。

??「こちらディーラー」

するとPDAから男の声が聞こえてきた。自らをディーラーと名乗る彼は、このゲームを運営、管理する立場にあった。こうして、郷田に対して状況に応じた指令や情報を提供するのも役目の一つである。

郷田「何かしら？」

郷田はさっそく本題に話を進めた。その声はひどく冷淡で、事務的な口調だった。

ディーラー「実は、さきほどモニターを見て気づいた事なんですが・・・」

ディーラーは郷田に対し、その状況をかいつまんで説明していく。

郷田「・・・それは本当なの？」

ディーラーが説明しているのは、参加者、つまり総一達と同じプレイヤーの一人についてである。

ディーラー「はい、1階の落とし穴の罠にかかって、なんとか落とし穴の端の所に手を掛けて踏ん張っていたのですが、力尽きてしまい、そのまま下に」

プレイヤー同士が争う為の武器などは、プレイヤーが最初にいる1階部分には、ほとんど置いていなかった。

もし1階に複数の人間を殺せるほどの武器を置いてしまったら、早い内から決着がついてしまう可能性と、逆に警戒して誰も武器を取らずにこう着状態が続く可能性が発生する恐れがある。

だが、罨の場合は違う。頻度が低い上に、複数の人間がまとめて死ぬことのないように設計されている。

むしろ、プレイヤーの動きを封じ込めたり、複数の人間を分断したり、多少の怪我を負わせることにより、プレイヤーに命の危機を知らせる手段として用いられている。

その為、罨に関しては1階から6階までほぼ同様の罨が仕掛けられている。

だが、それゆえに罨の存在を知らぬ者が、まれに命を落とすこともある。

ディーラー「下に落ちてても、なんとか生きてはいますが、損傷がひどく、このままゲームを続行する能力は皆無かと」

ディーラーは、プレイヤーをまるで無機質なロボットか何かと同義な扱いをした。

今回落ちたプレイヤーにとって不幸だったのは、誰とも接触できず、同行者がいなかったこと。もし同行者が一人でもいれば、踏ん張っている時点で助かったかもしれない。

そして目覚めたばかりで、誘拐された際にかがされた薬が、まだ十分に抜け切っていなかった為、とつさに罨を避けることが出来なかったこと。

そして何より、ゲームの内容はおろか、目覚めたばかりで存在自体もよく知らないほどの早い段階で罨にはまってしまったことだ。

この時点では誘拐犯はいるにしても、まさか罠が存在しているとは思ひもしなかっただろう。

郷田「そう、それはちょっと困った事になったわねえ・・・」

と言いつつさほど困ったような表情を見せず、話を続けた。

ディーラー「そうですね、今のところ郷田さんが仕掛けた襲撃以外に、プレイヤー同士の争いもおこっていませんし。今の段階ではゲーム自体に支障が出てはいませんが」

郷田「とはいえ、このまま進めばゲームがイマイチ盛り上がりがない可能性は大だわね」

郷田は腕を組んで考えるしぐさをした。

郷田「まあいいわ、とりあえずその役立たずは処分してちょうだい」

郷田は非情にもそんなことをあっさりと言ったのけた。

ディーラー「ええ、もうすでにその様に手配しております」

郷田「へえ、さすがに早いわね。ベテランのなせる業ってヤツかしら？」

郷田はことさら感心したように言っが、その声に感情は籠っていないかった。

ディーラー「それはお互い様でしょう」

ディーラーもそれに気づいているが、気にした様子もない。

郷田「それもそうね」

郷田は腕組みをしたままディーラーに尋ねた。

郷田「ところで、今後のゲームの方向性についてだけど」

ディーラーは少し考えて、その問いに答えた。

ディーラー「多少事前のシナリオと異なりますが、まあ、任せておいてください」

ディーラーは自信ありげにそう答えた。

郷田「そう、それじゃ今後の展開については任せるわ。また何かあったら連絡ちょうだい」

ディーラー「わかりました」

ディーラーはそう言うか早いが通信を切った。

それを確認した郷田は、PDAをハンドバッグの中に閉まった。

郷田「さて、どのような展開になるのかしらね」

郷田は無表情のままそう呟いた。

・
・
・
・
・

通信を切ったディーラーは、さっそく今後の展開についての構想を練り直した。

ゲームは今まで何度も行われてきたわけだが、その度に、事前にシナリオをディーラーが考え、プレイヤーの初期配置なども彼の裁量で決まる。

しかし、さっきの出来事は、シナリオにはなかった事柄であった。

たしか、以前にも似たような展開があったな。

彼は、そう思いながら昔の記憶を辿った。

昔、プレイヤーの中に、とあるヤクザの幹部クラスの人物を入れたことがあった。

もちろん、命を狙う側として活躍してもらう為、PDAも他者の被害を要求するものにした。

だがしかし、この人物が同じ様に早い段階で落とし穴の罠に落ちてしまい、結局ものの役にも立たなかった。

そして、今回と同様に、シナリオを修正する必要があった。

・・・もちろん、すべてがすべてシナリオどおりにいくことなど今

まで皆無に等しかった為、慣れたディーラーにとっては些細な事ではあるのだが。

ディーラー「あの時はたしか・・・」

ディーラーは、その時のシナリオを変更した内容を頭をめぐらせていた。

そして、一通りめぐらせた後、ニヤリと口元を歪めた。

ディーラー「よし、あの時と同様の展開にするか」

ディーラーは、そう決断し、さっそくその為の準備を始めた。

忙しく動く彼は、ふとこんな思いが頭をよぎった。

まさか、『あの時』と同じ状況になるとは。そう、あの時と同じなのだ。

そういえば、あのゲームが『彼女』にとっての始まりだったな。

とはいえ、あの時と今とでは立場が逆だが。

事前に、このシナリオを考えていたわけではない。ゆえに何かの因果を感じずにはいらなかった。

もっとも、それも彼自身にとっては些細な出来事ではあるのだが。

・

・
・
・
・
・

恐らく葉月達が逃げたであろう、開放されていたドアの方から、総一と文香は部屋の外に出た。

そして、辺りを見渡すが、人のいる気配はしなかった。

総一達が、麗佳を追って部屋を出てから、ここに戻ってくるまでの時間はおよそ20分程度だ。と、するとそんなに遠くには行っていないはず。

だが、耳をすましても、物音一つしなかった。

総一「咲実さん、葉月さん、渚さん・・・」

また、『あの時』のように、後戻りできない状況になってしまったのではないか。

そんな思いが、彼をあせらせていた。

総一「文香さん、この辺りを探してみましょう」

文香の返事を待たずに先に行こうとする総一を文香は制した。

文香「ちょっと待って！総一君」

総一「なんでです？今も危険にさらされているかもしれないのに」

あせる総一に気づいたのか、文香は優しく論した。

文香「いい、おじ様達が逃げてるのだとしたら、きっと今から私達が探しても見つかりっこないわ」

たしかに、葉月達の居場所がわからない今、この入り組んだ建物を探し回るのは不可能に近い。追われているのだとしたら、今も走り続けていることだろう。

文香「それに、たとえ発見できたとしても、私達は何も武器を持っていないから、かえって危険が増えるだけよ」

相手が、恐らくナイフか、もしかしたら他の武器とかも合わせて葉月達を狙っているのだとすれば、総一達がいれば、的が増えるだけで、それを防ぐ手立てはない。

文香はそう言っただけにも走り出そうとする総一の肩にゆっくり手を置いた。

総一「ですが・・・」

文香「ここにみんながいない。だから動けないほどの重傷は負っていない。無事逃げおおせてる可能性が高いわ。だから」

文香はそこで表情をくずして言った。

文香「落ち着いて。ホラ、深呼吸」

文香に最後だけ、声を柔らかくした。促されて総一は深呼吸を2、3回行った。

そうすることによって、少し落ち着いた総一だった。

・

・

・

総一「それで、これからどうすれば」

文香は腕を組んで、しばらく考えていたが、

文香「そうね。さしずめ武器を確保したほうがいいってところかしら」

文香はそう提案する。

文香「・・・とはいえ、安易に武器なんか持ちたくはないけれど」

どうやらこちらが本音のようだ。

総一「ですが、もうすでに部屋をいくつか調べましたが、何も出てきませんでしたよ」

総一の言うとおり、部屋にはダンボールやら木箱やらが無造作に置いてあるだけで、役に立ちそうなものはなかった。

文香「でも、まさかこの建物にナイフが1本だけしかない、ということはないと思うわ」

首輪の解除条件には殺害を求めるようなものがあつた。それに、あの男を殺した『追跡ボール』という自走地雷まであつたぐらいだから、武器もいくつかあるだろう、というのが文香の考えだった。

総一「でも、どこを探すんです？」

文香「そうね。とりあえずは部屋に家具とかあつたから、手早くそれを壊して武器にしましょうか」

もちろん、そんな武器では心もとないが、どこにあるかどうかわからない武器を探すのに時間を割いている余裕もない。

総一達が次に出会つのが敵か味方か

時間に制限がある事を踏まえるとこれが適切である様に思えた。

文香「それに、なるべく早めに2階に上がったほうがいいわね」

総一「いずれ、1階から進入禁止エリアになるから、ですか」

文香「そうよ。まだ時間はあるけれど、早いに越したことはないし」

総一はPDAに表示されている時間を見た。開始から8時間40分。残り時間は64時間20分。

文香「それに、おじ様達も、きっと2階を目指そうとするわ」

文香のその言葉を最後に、総一達は行動を開始した。

• • •
• •
• •
•
•

第5話「前触れなき波乱」（後書き）

早くから命を落としてしまったのは一体誰なのか？そしてディールは何を仕掛けようとしているのか？そして総一達は運命はいかに！？

次回は第6話「立ち塞がる障害」まだ姿を見せないプレイヤーが数人登場します。乞うご期待

今回早々と舞台を降りることになった人物。まだそれは誰かははつきりしてませんが、この人物はこの次のシナリオ「エピソード6」で大活躍する予定になってます。どんな内容になるかはお楽しみ

第6話「立ち塞がる障害」

第6話「立ち塞がる障害」

作・桐島成実

現在の状態

関係	「グループA」		PDA	状態	総一との
	御剣 総一	陸島 文香	(A)	健康	良好
「グループB」	綺堂 渚		(?)	??	普
	葉月 克己	姫萩 咲実	(?)	??	普通
通	矢幡 麗佳		(?)	健康	疎遠
	郷田 真弓	漆山 権造	(?)	健康	未接触
い			(?)	死亡	知らな

行動を開始した総一と文香は、近くの部屋に寄り、木箱から木の板を2つはがし、それを総一と文香がそれぞれ武器とした。

その部屋にあった他の家具は、到底武器になりそうもないくらいボロボロだったので、こんなものになってしまった。

とはいえ、ここで悠長にしているわけにはいかない。葉月さん達も危険に晒されているかもしれないし、早く合流する為の手立てを考える必要があった。

その為にも、少しでも情報を集める必要があった。

そして、総一達は地図を頼りに、現在位置から一番近い階段の前まで来たのだが。

総一「これは・・・」

総一はそれを見た瞬間、思わず息を呑んだ。

文香「階段が塞がれている。どういうこと？」

階段が見えるはずの場所。しかしそこには天井まで積み上げられた瓦礫の山。さらにそれを固定しているのは幾多にも巻かれた鉄条網だ。

総一も文香も、目の前に立ちふさがる情景を見て呆然としていた。

文香「ふう、これじゃとても人が通ることが出来ないわよね」

文香は困ったように眉を寄せた。

総一「でも、おかしいですね。地図にはそんなこと……」

総一はそう言いながら、手に持っていたPDAの地図を覗き込んでいた。

地図には2階へ上がる階段が5ヶ所。エレベーターが2基描かれていた。

総一「ん？」

よく見ると、その内の階段の4ヶ所とエレベーターの1基に、それぞれバツ印が描かれているのに気づいた。

地図には具体的な説明がなく、印も小さかったので、見落としていたのだ。

文香「要するに、階段とエレベーターが1つずつしか使えないってことよね？」

総一「恐らくそうでしょうね」

文香の問いに、総一がそう答えるが、彼女は浮かない顔でそのまま黙り込んでいた。

総一「どうしたんですか？文香さん」

総一は文香の顔を覗き込むと、彼女はゆっくりと顔を上げた。

文香「2ヶ所しか上の階に上がることが出来ないとなると、そこで待ち伏せして、おじ様達と合流できるかもしれないわね」

総一「それじゃあ!」

総一の表情がパツと明るくなる。

文香「ただ、そこに来るのがおじ様達ならいいんだけど」

文香が浮かない表情なのは、この為だ。

迷っていても仕方ない。総一達はひとまずバツ印のついていない階段の方へ行くことにした。

・
・
・
・
・

総一達がバツ印がついていない階段へ辿りついた時、階段の前にあるホールの真正面に立ちふさがる男の姿があった。

その人物は小柄で、総一より何歳か年下な出で立ちをしているのは、遠くから見ている総一の目にも分かった。

だが、最も注目すべきなのは彼の手に持っているものだった。

総一「クロスボウ・・・」

少年は階段を背にこちら側に向けてクロスボウを構えていた。

よく見ると、彼の腰の部分にも鞘に入ったナイフがぶら下がっていた。

総一達がいる事には気づいていないようだが、彼の姿を見る限りこのゲームに乗って人を襲おうとしているのは明白だった。

文香「困ったわね・・・」

文香は総一にだけ聞こえるように小声で呟く。

総一「どうします？もう一方のエレベーターの方へ向かっていきますか？」

総一はそう提案したが、文香は首を横に振った。

文香「それは難しいわね。ここの階段からエレベータは、地図を見る限り正反対の所にあるわ」

文香は手に持っているPDAを見ながら顔をしかめた。

文香「それに、エレベーターもこのことと同じく待ち伏せされていたら、私達には逃げ場がない訳だし」

たしかに文香の言う通りだった。階段ならいざしらず、エレベーターで上り、ドアが開いた瞬間に襲われたのでは逃げ道はない。

エレベーターの前にも人が待ち構えている可能性もあるが、それを確かめるためにエレベーターや階段を行き来していたら、あつとい

う間に時間が過ぎ、ここが進入禁止エリアとなつて首輪が作動してしまう事だろう。

ということとは、多少の危険を冒しても、ここを通り抜けるしかないのだろう。

文香「とはいえ、動いたとたんに狙い撃ちよね」

どう考えても彼の目をすり抜けてホールを駆け抜け、階段を上がつていくのは不可能だった。十中八九少年の手に持つクロスボウの餌食になるだろう。

ホールから階段までは、隠れるスペースもない。

考えあぐねていた文香だったが、やがて総一が話を切り出した。

総一「文香さん。俺が先行して彼の注意を引き付けます。その隙に2階へ」

その提案を聞いた文香は驚きの表情に変え、強く反対した。

文香「だめよ！総一君。危険すぎるわ」

総一「大丈夫ですよ。見たところ、あのクロスボウは1本しか装填されていません。恐らく1本ずつの手動装填式で、1つ撃つごとに自分の手で矢を装填してなくてはいけないんだと思います」

その1撃さえかわすことが出来たなら

次が装填される前に少年の前に行き、動きを封じるかすればいい。

文香「でも、危険よ。あの少年の所に突撃するってことは距離が縮まって相手にとって狙いやすいし、矢を避けるのも難しくなる。それでなくても、そんな危ないマネ、あなたにさせるわけにはいかないわ!」

文香は断固として、総一の危険極まりない提案を受け入れなかった。

総一「ですが、他に」

総一は文香と少年の方を交互にみていたが、少年が何かに反応した事に気づいた。

それはすぐ後にホールに響き渡る叫び声で判明した。

??「たあああっ!!」

ホールの前の通路は、正面と左右、3方向からつながっていた。総一達がいるのは少年から見て右側の通路にいた。

その為、死角になっている正面の通路から、1人の少女が飛び出してきた。

声を張り上げてホールに飛び出したのは、少年と同じく小柄な少女だった。短めの髪に、動きやすそうなボーイッシュの服。その見た目に違わず、素早い動きで少年の元に突進していった。

対する少年はその少女に気づき一瞬目を見開いたが、慌てる様子もなく、クロスボウをその少女に向けた。

長沢「へっ、おあつらえ向きだな！」

そして矢が発射される。

シュッ

矢は音もなく飛び出した。

聞こえるのは空気を切り裂く音のみ。

だがその瞬間、その少女は体を床に伏せた。

体が前倒しになり、床に引き寄せれる瞬間、矢が少女の体を通り過ぎた。

少女「くっ!!...」

矢は少女の右肩の先端をかすめ、矢はそのまま遠くに飛んでいった。

少女は床に体が密着した瞬間、痛みに堪えつつ、顔だけを反対側に向けて叫んだ。

少女「今よっ!走って!」

それは総一の方に向けられたのではない。少女の視線は、自らが飛び出した側の通路の方に向いていた。

??「かりんおねえちゃん!」

悲痛な声を出しながらホールに飛び出したのは、さっきの少女よりさらに幼い少女だった。

長沢「ちいつ、外したか」

一方、矢をかわされた少年は、一瞬クロスボウに矢を装填しようとしたが、かりんと呼ばれた少女との距離が近いことに気づき、クロスボウを捨て、腰に下がっていたナイフに手をかけた。

そして少女が起き上がって体制を立て直していたその時、少年はかりんに向かってナイフを突き出した。

長沢「死ねえええっ！」

かりんは体制を立て直した直後で、とっさにナイフをかわしたが、踏ん張りが利かずに後ろ向きに倒れた。そこに少年が乗りかかる形でかりんの動きを封じる。

かりん「くっ、このおっ！」

かりんは必死にもがくが、少年を引き剥がせない。そして少年はその少女の首にナイフを振り下ろすべく両手で構えた。

文香「！、いけない！」

突然の出来事に動くことを忘れていた総一達だったが、2人が組み合っているのを見た瞬間、ホールに飛び出していた。

総一「待てっ！おい君、やめるんだ！」

総一はそう叫びながら、今まさにナイフをかりんに向けて振り下ろそうとしている少年に突進した。

それに気づいた少年は、とっさに立ち上がり、かりんの元を離れた。

長沢「くそっ！せつかくのチャンスだったのに！」

少年は怒っていたが、状況が不利だとわかっているのか、躊躇せず階段のところまで行き、その場を後にした。

その引き際は見事というべきだった。

総一は逃げる少年を階段近くまで追っていたが、姿を消したことを確認すると、反対側の方に向き直った。

少女「かりんお姉ちゃん！大丈夫！？」

そこには、ちょうど起き上がったところのかりんと、そのかりんの身を案じてそばに駆け寄り、涙を流し始めている幼い少女の姿があった。

かりん「優希」

かりんは、優希と呼ぶ少女を左腕で後ろの方に隠すようにし、総一達を鋭い目線で見ていた。

かりん「・・・助けてくれてありがとう」

かりんは礼を言うが、その表情は硬く視線だけは離さない。どうやら総一達のことを警戒しているようだ。

かりんが気にしているのは、もし今いる2人が襲い掛かってきた場合、真っ先に狙われるのは、自分より年下の優希だということだ。

今日の前にいる2人は、体格も年齢もあきらかにかりん達より上であるは明白である為、襲われる危険性もあり、回避することも難しい為、尚更警戒しているのだろう。

文香「大丈夫！？今止血するわ！」

総一より先にかりんの前まで来ていた文香は、持っていた木の板を投げ捨て、ポケットに入っていたハンカチを取り出し、傷口を押さえようとした。

かりん「大丈夫です。これくらい・・・くっ！」

かりんはそう言って一歩前に出たが、その際肩を動かし、その痛みにうめいた。

優希「お、お姉ちゃん！？」

優希は、そのうめき声に敏感に反応する。

クロスボウの矢は、肩をかすめただけとはいえ出血しており、白い服の肩の部分を赤く染めていた。

文香「無理しちゃダメよ！大丈夫、傷口を押さえるだけだから」

文香は優しく微笑みかけた。

かりんはなおも警戒していたが、文香に促され、大人しく従った。

かりん「つつ！」

ハンカチを傷口に当てた時、かりんは痛みを感じたが、耐えて声を殺す。

ハンカチはすぐに血で真っ赤になっていった。

文香「やっぱり、ちゃんと手当てをしないと……。総一君」

総一「あ、はい！」

一部始終を見ていた総一だったが、呼ばれた総一は文香の側まで駆け寄った。

文香「とりあえず今の内に2階へ。この娘を手当てをしないと」

総一「そうですね」

文香「そう言うわけだから、キミ、えーと、優希ちゃん、だっけ？」

優希「あ、は、はい」

名前を呼ばれた優希は、ビックリしたように返事をした。

文香「私達についてきて。その方が安全だから」

優希はしばらく迷っていたが、文香のその目と表情を見て、決断した。

優希「う、うん。わかった」

かりん「ゆ、優希・・・？」

かりんは戸惑いの表情を見せたが、優希は力強く言った。

優希「大丈夫！きっとこの人達は悪い人達じゃないよっ」

優希は、その事を直感でそう感じ取った。

優希のその言葉に、かりんも反論しようとした口を閉ざし、総一達と共に2階の階段を上っていった。

・
・
・
・
・
・

第6話「立ち塞がる障害」（後書き）

新たに出会ったかりんと優希、そして長沢。これで登場した人物は総一自身を含めて11人。さて、この人達が今後どのように物語を紡いでいくのでしょうか？

次回は第7話「嵐の前の静けさ」です。総一達と、行方知れずの葉月達が登場します。乞うご期待

第7話「嵐の前の静けさ」

第7話「嵐の前の静けさ」

作・桐島成実

現在の状態

「グループA」		「グループB」		関係												
P D A	御剣 総一	状態	総一との	陸島 文香	北条 かりん	色条 優希	「グループB」	綺堂 渚	葉月 克己	姫萩 咲実	長沢 勇治	矢幡 麗佳	郷田 真弓	漆山 権造		
	(A)			(?)	(?)	(?)	(?)	(?)	(?)	(?)	(?)	(?)	(?)	(?)		
	健康			健康	肩を負傷	健康	??	健康	健康	健康	健康	健康	健康	健康	健康	死亡
	良好			普通	普通	普通	普	普通	普通	普通	普通	普通	普通	疎遠	未接触	知らな

2階への階段を上った総一達4人は、かりんの怪我を治療する為、近くの部屋に入り、妙に目新しいダンボールの中を調べていた。

文香「あつ、あつたわ！救急箱」

そこには、赤い十字架が描かれた白い箱があった。どう見ても救急箱だろう。

文香は中身を確認すると、さっそくベッドに腰掛けているかりんの元へと急いだ。

かりんの元には優希が付き添っていた。

文香「消毒して、止血するわ。ちょっと染みるけど我慢してね」

文香はガーゼに消毒液を染みこませてかりんの肩の傷口に当てた。

かりん「っ！」

かりんは思わず顔をしかめる。それを優希が心配そうに見ていた。

文香は消毒した後、手早く新しいガーゼと包帯で、かりんを止血した。

かりん「ありがとうございます・・・」

かりんは申し訳なさそうに頭を下げた。

文香「いいのよ。困ったときはお互い様よ」

文香は包帯を巻きながら、安心させる為に微笑んだ。

一方総一は、手当てをするのは一人で十分と文香が言うので、その間救急箱を見つけたダンボールの中身はさらに詳しく調べていた。

総一がそれを見つけたのが、ちょうどそんな時だった。

総一「こ、これは・・・！」

総一は目を剥いた。総一の手には、大型のコンバットナイフがあった。

以前に小型ナイフを見て、クロスボウも見た総一だったが、今自分がそれを手にしていることは、にわかには信じられないことだった。

だが、ずっしりとした重みのあるそれは、間違いなくそれと分かるものだった。

だが総一は、確かめられずにはいらなかった。試しにナイフの鞘を抜いてみた。そこには切れ味鋭い刃先が顔を覗かせた。

それを遠くから見ていたかりんは、解いていた緊張感を再び取り戻した。

本当にこんなもので殺し合いをさせる気なのか。

総一は戦慄を覚えていた。

しばらく驚いていた総一だったが、気を取り直して再びダンボールの中身を調べ始めた。

ナイフが置いていた場所の下には、いくつかの非常食や飲み物、コンロや鍋なんかもあった。

総一はそれらを取り出していると、一番下の所にマッチ箱ほどの大きさのプラスチックの板らしきものが置かれていたのが目に入った。

総一はそれを手に取った。

総一「何かのパーツか？」

総一はプラスチックの板を調べてみた。側面には金属製の端子が覗いており、板の表面に角ばった文字が刻印されていた。

” Tool: Player Counter ”

刻印は小さく、目を凝らして見ないとよく見えなかった。総一はじつとその文字を読み取ろうとしたが、

文香「ツール・プレイヤーカウンター？」

総一「わっ！」

いつの間にそこに居たのか、総一の後ろから覗き込むようにして、顔を出す文香がいた。

文香「きゃっ、な、何？総一君？」

2人はほぼ同時に驚いた。

総一「ふ、文香さん！あの子の手当てをしてたんじゃ」

文香「手当てはもう終わったわよ。もうっ、いきなり脅かさないでよ」

文香は頬を膨らませる。

総一「す、すみません、集中してたもので」

文香「全く。私の顔を見てびっくりしちゃうなんて、失礼しちゃうわ」

文香はそう言っただけでしる。

総一「そ、そんな問題じゃないでしょう」

文香「ひどいわ、総一君。私のことをそんなもんじゃないだなんて」

総一「違いますって」

文香「もう良いわ。どうせ私は魅力がない年増よ、うっっ」

文香はそう言ってそっぽを向いてしまう。

総一「勘弁してくださいよお」

総一と文香がそんなやり取りをしていると、遠くから小さな笑い声が聞こえてきた。

ふふっ

遠くから、そんな小さな笑い声が聞こえてきた。

かりん「くっくくくっ」

それはかりんの笑い声だった。

優希「あはははっ」

優希もつられて笑ってしまう。

だが、おかげで場の雰囲気は軽くなった気がした。

なるほど、これは文香さんなりの気遣いなのか。

例の少年に襲われて、怪我までしてしまったからなあ・・・。

文香さんは身体の手当てだけじゃなく、精神的な痛みも和らげてたんだなあ。

総一は口には出さなかったが、そういう風に感心していた。

・
・
・
・
・
・

非常食を見つけた文香とかりんは、鍋やコンロを使って簡単な料理を作る事にした。

総一は敵が来た時に備え、適当なもので扉を塞ぎ、見張りをすると
言って、文香達に料理を任せて、さっそく近くの家具を扉の前に移動させていた。

かりんはさっき見つけたコンバットナイフを使って非常食を手ごろな大きさに切り分けていた。

文香「へえ、なかなか上手じゃない、かりんちゃん」

かりんは、手際よく食材を均等な大きさに切り分けていく。

かりん「私は、いつも料理をしていますので」

褒められることに慣れてないかりんは、少し照れた様子で、そう答えた。

文香「え、そうなの!？」

かりん「私は、両親がいまさんから」

かりんは表情を引っ込めて、再び食材を切る手を動かした。

文香「・・・ゴメン、余計なこと聞いたわ」

文香にしては珍しく、真面目な顔を作って頭を軽く下げた。

両親が死に、妹も重度の病を抱えるという家系を持つかりんは、小さい頃から自分で家を切り盛りしなくてはならなかった。

そのおかげで家事はうまくなったが、それを妹以外の人に褒められることは今までなかった。

その妹も、今は口を聞けないほどの病に冒されていた。

文香「あゝあ、こんなことなら私ももつと料理を勉強しとくんだったわ」

文香はかりんがあつという間に食材を切り終わったのを見て、そう嘆いた。

優希「文香さん、料理苦手なの？」

文香達と少し離れた場所で、飲み物を紙コップに注いでいた優希は、ペットボトルを持つ手を止めて、会話に加わってきた。

文香「この間も会社の同僚達に手料理を振舞ったんだけど、料理は焦がしちゃうわ、なんとか出来た料理も、評判は酷いものだったわ・・・」

文香はがつくりと肩を落とす。

優希「私も料理は全然だよ」

フォローのつもりなんだろう。優希は照れ笑いをする。

優希「ねえねえ、かりんお姉ちゃん」

かりん「ん？何、優希？」

飲み物の準備が終わった優希は、かりんの元まで行き、服の袖を引っ張った。

優希「今度、料理教えてくれないかなあ？」

優希は懇願する。

かりん「えっ！？」

かりんは目を丸くして驚きの声をあげる。

かりん「あ、う、うん。いいけど」

かりんは戸惑いがちに、うなづく。

優希「文香お姉ちゃんも、一緒にどう？」

優希は食材を鍋に入れている文香を誘ってみた。

文香「うーん、年下に教えてもらうのって何か複雑ね・・・」

文香は言葉通り複雑そうな表情を浮かべていた。

総一「おっ、なかなか美味そうだな」

見張りをしていた総一は、料理のにおいにつられ、文香達のところまで来た。

優希「もうちょっとだけ待っててね、お兄ちゃん」

優希はそう言いつつ、お茶を注いだ紙コップを総一に手渡した。

総一「そっか」

総一も、他の3人と同様、床に座った。

服が汚れるかと思ったが、この状況ではいたしかたあるまい。

総一「ところで、文香さん」

文香「なあに、総一君」

総一はPDAをポケットから取り出した。

総一「さっきのプラスチックの板なんですけど、もしかしたら、このPDAに差し込むものじゃないかと思うんです」

総一はそう言って、PDAの側面にある端子部分を指差す。

文香「なるほどね。ためしてみる？総一君」

文香に促され、総一はプラスチックの板のコネクターをPDAに差し込んだ。

カチッ

すると例の電子音と共に、バックライトが点灯して画面が明るくなる。

「プレイヤーカウンター 機能：残りの生存者数をトップ画面に表示する」

「バッテリー追加消費：極小 インストールしますか？ YES / NO」

バッテリーはほとんど喰わない、か。それなら問題はなさそうだが。

総一はYESに触れる。

すると画面が新たに変わり、インストールしていますの文字と共にゆっくりと伸びていくバーが表示された。

そしてバーの下に表示されているパーセンテージが、100%になり、例の電子音が再び鳴り響いた。

「インストールが完了しました。ツールボックスからコネクターを抜いてください」

総一が箱を外すと、トップの画面へと切り替わった。

「ゲーム開始より14時間08分経過 / 残り時間58時間52分」

「ルール・機能・解除条件」

その項目より更に下の部分に新たな項目が追加されていた。

「残りの生存者数 11名」

総一「じゅ、11名だって!？」

総一はその表示を見るなり、声を大にして驚いた。

文香「11名、ってことは、参加者は13人いるわけだから・・・」

総一達の目の前で、あの男は自走地雷によって殺された。

となると、本来はそこに12名と表示されるはずなのだ。

だが、画面には11名と書かれている。

総一「あの男以外に誰かが亡くなった・・・？」

文香「そういう事になるわね・・・」

文香はそう言って深くため息をついた。

総一「最初の男の様にルール違反、なんでしょうか。それとも」

・・・それとも誰かに殺されてしまった。と口にすることはためらわれた。

文香「それはわからない・・・けど」

総一も文香も深刻そうな顔をした。

そんな中、かりんと優希はイマイチ状況が飲み込めてない様子だった。

かりん「あ、あのさ、御剣。ルール違反って言うのは？」

かりんと優希は、この『ゲーム』のルールについてすべてを把握しているわけではなかった。総一はルールの一覧を書いたノートを見せることにした。

・
・
・
・
・

ルールの全貌を知ったかりんと優希はしばらく言葉を失っていた。

かりん達がつってくれた料理を食べながら、総一はいままで起こった出来事をかいつまんで説明した。

本当は食事の時にこんな話はしなくなかったが、時間が限られている上、状況を少しでも把握したい気持ちから、こうなってしまった。

一通り説明が終わると、今度はかりんが今までの出来事を話してく

れた。

どうやら彼女達の話によると、目覚めてから間もなく2人は出会ったらしい。

そして、通路を歩いている内に、死んでいる漆山を発見した。

2人は相当にショックを受けたが、同時にこれが冗談ではなく本当のゲームだと考えを改め、2人のPDAに書かれていた進入禁止のルールの従い、2階を目指した。

その途中で男性の歩く後ろ姿を目撃したが、その男が鉄パイプのようなものを持っていた為、声をかけるのをためらったということだった。

あとは、例の少年が階段の前にいて、という経緯らしい。

総一「そうか、君達もあの男を目撃してしまったのか・・・」

総一が言うのはもちろん最初に死んだ漆山のことである。

4人はしばらく無言だったが、食事の手を休めて文香が切り出した。

文香「とりあえず、首輪を外すことを考えましょうか」

文香はそう提案する。

総一「そうですね。6階に上がることも大事ですけど、それだけじゃ意味がないですからね」

文香はうなずくと、自分のPDAを取り出した。

そして、総一達の前の画面を向ける。

文香「私のPDAはコレ、『6』だから首輪を外す為にはJ O K E Rを見つける必要があるの」

PDAの画面には、たしかに大きなダイヤの『6』が描かれていた。

文香「総一君は？」

文香のそう聞かれたが、総一は首を横に振った。

総一「俺のはいいんです。どうせ外せっこないですから」

総一はそう言つて視線を落とす。

文香「そんなわけにもいかないでしょ！みんなで協力すれば」

総一「無理なんです。俺には」

文香の言葉を遮り、総一はおもむろにPDAを取り出す。

総一「俺には人は殺せません。だから」

総一のPDAにはスペードのエースが描かれていた。総一の首輪を外す為には、クイーンのPDAの持ち主を殺さなくてはならない。

すでに自分の命を諦めている総一をよそに、3人は驚愕の表情を浮かべていた。

総一「だから、俺のことはいいんです。えっと、それで北条さん達のPDAは？」

総一は話を逸らし、横にいるかりんに話を振った。

かりん「え、あ、えっと」

かりんは戸惑っていた。さっき総一達から聞かされたルール。

あれがすべて本当だとしたら……。

「開始から3日間と1時間が過ぎた時点で生存している人をすべて勝利者とし20億円の賞金を山分けする」

もしそうなら、今ここでPDAの数字を知られるのはまずいのではないか？

かりんはそう考え始めていた。なぜなら、妹を助ける為には、莫大な治療費が必要だったから。その為には

かりんは思考を巡らせていたが、それはすぐに打ち切られてしまった。

優希「私のPDAはこれだよ、ハートの『9』」

優希は躊躇いなく、自分のPDAを前に差し出した。

総一「『9』!?それって、まさか・・・」

総一はそう言っただけで、ルールの9番を確認した。

そして、ノートに目を通すと、辛辣そうな顔をして呟いた。

総一「なんてこった・・・」

優希「?どうしたの、お兄ちゃん」

当の本人は状況が分かってないようだ。

総一「文香さん・・・」

総一は思わず文香さんの方を見ると、文香もショックを受けており、その顔は渋い表情だった。

文香「どうやら、解除条件どおりに外すことは不可能、ってことよね」

文香はそう言っただけで苦々しく唇をかみ締めた。

優希「???どういうこと?」

総一「優希、お前が助かる為には・・・」

総一はそう言いかけたが、

総一「いや、何でもないよ」

総一は無理に笑顔を作ってごまかした。そして見ていたノートを横に放り捨ててしまった。

そのやりとりを見ていたかりんだったが、総一が捨てたノートが目に入り、それを手に取って中身を見た。

「9：自分以外の全プレイヤーの死亡。手段は問わない」

かりん「なっ!？」

かりんは思わず驚きの声をあげた。これは、つまり……。

そこから考えることを脳が拒否していた。かりんの頭は真っ白になっていた。

だから、つまり……。

空転している思考だったが、次第にその意味を理解していく。

そして、悟った。もしルール通りに事を進めていくのだとしたら……。

かりん自身が生き残るとすれば、この目の前にいる優希は助からない。

それはかりんにとって一番の衝撃だった。

優希「かりんお姉ちゃん……」

そんなかりんの様子を見て、不安そうに顔を覗き込む。

『お姉ちゃん』

優希が言うそのセリフは、かりんの頭にある事を連想させていた。

それはもはや口を利くこともままならなくなった妹、かれんの事だ。

お姉ちゃんと呼ばれなくなって随分経つ。

そんな中でこの建物で最初に出会ったのが、この優希だった。

まだ状況を理解していなかった2人は、早い内から仲が良くなっていた。そして、いつしか気づいたのだ。

優希のその姿が、かつて『お姉ちゃん』と呼んでいたかれんの姿と重ねていることに。

だから、最初に死んだあの男の姿を見て、ルールが本当だと悟った時、優希の事を見捨てる事が出来ず、ここまで行動を一緒にしてきたのだ。

かりんには、もはや優希を裏切ることも攻撃することも出来なくなってしまうていた。

それだけに、今聞いた事実は相当にショックだったのだ。

4人は重い空気の中、食事を済ませたのだった。

・
・
・
・
・
・

総一達とはぐれてしまった葉月達3人は、今総一達がいる所から比較的近くの別の部屋の中にいた。

総一達と同様に非常食を見つけ、それを渚と咲実が料理を作り、葉月はその間敵がやってこないか見張りをしていた。

見知らぬ女性に襲われ、なんとかあの場を逃げる事には成功したが、その際に葉月は腕に怪我を負ってしまい、咲実にはショックのあまり、あれからずっと無言のままだった。

それでも何とかここまで来た葉月達は、ひとときの休息をとっていた。

渚「咲実さ〜ん、その缶詰を取ってください〜」

咲実「はい・・・」

他人に聞こえないほどのか細い返事をしながら、示された缶詰を手取る。

カラン、カラカラ・・・

咲実「あ・・・」

手に取ったつもりが、力が入っておらず、缶詰を床に落としてその

ままあさつての方向に転がってしまった。

渚「咲実さん……」

咲実が動こうとする前に、渚が転がった缶詰を取りに行く。

葉月はそんなやり取りを見ながら、ため息をついた。

葉月「……もしかしたら、咲実さんが一番、この状況を理解しているのかもしれない」

葉月は今もどこか冗談か間違いだと思い、現実逃避している事を自覚していた。

だが、総一君たちがいない今、僕がしっかりしなくては。

葉月はそう心に誓い、身を引き締める。そして再び入り口の扉の方を警戒する。

一方、缶詰を取りにいった渚は、転がって静止していた缶詰を手にとった。

ぶううん、ぶううん

そこで自身のPDAが振動している事に気づいた。

アラームは鳴っていなかった。つまり今ここにいる人達に知られてはまずい内容なのだろう。

渚は他の2人に気づかれないように、そっとPDAの画面を見た。

そして画面に書かれているメッセージに目を通すと、誰にも気づかれることなく再びPDAをしまった。

そして何事もなかったかのように、咲実の所へ向かった。

渚「咲実さん、じゃがいもは剥きおわりましたか？」

咲実「あ、はい・・・」

咲実はいつもと違い危なっかしい手つきで、やっとじゃがいもを剥くことが出来ていた。

包丁代わりに使っているサバイバルナイフのせいもあるのだろう。渚が包丁のかわりに使おうと提案したのだが、人を殺す道具という認識が咲実の平静さを奪っていた。

そんな咲実を横目で見ながら、渚は料理を作る手を忙しく動かしながら、心の中で呟く。

渚『人は誰だって裏切るのよ。そうよね、真奈美・・・』

渚は咲実ではなく、その先に見えるかつての親友の名を呼んだ。

渚「葉月さーん、食事の準備が出来ましたよ」

葉月「わかった。ご苦労様、渚君」

葉月は見張りもそこそこに、渚達の用意した食事の前まで来て座る。

渚「どうぞ、召し上がれ」

渚はいつもと変わらない表情のまま微笑んだ。

そして3人は食事を囲むようにそれぞれ座った。

葉月「・・・総一君達は無事だろうか」

唐突に葉月が切り出した。

その言葉に、食事もなくに進んでいない咲実がびくつと反応した。

渚「大丈夫ですよお、あの2人なら」

渚はなぜか自信たっぷりにそう答える。

葉月「そうだな、そう思う方がずっと楽だね」

葉月達はそんな会話を交わしながら、つかの間の休息をとっていた。

・
・
・
・
・
・

第7話「嵐の前の静けさ」（後書き）

総一達ご一行と葉月達ご一行。つかの間の平和でしたが、ゲームはそんな彼らにはあまりにも非情で冷酷でした。

ディーラーが仕掛けた策略は、もうすでに始まっていたのです。

次回は第8話「襲撃」再び戦いに巻き込まれる総一達。無事乗り切ることが出来るのでしょうか？来週もお楽しみにっ

第8話「襲撃」

第8話「襲撃」

作・桐島成実

【残りの生存者数・・・11/13人】

現在の状態

「グループA」	P D A	状態	総一との
関係			
御剣 総一	(A)	健康	
陸島 文香	(6)	健康	良好
北条 かりん	(?)	肩を負傷	普通
色条 優希	(9)	健康	普通
「グループB」			
綺堂 渚	(?)	健康	普
通			
葉月 克己	(?)	腕を負傷	普
通			
姫萩 咲実	(?)	健康	普通
長沢 勇治	(?)	??	険悪
矢幡 麗佳	(?)	??	疎遠
郷田 真弓	(?)	??	未接触

漆山 権造 (?) 死亡 知らない

食事を終えた総一達4人は、休息もそこそこに、上の階へ上るべく通路を歩いていった。

先の食事の際、かりんのPDAは『K』^{キング}、優希のPDAは『9』であることが当人の口から語られた。

かりんの首輪の解除条件は「PDAを5個収集する事」である為、総一達のPDAを借りて、なおかつ葉月達のPDAを借りることが出来れば解除は出来るが、問題は総一と優希である。

解除条件どおりに事を進めてしまうと、総一と優希の首輪が外れないことが分かった今、総一達は今後どのように行動していくかを決める必要があった。

文香「とりあえず、おじ様達との合流が最優先、かしらね」

文香は顎に手をあてながら、総一達に同意を求める。

総一「あとは、文香さんの首輪を外す為に、JOKERを見つける必要がありますね」

総一達4人はJOKERを持っていなかった。葉月達が持っているかどうかは確認してない為、やはり葉月達3人と合流する必要がある。

文香「問題は、総一君と優希ちゃんよね・・・」

文香は辛辣な表情で、後ろを歩くなりんと優希を見ていた。

かりん「・・・・・・・・」

かりんは先ほどのショックがまだ抜けきれていないのか元気がなかった。優希もどうしていいか分からない為、2人とも無言のままだった。

こればかりは、今の所どうしようもないのはみんな分かっていたので、3階へ上がる階段の所で、待ち伏せすることにした。

ただ、2階へ上がる際に少年に襲われた事もある為、武器を集める目的で、階段への進路上にある部屋をざっと見渡しながら、先を指していた。

総一「なかなか見つからないものですね・・・」

総一は今までの経緯から、使えるものは真新しいダンボールや木箱に入っていると考え、部屋の中にあるそれらを見比べることで、新たな手がかりを得ようと考えていた。

その方がすべての箱をいちいち確かめるより、ずっと効率的だったからだ。

文香「そうね、PDA用のソフトなんかが見つかるかと期待したけど、あったのといえば、これくらいね」

文香はそう言いつつ自分の腰の部分にぶら下がっているナイフを見た。

結局この階を探索して見つかったのは、大型のコンバットナイフが2本と食料と救急箱だけだった。

他にも大きなハンマーなんかがあったが、持ち運びには適してないと考え、部屋の奥に隠してそのまま置いてきたのである。

そうやっていくつかの部屋を見て周りながら、3階への階段が間近に迫った時、突然総一のPDAからアラームが流れ始めた。

総一「な、なんだ!？」

アラームが鳴ったということは、何かが起こったという合図だけに、総一は思わず身構えた。

よく聞いてみると、鳴っているのは総一のPDAだけで、他の3人のPDAは鳴っていないかった。

総一はPDAを地図として見ていたが、突然画面が変わり、経過時間等が書かれたトップの画面に切り替わった。

トップの画面を見た総一は、一部分が変化していることに気がついた。

総一「文香さん!？」

総一はそう言つてPDAを文香達に見える様に前へ差し出す。

文香「えっ!？」

文香も目を剥いた。変わっていたのはさきほどインストールした残りの生存者の数だった。

11人だった数が、10人に減ったということだった。

優希「どうしたの?お兄ちゃん」

優希と、少し遅れてかりんも総一の持つPDAに視線を向ける。

文香「誰かが、亡くなった・・・」

かりん「えっ!？」

側に寄つてきたかりんと優希も、文香の一言で表情を曇らせる。

総一「一体誰なのでしょう?」

総一は神妙な面持ちで文香に尋ねた。

文香「それはわからないけど・・・、急いだほうが良さそうね」

文香は唇をギュッと噛み締めると、再び階段のある方の通路に目を向ける。

総一達もうなずき、先頭に行く文香の後に続く。

・
・
・
・
・
・

階段のホールの前まで来た総一は、待ち伏せがないかどうかを確かめる為、ホールを覗きこんだ。

幸いそこには人はおらず、隠れるスペースなどもない事を確認した後、安堵の息を漏らす。

総一「急ぎましょう」

総一達は、そう言って階段の前まで一気に駆け抜ける。

そして、階段を上ろうとした総一だが、

文香「ちょっと待って、総一君」

文香が呼び止めた。

総一「なんです？」

総一は階段の一番最初の段に足を乗せた状態で振り返った。

文香「階段上のホールの方で待ち伏せされている可能性もあるわ」

総一「あ、そうですね」

総一はそう言って頭を掻く。

文香「私が先に行って様子を見てくるわ」

文香はそう言って総一を追い抜こうとする。

総一「あ、危険ですよ。俺が」

総一がそう言いかけたが、文香が遮った。

文香「総一君は、かりんちゃん達を守ってあげて」

文香はそう言って総一にウィンクする。

文香の言う守ってとは、背後から襲われることを警戒して、という意味だけではない。

元氣のないかりん達を支えてあげて、という意味もあるのだろう。

それを悟った総一は反論はしなかった。

総一「わかりました」

とは言っても、ほんのしばらくの間だけの話だが。しかし油断するわけにはいかない。

優希「文香お姉ちゃん・・・」

総一は心配するかりん達の事を気にしつつ、背後のホールに注意し

た。

やがて、階段から降りてきた文香は、無言でうなずき、総一達を手招きする。

危険はない。そういう事だろう。

こうして、総一達は何事もなく3階へたどり着いたのであった。

・

・

・

ここから先は先ほどやってきた事と同じである。部屋の中を調べつつ、4階への階段を目指すべく、総一達はやや急ぎ足で通路を歩いていた。

そして、最初に見つけた部屋に入るべく、総一がドアノブに手をかけた。

カチリ

その時、硬い金属が接触したような音が通路の奥から聞こえてきた。

文香「!?!」

最初に反応したのは文香だった。

バン！

そして何かが軽く破裂するような音が続いた。

文香はとっさに総一の身体を掴み、床に押し倒す。

ヒュッ

総一がいた位置の空気を切り裂く、そして、

ガキーン

背後の壁に何かがぶつかった。

総一「なっ！い、今のは？」

突然の状況に戸惑う総一だが、文香が叫んだ。

文香「みんな逃げて！」

文香はそう言い、恐らく飛んできたであろう方向を睨み付けた。

総一も、その目線を追う。

総一「な、そんな、まさか・・・」

総一はその視線の先に映る人物を見て啞然とした。

その人物は総一にも見覚えがあった。

総一「麗佳さん!？」

名を呼ばれた麗佳は、険しい表情を変えずに、右手に持つものを総一達に向けていた。

黒い塊のようなもの、あれは 銃!？

総一がそう考える前に、先に起き上がった文香に手を引っ張られ、慌てて立ち上がる。

文香「ここには狙い撃ちにされるわ、急いで逃げるのよ!」

文香は叫ぶが、総一はいまだに信じられなかった。

総一「麗佳さん!何故ですか!？俺達が戦う理由なんて、どこにもないでしょう!？」

総一は麗佳に対して必死に訴えかけた。

よく見ると、麗佳の白いワンピースの腰の辺りの部分が赤く染まっていた。

怪我をしてるのか!？それとも誰かの

力チッ

その時、麗佳の持つ銃に弾が装填される音が聞こえ、考えを中断した。

総一「いや、今は考えてる時じゃない！」

総一は、そう言って麗佳からかりん達に視線を移した。

総一「逃げよう！」

かりん「う、うん」

かりん達もうなずきつつ、一斉に元来た道を引き返した。

麗佳「！？待ちなさいっ！」

バン！

その時、麗佳の持つ銃から、2発目が放たれた。

銃弾は走り出したかりんの真横を通り過ぎる。

かりん「わっっ！？」

かりんは銃弾の恐怖に一瞬身を硬くするが、すぐに走り出した。

走り続ける総一達を追いかけつつ再三銃を撃つ麗佳だったが、銃の扱いに慣れていない上に、走りながら、なおかつ動き続ける総一達をなかなか捉えられず、銃弾はすべて外していた。

しかも、つい先ほど長沢に騙し討ちを受けた際に負った傷の、今も感じる鈍い痛みで顔をしかめていた。

それでもなおかつ総一達を狙ったのは、襲われて必死で逃げ延びて

から幾分しか時間が経ってないこと、おかげで緊張もピークになり、考えるより先に銃を構えたのだった。

やらなければ、やられる。

麗佳の頭はそのことで一杯だった。

何度が銃撃を受けながら、それでも追いかけてくる麗佳に対し、必死で逃げていた。

だが、負傷しているとはいえ、大人である麗佳に対し、総一達は優希がいる。

優希1人を置いていくわけにもいかないのです、当然走る速度は総一達の方が遅い。

そのせいか、度々差を縮められては、銃撃を受けていた。

優希「あっ!!」

その時、優希が足をもつらせ、床に前のめりに転倒する。

かりん「優希!」

総一「くそっ!」

他の3人も、慌てて優希の元に駆け寄る。

麗佳はそれをチャンスと思い、優希に的を絞る。

総一「くっ！」

総一はとっさにそれに気づき、優希の前に身を投げ出す。

麗佳「逃がしはしないわ！」

バン！

距離が近くなったこともあり、麗佳の射撃は正確だった。

総一「ぐっ、ぐあぁっ！」

銃弾はとっさに庇った総一の腕を貫いた。

そのせいで、血が勢いよく噴出す。

優希「！！？」

優希はあまりのショックに顔をこわばらせる。

文香「総一君！？」

文香は慌てて総一の元に駆け寄ると、腰にぶら下げていたコンバットナイフを手を持った。

そして、それを麗佳に投げつける。

ヒュッ

射撃に集中していた麗佳は、ナイフを投げつけられたことに反応出

来ず、身動き一つしなかった。

カシィン

しかし、ナイフは麗佳の真横を通り過ぎ、長いツインテールの髪を少し切り裂いただけで、壁にぶつかった。

わざと外したのか、それとも手投げ式でない大型のナイフのせいなのか、この時は判別がつかなかった。

かりん「優希！早く！」

かりんは優希の手を取り、今だ固まっている優希を立ち上がらせる。

だが、優希の足に力が入らず、崩れ落ちそうになった所をかりんに支えられる。

総一「ぐっ！！」

総一のそのうめき声で、優希は気を取り戻した。

優希「お、お兄ちゃん！」

そして、状況を飲み込んだ優希は怯えを感じつつもそう叫んだ。

文香は瞬時に横目で総一達がまだ走れる事を悟り、再び麗佳に目を向けた。

ナイフが顔の近くを通った恐怖に、麗佳は今も顔を強張らせていた。

文香「みんな、いいから早く逃げて！」

文香はそう言い、すぐ側にいる総一の腰に手を持っていき、そこにあるナイフを鞘から抜いた。

総一「つく、早く逃げよう！」

総一は怪我をした腕には気にも留めず、優希を半ば抱えるようにして、再び走り出した。

考えている場合じゃない

それはとっさの判断だった。

かりんもそれに続く。

最後に文香が後ろに振り向く際、ナイフを再び麗佳に投げつけた。

麗佳「！」

麗佳はとっさにナイフを避けた。その際銃の引き金に掛かっていた指に力が入り、再び銃から弾が発射される。

バン！

しかし、狙いの定まっていない銃撃は、あさつての方角に飛んでいた。

文香はすぐにきびすを返して総一達の後を追った。

麗佳「くっ・・・!」

麗佳は再び銃を向けようとしたが、さっきナイフを避けようと身体を捻った際、腰の負傷が悲鳴をあげた。

その痛みに耐え切れず、その場にうずくまる。

そうしている間に、総一達は麗佳の視界から姿を消していた。

・
・
・
・
・

命からがら逃げ延びた総一達は、総一の負傷した腕を手当てするべく、近くの2つ以上ドアがある部屋に逃げ込んでいた。

こうすれば、いざ追いつかれてももう一方のドアから逃げる事が出来る。

文香はドアのすぐ脇にある家具をドアの前に置き、すぐには入れないようにした。

あの時と逆の立場になるとはね・・・。

あの時とは、最初に出会った頃、総一と文香が逃げる麗佳を追いかけていた時のことだった。

あの時は麗佳がドアの前に家具を置いて、そのまま逃げ去った。

そう考えると何とも皮肉な話だった。

一方、負傷した総一をかりんが必死で手当てをしていた。

幸い動脈を傷つけられたわけではなく、弾も貫通したので、出血は思ったほどなかったが、やはり痛みはずっと続いていた。

優希「お兄ちゃん、ごめんなさい、私のせいでっ……」

優希はそんな総一を見てずっと泣いてすがっていた。

総一はそつと優希の頭に手を置いた。

総一「いいんだ、優希が無事だったんだし」

総一は痛みを表情に出さず、無理にでも笑顔を作った。

だが、優希はそれが心配かけまいとする総一の思いやりだということに気づいていた。だからなおさら自分の無力さにあふれんばかりの悲しみとやるせなさを感じていた。

優希「でもっ、でもっ……」

優希は言葉に詰まりつつも、なおも声をかけようとする。

総一「優希はまだ子供なんだ。だから俺達に甘えてもいいんだぞ？」

優希「けど、うつ、ごめんなさい・・・」

なおも謝り続ける優希に対し、頭に乗せた手を動かし、わしゃわしゃと頭を撫でた。

総一「俺としては、優希が笑顔でいてくれる方が嬉しいな」

許しを請う優希を見ると、悲しみを感じてしまう。

優希「ひっく、お兄ちゃん」

優希は必死で泣くのをやめようとしていた。

かりん「優希・・・」

その健気さに、かりんは思わず手当ての手を止め、優希に暖かみとも悲しみともとれるような、そんな複雑な視線を向けていた。

文香「優しいのね、総一君は」

文香はそんなやりとりをする総一に微笑んだ。

総一「・・・そんなんじゃ、ありませんよ」

総一はその時だけ悲しみの表情を作った。しかし、それもつかの間で、再び優希の頭を撫でていた。

あいつとの、約束だからな・・・。

総一はこの時だけ、視線を遠くの方に向けていた。

文香「それでも、優しいことに変わりはないわ」

そんな総一に、文香は優しく見つめていた。

・
・
・
・
・

第8話「襲撃」（後書き）

敵になってしまった麗佳、負傷した総一。だが、その分総一達4人の絆はますます強くなっていくのでした。
しかし、この特殊なゲームは絆を生むこともあれば、絆を失うこともあるのです。

次回は第9話「暗転」徐々に物語の全容が明らかになっていきます。
次回をお楽しみに

第9話「暗転」

第9話「暗転」

作・桐島成実

【残りの生存者・・・10/13人】

現在の状態

「グループA」 関係	御剣 総一	(A)	腕を負傷	状態	総一との
	陸島 文香	(6)	健康		
頼	北条 かりん	(K)	肩を負傷		
好	色条 優希	(9)	健康		
好					
「グループB」	綺堂 渚	(?)	??		
通	葉月 克己	(?)	??		
通	姫萩 咲実	(?)	??		
	長沢 勇治	(?)	??		
	矢幡 麗佳	(?)	??		
				敵対	
				険悪	
				普通	
				普	
				普	

郷田 真弓	(?)	??	未接触
漆山 権造	(?)	死亡	知らな
い			

総一の腕の手当てが終わった4人は、素早く部屋を後にしていた。

ゲーム開始から既に32時間が経過し、1階が進入禁止となっていた。

総一の怪我もさることながら、4人ともゲーム開始以来まとまな睡眠を取っていない為、疲労は蓄積するばかりであった。

だがしかし、近くに襲ってきた麗佳がいる以上、安心して休む事など到底できる事ではなかった。

総一達は最後に麗佳がいた場所から離れるように北の方角に真っ直ぐ進んでいた。4階へ行く階段のある場所へは、多少迂回する事になってしまいが、仕方ない。

総一「ふう・・・」

総一は軽くため息をついた。腕の怪我の影響で、身体も精神も疲弊していた。

手当てはきちんとされているので、熱を出して倒れることはなかったが、さすがに辛いものであった。

かりん「御剣、大丈夫？」

総一「のすぐ隣にいるかりんが他の2人に聞こえないようにそつと尋ねる。

総一「ああ、なんとか」

総一とかりんが並んで先頭を歩き、その後ろに優希、麗佳の存在を考えると、後ろからの奇襲も十分考えられるので、後ろは文香に警戒してもらっていた。

とはいえ、ナイフを失い、丸腰同然である今の総一達にとって、誰にも会わない事を祈るばかりであった。

こうして、ある程度の距離をとるまで、総一達は早足で歩き続けた。

その間、誰にも会わなかったのは幸いと言えるだろう。

そして、襲われた場所から結構な距離が離れた所から、再び部屋を探索し始めた。

総一「やはり、武器は必要なんですかね」

総一は同じく木箱を調べている文香にそう呟いていた。

文香「不本意だけど、仕方ないわ。身を守るためにも必要だと思うわ」

交渉するにしても、武器がない状態では人数では勝っていても、とても対等とはいえない。

やはり牽制する為にも武器は必要なのだった。たとえそれが戦いを望まぬ総一達にとっても。

一方的にやられるわけにはいかない。それもまた総一達の思いでもあった。

総一「けど、ここにある武器って・・・」

恐らく、いや間違いなくあるのだろう。麗佳が持っていたのと同じ様な銃が。

総一のその考えを見透かしているのだろう。文香はこう答えた。

文香「銃は相手を撃つばかりとは限らないわ。威嚇の為に使うことも出来るってわけ」

総一「それは、わかってるんですけど」

総一はそれでも、銃を撃つことを躊躇っていた。

しかし、その思いをあざ笑うかの様に、それはあった。

総一「まさか！」

ずっしりとした重み。そしてその形状。間違いなく拳銃そのものであった。

銃がある事は覚悟していたが、実際に手に持つてみると、やはりその持つことの意味の重さを実感していた。

同じくダンボールを探していたかりんと優希も、総一の手を持つ銃を見て思わず唾を飲み込んだ。

総一「ずいぶんと重いんですね・・・」

総一は驚いた顔のまま、率直な感想を述べた。

文香は探していた手を止め、総一の方を向いた。

文香「そうね、でも総一君」

文香は真面目な顔をして総一に告げた。

文香「銃は使っても、その重さは忘れないこと。いいわね」

文香のその言葉に、いつもの明るさはない。

文香「忘れてしまったら、それは不幸を呼び寄せる結果にしかないわ」

文香が言いたい事は、銃を持つことの意味だ。銃を持ち、そして撃つことに何のためらいも無くしてしまうと、それは人を傷つける為に使う事を意味してしまう。

文香は武装をすることは受け入れても、それで人を傷つけることをひどく嫌っていた。

文香の真剣な眼差しを受け、総一は銃をみんなを守る為だけに使うことを決意した。

総一「・・・わかりました」

総一はうなずくと、文香は真剣な表情を崩して微笑んだ。

文香「よろしい」

その口調は、いつもの文香に戻っていた。

そして、再び探索を開始したのだった。

・
・
・
・
・
・

文香「ん、これは？」

いくつかの部屋を回った時、文香が何かを発見したようだ。

文香はそれをダンボールから取り出した。それは以前見かけたPD A用のソフトであった。

だが、以前と違うのは、同じプラスチックの箱が2つあったこと。

そして、それがコードのようなもので繋がれていることだった。

総一「これは・・・？」

文香はその箱に書かれた文字を読み出した。

文香「Tool:NetworkPhone」？」

箱にはそう書かれていた。

文香「うーん、通話が出来るって事かしら？」

総一「とりあえず、インストールしてみましようか」

総一はそう言い、箱の端子の片方を総一のPDAに、もう一方を文香のPDAにそれぞれ差し込んだ。

【インストール完了】

画面にそう表示され、総一達は端子をPDAから抜き取り、PDAを起動した。

すると、機能一覧に、新たな項目が追加されていた。

総一はそのボタンを押すと、突然PDAからいつもの電子音と違う、目覚ましのベルとでもいふべき甲高い音が鳴り出した。

総一「わっ」

驚いた総一だったが、すぐにベルは止み、かわりに雑音が少し聞こ

えてきた。

総一はその雑音に集中していると、

文香『総一君、聞こえる?』

すぐそばにいる文香の音が、本人からだけでなく、PDAからも雑音混じりで聞こえてきた。

総一「あ、そっか、そういうことか」

これはいわば携帯電話みたいなもので、PDA同士で通話が可能なのだろう。

かりん「けど、これってどのような時に使うのかな?」

そばにいて成り行きを見ていたかりんは首をかしげる。

文香「きっと、葉月さん達との時のように分裂した場合に使うんじゃないかしら」

総一達と葉月達とが二手に離れてしまった場合意思疎通の手段として使われるのだろう。

文香「けど、今の段階では意味はないわね」

たしかに、今は隣同士にいたので、普通に会話が出来る。出来ればこの機能を使わなくてはならない事態は避けたいものだが。

さらに探索を続ける内に、総一の持つ銃と同じ口径の銃を2つ手に

入れた。それを文香、かりんの2人が持つことにした。

・・・総一としては、本来ならかりんにこんな物騒な代物を持たせたくはなかったが、かりん自身が持つと強く言うので、仕方なく持たせたのだった。

・
・
・
・
・

そろそろ適当な場所で休息を取ろうと、総一達は休めそうな部屋を探していた。

慎重に足を進める総一達だったが、ある部屋に入ろうとした時、突如全員のPDAが鳴り始めた。

総一「わっ、な、なんだ!？」

驚いた総一は思わず叫ぶ。

文香「しっかりしてよね、総一君」

後ろにいた文香が思わずそう漏らす。

・・・アラームが一斉に鳴り出すのはこれで2度目だが、どうにも慣れないな・・・。

総一は心の中で苦笑する。

かりん「あ、戦闘禁止エリアって書いてある」

PDAの画面を見たかりんは、目の前にある部屋のドアを交互に見る。

総一「もしかして、この部屋が？」

文香「どうやら、そうみたいね」

やっと休息をとれる。その安堵感で全員緊張していた表情をほころばせた。

総一「・・・ん？」

何気なしに通路の先に視線を向けていると、その先にある十字型の通路の右側から突如人影が現れた。

総一は安堵した直後の突然の登場に思わず身を固くしたが、よく見るとそれは総一達の知る人物であった。

総一「葉月さん！」

それは総一達がずっと探していた仲間の姿だった。総一は十字路の角を曲がって後ろに背を向ける葉月の名を呼んだ。

葉月「！？、総一君か！？」

葉月は総一達がそこにいることに気づき、こちらを振り向いた。

その声と表情は、なぜか切迫しているように映った。

だが、それに気づかずに総一は喜び勇んで葉月の元へ駆けていった。

文香「おじ様！無事なの！？」

後ろにいる3人も総一のあとに続いた。

文香も葉月の無事を確認すると、安堵の表情を浮かべた。

だが、その喜びは一瞬で吹き飛ばされてしまう。

総一はその光景に一瞬目を疑った。

葉月は腰にある銃を抜き、右手に構えた。その先にいる総一や文香に向けて。

総一「は、葉月さん・・・？」

総一は思わず立ち止まり、そうつぶやくのがやっとだった。

そして一瞬の内に頭の中が真っ白になった。

葉月「総一君・・・」

葉月は銃口を総一に向けたまま、総一の名を呟いた。

葉月の持つ銃は揺れていた。体中が震え、額には汗が浮かんでいる。

かりん「総一!？」

優希「おにいちゃん!？」

後ろから追ってきたかりんと優希は、そのただならぬ雰囲気息を呑んだ。

が、葉月が総一に向かって銃を構えているを見た文香は、腰にあった銃を手に持ち、葉月に向けた。

文香「おじ様!どういづつもり!？」

文香の初めて聞く鋭い声で、総一は我にかえった。

銃を向けられた葉月は、一瞬視線を文香の方に移したが、再び総一の方を向いた。

総一「な、ど、どうしてですか!？葉月さん!？」

総一は戸惑って葉月を問いただした。

葉月はしばらくじっと総一を見ていたが、やがておもむろに口を開いた。

葉月「渚君が・・・」

葉月はそこで一旦台詞を切った。

総一「渚さんがどうしたって言うんです!？」

葉月から渚の名前が出てきて、総一は気が付いた。

そういえば一緒にいるはずの渚さんと咲実さんはどうしたんだろう。

総一達と葉月達が最後に居た時は、他の3人はまだ一緒だったはず。

その疑問はすぐに当人の口から聞くことになる。

葉月は苦悶の表情を浮かべながら、口を開いた。

葉月「渚君が……咲実君を……」

そして葉月は搾り出すようにその一言を発した。

葉月「……殺した」

総一「！？、つな！！」

文香「なんですって！？」

総一と文香は衝撃の告白に耳を疑った。渚さんが、咲実さんを、なんだって！？

自分の頭の中で今聞いた言葉を反芻する。だが浮ついた思考は、何度も空回りをした。

渚さんが、咲実さんを……殺した！？そ、そんなバカな！？

かりんと優希は、総一から仲間がいることは聞かされていたものの、会ったことはなく実感はなかったが、総一と文香は底知れぬシヨックを受けていた。

総一「な、なぜです！？どうしてそんなことに！？」

総一は葉月を向かってそう訴えた。

すると、葉月はややうつむき加減に答えた。

葉月「分からない。3人で、食事をしていた。何の前触れもなく、渚くんが、ナイフを持って、咲実さんに向かって・・・」

そう、まるで料理の皿を持って『どうぞ』と言わんばかりの動作で、かつて食材を切るのに使ったサバイバルナイフを咲実に突き立てたのだ。

そして、あたりは血まみれになった。3人で食べていた料理も、渚のナイフを持つ手も、そして刺された咲実本人も・・・。

総一は信じられなかった。葉月のたちの悪い冗談だと必死で思い込もうとした。

だが、葉月のその切羽詰まった様子は、その事が事実であることを示していた。

総一「そんな、バカな・・・！」

葉月「……すまない」

葉月は誰に言うわけでもなく、そう呟いた。そして、銃を向けたままじりじりと後退していく。

文香「動かないで！」

総一と同じく驚きに表情を染めていた文香だったが、葉月が銃を向けていることを思い出し、銃を構えなおした。

だが文香のその言葉にも耳を貸さず、ある程度の間を取ったところで、まるで総一達を避けるように、その場を立ち去った。

・
・
・
・
・

通路を右往左往しながら走り続ける葉月には、先刻起こった惨劇が脳に焼きついていた。

自分の娘と同じぐらいの年齢の娘が、人を殺したという事実が。その時のまるで変わらないいつもの表情が、だがしかし、凍りついたような冷たく深い色をしたその瞳が。

その一連の出来事が、葉月を完全に混乱させていた。

そしてその出来事後、銃を見つけてさらに動揺していたとはいえ、総一達に銃を向けてしまった自分が。

葉月は絶望と後悔の念に囚われていた。

葉月「・・・もしかしたら、もう自分はどこかおかしくなってしまったのかもしれない」

葉月は、もはや自嘲気味にそう呟いた。

すべてが日常からかけ離れていた。その状況が、自分と周りを狂わせてしまったのではないか？

もうどうしようもないくらいに。

葉月はもう何か何なのか分からなくなってしまった。

葉月は逃げるその足を緩めることなく、必死であるものを探した。

銃を持つ右手は動いてくれなかった。どう動かしてもいいかわからないくらい固まっていた。

仕方なく、空いていた左手で自分の胸ポケットをまさぐり、それを手に取った。

葉月「僕は、一体どうしたらいい・・・？」

それは家族の写真だった。葉月は、妻と娘に助けを請うようにそう呟いた。

そんな葉月だったから、自らに危機が迫りつつあることを知る由もなかった。

麗佳「……………」

葉月の背後から、麗佳は銃を構えて狙いを定めていた。

トリガーに指を引っ掛け、カチリとわずかに音がする。

バン！

そして、銃から弾が放たれた。

・
・
・
・
・

第9話「暗転」（後書き）

殺されてしまった咲実、殺した渚、そして疑念と絶望に囚われたま
ま麗佳に襲われた葉月。失われてしまった絆は、もう元には戻らな
いのでしょうか？

そして残された総一達の命運はいかに！？

次回は第10話「想い」お楽しみに

作者 本作とは別のシナリオを展開する為とはいえ、渚ファンか
らクレームがつきそうな気がするような・・・ガクガクブルブル

第10話「想い」

第10話「想い」

作・桐島成実

【残りの生存者・・・10/13人】

現在の状態

「グループA」			PDA	状態	総一との
関係					
御剣	総一	(A)		腕を負傷	
陸島	文香	(6)		健康	信
頼					
北条	かりん	(K)		肩を負傷	良
好					
色条	優希	(9)		健康	良
好					
?					
綺堂	渚	(?)		??	?
悪					
葉月	克己	(?)		??	険
長沢					
勇治		(?)		??	険悪
矢幡					
麗佳		(?)		??	敵対

郷田 真弓	(?)	??	未接触
姫萩 咲実	(?)	死亡	普通
漆山 権造	(?)	死亡	知らな
い			

葉月が去り、残された4人は鎮痛な雰囲気をかもし出していた。

特に総一はそれが顕著で、絶望と後悔に囚われ身動き一つ出来ない状態であった。

その為文香に引つ張られる形で、すぐ目の前にあつた戦闘禁止エリアの部屋に入っていた。

また間に合わなかった

総一はその思いで一杯だった。『あの時』もあいつと一緒に付いて行かなかったからあいつを助けることが出来なかった。

今もそうだ。葉月さん達とずっと一緒にいればこんなことには……！

文香「……君、総一君！」

文香が呼んでいる声が耳に入る。だが総一には反応することが出来なかった。

どうして、こんなことに・・・。

総一が後悔の言葉を繰り返していると、突然文香に両肩を掴まれた。

そして、2、3度前後に揺さぶられる。

文香「しっかりしなさい！総一君！」

総一はまるで操り人形のようにガクガクと頭が動く。

ピシャン

文香は思わず総一の頬を叩く。

そして、総一の目を無理やり自分に向けさせると、口を大にして訴えた。

文香「気をちゃんと持ちなさい！あなたがしっかりしなくてどうするの!？」

総一はしぶしぶといった感じで口を動かす。

総一「俺は、結局誰も救えなかった・・・」

総一のその呟きを文香が遮る。

文香「そんなことないわ！総一君。あなたは私やかりんちゃん、優希ちゃんを助けた。お互いに支えあってきたじゃない！」

文香は必死で総一に叫ぶ。それは文香の素直な気持ちであった。

文香「あなたがいないと、一体誰がかりんちゃん達を助けるの！」

総一「・・・！？」

かりんと優希を助ける。その事が総一の瞳にわずかながら光が宿った。

総一「けど、助けられるかどうか・・・」

なおも続けようとする総一の口を、文香は人差し指をピンと立てて唇に当てた。

そして先ほどの激しい叫びを伏せ、優しく語り掛ける。

文香「後悔するのはいつだって出来る。今は行動する事。わかるでしょう、総一君」

そして包み込むように微笑む。

総一「文香さん・・・」

総一はそんな文香をじっと見つめていた。

本当は文香さんだって辛いはずなのに・・・。

なのにそれを表に出さず、必死に総一を励まそうとしている。

強い人だな。

総一は率直にそう思った。

総一「すみません、文香さん」

文香「わかればいいのよ、総一君」

総一に笑顔が戻り、文香もそれに答えるように微笑んだ。

2人はそうやってしばらくお互いを見つめ合った。

かりん「あ、あのさ」

だから突如横から顔をだしたかりんに総一は驚いた。

総一「え、あ、かりん？」

総一は思わず飛び出しそうになったが、すぐ気を取り直してかりんの方を向いた。

一緒にいたかりんと優希も総一を心配し、なりゆきを見守っていたが、総一が気を取り直してくれたので、思わず声をかけてしまったのであった。

総一「え、えーと、なんだい？」

かりん「良い雰囲気の所悪いんだけどさ」

総一「へっ?」

総一は素っ頓狂な声を挙げる。

文香「そんな風に見える?」

総一「ち、ちがう。ちがうって!」

かりんの言う意味が分かり、総一は慌てて否定しようとするが、文香はまんざらでもないのか、かりんの言う事にのってきた。

文香「あら?私じゃ不満?」

総一「って、そうじゃないでしょう!」

優希「ねえ、かりんお姉ちゃん。良い雰囲気ってなあに?」

優希がそんな事を聞くものだから、総一の顔は心なしが赤くなっていた。

総一「ほ、ホラ、せっかく戦闘禁止エリアに来たんだし、早く休憩しないと」

総一はあわててまくし立てる。

かりん「ふーん、なるほど、そういうことかあ」

かりんは納得したように何度もうなづく。

総一「こ、コラ、かりん！」

総一はたしなめようとするのだが、

文香「ふふっ　そういうこと」

そう言つて文香は笑顔のまま総一の腕に密着して自らの腕を組む。

総一「文香さん！？」

総一達4人は、こうしてやっと笑顔を取り戻したのだった。

・
・
・
・
・

かりんと優希は、部屋の奥にある寝室のベッドの中にいた。

今は総一と文香が、ドアの前で見張りをしている。

4人が話し合つた結果、総一、文香、かりんの3人で交替して見張りをする事にした。

優希は銃を持っていなかったので、ゆつくりと休ませることにした。当の本人は申し訳なさそうだったが、みんなはそれが一番いい言つてそう決めたのだった。

かりん「あの2人、今頃良い雰囲気なんだろうなあ」

かりんの顔から思わず笑みがこぼれる。やはりかりんも年頃の女の子なのだろう。その手の話には興味があった。

優希「ん〜？」

優希が間の抜けた声をあげる。

かりん「寝れないの？優希」

かりんは顔だけ優希に向け、尋ねる。

優希「うん、本当は休まなきゃいけないんだけど」

かりん「私も同じよ」

この建物で目覚めてから、色々なことがあった。優希と出会い、男の死体を発見し、クロスボスを持った少年と対峙し、そこで総一と出会い、麗佳に襲われ、総一達のかつての仲間と対立して・・・。

まだ子供の分類に入るであろうこの2人には負担が大きすぎた。そのせいで脳が完全に覚醒してしまっているのだろう。

いまだ抜けきらない緊張を振り払うかのように2人は話し始めた。

優希「ねえ、お姉ちゃん」

かりん「ん？なあに？優希」

優希「どうしておねえちゃんや総一お兄ちゃん達は私を助けてくれるの？」

かりん「えっ？」

かりんは目を丸くする。だが優希は真面目そのものだった。

優希「私は、お姉ちゃん達にとって足手まといにしかなくてないと思うの」

かりん「そ、そんなこと・・・」

かりんは慌てて否定しようとするが、優希はなおも続けた。

優希「なのに、総一お兄ちゃんは私を庇ってくれたり、かりんお姉ちゃんは私を引っ張ってくれたり・・・」

よく見るとかりんを見つめる優希の目に、涙が浮かんでいることに気づいた。

かりん「それは・・・」

かりんはどう答えるべきか迷ったが、素直な気持ちをそのまま伝えるのが良いと判断した。

かりん「それは、きっと優希のことが好きだからだと思っよ」

優希「好きだから・・・？」

優希はそう聞き返す。

かりん「そう。私も御剣も文香さんも、みんな優希のことが好きな

の。もし優希が悪い子だったら、きっと誰もここまで助けなかったと思うな」

優希「あ……」

きっかけは別の理由だったが、それは偽りのない思いだった。かりんがここまで頑張ってこれたのも、優希がいたからこそだった。

かりん「私ね、血を分けた妹がいるの」

優希「妹？」

かりんはゆっくりと思い出すように語りだした。

かりん「両親は去年亡くして、私と妹だけが残ったの。でも妹、かれんって言うんだけど、かれんは病気で」

優希「病気……」

かりん「そう。今は呼吸器を付ける状態だから会話することも出来なくて」

だから、こんな親しく会話することなんかずっと無かった。だからかりん自身溜め込んでいるものがあつたのだろう。

かりん「海外ならかれんの病気を治せるんだけど、その為には莫大な治療費が必要で、私にはどうすることも出来なくて……」

かりんの目には自然と涙があふれてきた。妹の危機に自分はあまりにも無力だった。

かりん「だから、このゲームに勝てば賞金が貰えることを知って、私は……。けど……」

かりんは包み隠さず優希にすべてを話した。かりんにとって一番話せるのは妹と年が近い優希だったから。

かれんと会話が出来なくなった虚しさを、優希に埋めてほしい。かりんは無意識の内にそう思っていた。

優希「大丈夫だよっ！」

優希はそんなかりんに優しい笑顔を向けた。

かりん「え？」

かりんは一瞬声を詰まらせたが、優希は淀みなく答えた。

優希「私が無事ここから出られたら、賞金は全部かりんお姉ちゃんにあげる」

かりん「えっ！？」

かりんは驚きの表情を浮かべた。それは思いもなかった一言だったからだ。

優希「総一お兄ちゃんや文香さんにも、私がお願いして賞金を分けてもらうようをお願いするから」

優希「だから泣かないで、お姉ちゃん」

最初に泣いていたのは優希のハズなのに、優希なりにかりんを励まそうとしていた。

かりん「優希・・・、う、ううつ」

優希のそんな健気な言葉に、かりんは目に涙を一杯ためて泣き出した。

優希「お、お姉ちゃん!？」

優希は慌てるが、かりんは今までに感じたことのないほどの感謝の気持ちであふれていた。

かりん「う、うわあああつ、優希、優希い」

かりんはとめどなく溢れる涙を拭おうともせず、泣き続けた。それは嬉し涙だった。ずっと1人で抱えてきた事を、優希が共に支えてくれたから。

優希はベッドから出て、かりんの元に行き、優しく頭を撫でた。

優希「だから頑張つて生きて帰ろう。お姉ちゃん」

優希は気丈にも、そうやってかりんと心を一つにした。

同時にかりんの心の中で、私は絶対に優希と一緒に生きてここから出ると、そう決心した。

・
・
・
・
・
・

総一達4人は状況の整理と、今後の方針を話し合った。

参加者は、まず総一、文香、かりん、優希の4人。

仲違いをした葉月、麗佳、そして葉月の話が真実なら渚の3人。

最初から敵の、総一達は名も知らぬ長沢。

そして死んでしまった2人。

いまだ出会えていないのが3人。

しかし、PDAには既に3人死んでいると表示されている。

葉月、麗佳とはその後会っているので死んでいない。とすると、渚か例の少年。もしくはまだ出会っていない3人の内の誰かが亡くなったということになるが・・・。

総一「とりあえず、6階まで上がって、そこの階段を見張るのがいいと思います」

かりん「他の階の階段を見張るより、6階の方が確実に会える。ということ？」

文香「そうね。かりんちゃん的首輪を外す為にはPDAの収集が必

要だし、私もJOKERを探さなくてはいけない。必然と交渉する必要があるわけだし。それに・・・」

文香はそう言って総一と優希を交互に見た。

文香「2人の首輪を外す方法も探さなきゃいけないし、ね」

こうして、4人は早足に4階への階段へと歩んでいったのであった。

・
・
・
・
・

文香「ふう、やっと4階ね・・・」

階段を上りきった文香は、ため息交じりにそう呟く。

総一「どの階も、コンクリートの通路ばかりなんですね・・・」

味気ない通路を下の階でも見てきた為、イマイチ4階へ上がった実感がなかった。

総一「このまま無事に終わるといいんですけど・・・」

それはその場のみんなの総意であった。

4階に何が置かれているかが気になり、いくつかの部屋を調べるこ

とにした。

文香「予想はしてたけど、ひどいものね・・・」

最初に見つけた部屋は、総一達の持っている銃より径が大きい銃やオートマチック式の銃やサブマシンガン等が、木箱に溢れんばかりの量が敷き詰められていた。

他にも日本刀や斧、果てはチェーンソーまである。

総一「なんてこった・・・」

総一は思わず天井を見上げる。この上には一体何があるのだろう。そんな不安に駆られていた。

これらの武器では、間違いなく相手に致命傷を与えてしまう。総一達はそれを望んでいない為、今ある拳銃と同じ経口の弾だけを補充した。

他にも、PDAのソフトを2つ発見した。

1つ目は疑似GPS機能で、自分の現在位置と進行方向を地図上に投影

するものだった。

今までは総一達の記憶と建物の構造を頼りに自分の現在位置を確認していた為手間がかかったが、これにより地図を見るだけで自分の位置が分かる。

このソフトは文香のPDAにインストールした。

もう一つはPDAの現在位置を検索して地図上に投影するものだった。

PDAの機能を分散させる為に、優希のPDAにインストールした。

このソフトは検索時のみとはいえバッテリーの消費が多い為、首輪を条件通りに外しようもない優希のPDAにしたのだった。

優希「うん、やってみるよ」

そう言いさっそく検索をかけてみる。

優希「あっ」

かりん「どう?」

検索が終了し、地図上にPDAの位置が投影される。

優希「私達のいる4階は、えっと、向こうの方にPDAが2つある」

総一達のいる場所から少し離れた場所にPDAが2つ同じ場所にあった。

かりん「と、いう事は・・・」

文香「1人がPDAを2つ持っているか、2人が協力しているかのどちらかという事になるわね」

文香は適切に状況を把握した。この4階にはそれ以外の反応がなかった。

総一「接触してみます？どの道交渉する必要がある訳ですし」

総一はそう提案する。

文香「いきなり接触するのは危険だね。まず遠くから様子を伺って話しが出来そうなら交渉してみましよう」

たしかに、相手が問答無用で襲ってきた麗佳や例の少年なら交渉する余地はない、か。

こうして総一達はPDAの反応があつた場所に向かつたのだつた。

・
・
・

総一達は通路の角から向こう側の様子を覗きこんだ。

視線の先の方に5階へ行く階段が遠目から見ることができた。

どうやらこのPDAの持ち主は5階の階段を目指していたようで、ちょうど階段の前で追いつくことができた。

そこには2人の人影が見えた。

1人はがっしりとした体格の、落ち着いた風貌を持つ男性だった。

そしてもう1人は・・・。

総一「麗佳さん!？」

総一達は驚きを隠せなかった。そこに麗佳が、しかも他の人物と一緒にいるとは思ひもなかったからだ。

どうやら何か話しているようで、総一はそつと聞き耳をたてた。

高山「それで、これからどうする?」

その男性、高山は側にいる麗佳に声を掛けた。

麗佳「・・・・・・・・」

対する麗佳は、鋭い眼差しで高山を凝視していた。

高山「俺を警戒するのは良いが、まわりの警戒も怠るな」

高山は表情一つ変えずにそう答えた。

高山「敵はどこからやってくるかわからんだ。今も虎視眈々と狙っているかもしれん」

高山のその一言に思わずギョっとした総一達だったが、どうやら総一達がいることに気づいているわけではないようだ。

麗佳「・・・・・・・・」

しかし麗佳も変わらず鋭い視線を向けたままだった。まるでまわりの敵より高山を敵視しているようだ。

ほんの数秒、無言の状態が続いた。

やがて高山はかるくため息をついて階段の方に歩みだした。

高山「お前が何のPDAを持っているかはわからん。だが協力すると決めた以上、俺の首輪を外すのに協力してもらうぞ」

そして高山は顔だけを後ろにいる麗佳に向けた。

高山「その過程でPDAが首輪か、必要ならお前にくれてやる。殺しが必要なら手伝ってもいいだろう」

そして高山はきびすを返した。

麗佳「……………」

麗佳は先ほどよりもさらに眉間にしわを寄せ、厳しい表情をしていた。

だが結局無言のまま高山と少し離れた距離でその後をついていった。

やがて2人が5階に姿を消したことを確認して、総一は視線を他の3人に向けた。

総一「……………どう思います?」

文香「私達のように円満、とはとてもいえないわね」

かりん「あんな調子でよく一緒にいられるね」

たしかに不思議ではあった。何がきっかけであの2人が協力することになったかは総一達には知る術もない。

だがあの男、かなり手強そうで油断ならないというのはさっきの様子からみても分かる。

麗佳もそれに気づいているのだろう。だから無闇に逃げ出そうとも戦おうともしないのだろう。

総一達もそれは同じで、あの刺々しい雰囲気の中で下手に接触したらどうなるかわかったものではない。

やむなく総一達は2人を見送ることにしたのだった。

・
・
・
・
・
・

第10話「想い」（後書き）

総一達4人に、高山&麗佳コンビ。葉月と渚、それに長沢と郷田。駒が揃い、恐らく強力な武器を手にしたのであろう彼らは、いよいよ本格的な戦いを始め、乱戦となります。

次回は第11話「それぞれの思惑」次に戦いを始め、脱落していくのは一体誰なのか？乞うご期待

第11話「それぞれの思惑」

第11話「それぞれの思惑」

作・桐島成実

【残りの生存者・・・10/13人】

現在の状態

悪	葉月 克己	(?)	? ?	険																												
					「グループA」	P D A	状態	総一との																								
									関係																							
										御剣 総一	(A)	腕を負傷																				
													陸島 文香	(6)	健康	信																
																	頼	北条 かりん	(K)	肩を負傷	信											
																						頼	色条 優希	(9)	健康	信						
																											頼	「グループB」				
																													高山 浩太	(?)	健康	未接触
綺堂 渚	(?)	? ?	?																													
				?																												

長沢 勇治	(?)	??	険悪
郷田 真弓	(?)	??	未接触
姫萩 咲実	(?)	死亡	普通
漆山 権造	(?)	死亡	知らな
い			

総一達4人は5階の階段を警戒しながら上っていった。

先に乗った高山と麗佳が、難なく上っていった為、麗佳達が5階で待ち伏せをしている可能性を除けば、危険は少ないはずだった。

それでも警戒を緩めず、やっこのことで5階へと足を踏み入れたのであった。

【2階が進入禁止になりました！】

PDAのアラームがなり、その知らせを伝えたのはちょうどその時だった。

文香「開始してからもう40時間余りが経過したことになるわね」

ゲームは73時間ある。その半分以上を消費したことになる。

総一「急いで6階まで上りきりましょう」

先ほど決めた方針通り、6階の階段で待ち伏せすることにした。

全員が先に6階へ上がってしまったら、待ち伏せ自体が無意味となってしまう。

総一「それにしても、この5階にはどんな武器があるというんだ・・・？」

4階にあった武器を見れば、今総一が持っている武器などかわいいものだった。なら5階、そして6階にある武器は・・・。

想像すると寒気がする総一だった。

文香「それじゃ、優希ちゃん。さっそくPDAを検索してくれないかしら？」

文香は周りを警戒しながら優希にお願いした。

優希「あ、うん、わかった」

優希は素早くPDAを操作する。

やがて検索が終了し、画面に投影される。そしてみんなで優希のPDAの画面を確認していく。

優希「えーと、たぶんこれがさっきの2人組だね？」

優希はそういつて総一達からさほど離れていない場所にある2つの光点を指差す。

かりん「うん、2人が5階に来てまだ間もないから間違いないと思う」

かりんはうなずく。

優希「他には……。えっと、こっちに光点が2つ一緒にあるね」

麗佳達がいるであろう場所から数ブロックほど先に、2つの光点が存在していた。

文香「その光点よりさらに離れた場所にも2つあるわね」

その光点はちょうど最初の2つの光点の延長線上にあり、3ヶ所の光点がちょうど直線を描く形で存在していた。

かりん「あとは、さらに離れた場所に光点が1つ……」

総一「と、すると」

この5階に存在するPDAの数は総一達の方も含め実に11個。つまりほとんどの人がこの5階にひしめき合っていることが伺える。

文香「問題はこれが誰を指すか、よね」

だが、PDAの所持数によりそれが誰かを特定することは困難であった。

生存者数は10人なのだから、最低でも誰か1人はPDAを2つ持っていることになるのだろうか……。

文香「今まで以上に警戒して行動する必要があるそうね」

文香の顔は深刻そうだ。

総一「どうします？6階の階段へ急ぎますか？」

総一は文香に尋ねる。

このメンバーの中で最年長であり、姉御肌でしっかりした文香は、いつの間にかメンバーの中心となっていた。

文香「そうね、他の人たちがまだ5階にいる内に行きましょう」

総一達はうなずき、周りを警戒しながら先を急ぐのだった。

・
・
・
・
・
・

郷田は一本道の通路を1人歩いていた。

郷田「予想どおり、あまりゲームは盛り上ってはいないわね」

ゲームが開始されてから既に40時間以上が経過しているが、生存者数はいまだ10人。

プレイヤーの数が極端に減ることも困りものだが、一向に減らないのもゲームの主催者側にとっては困る要素ではあった。

しかも、これまでに死んだ3人の要因は、ルール違反に畏にサブマスターの裏切りと、正規のプレイヤー同士のいさかいこそあったものの、いまだ犠牲者が出ていない状況であった。

今、多数のメンバーが5階に密集しているとはいえ、このまま争いが起こるかどうかが不透明だった。

郷田「・・・だからといって、この指令がくるとは思わなかったけど」

郷田は自分のPDAを覗き込みながらため息をついた。

そこにはこう書かれていた。

【サブマスターの首輪の解除の可能性を作る為、かの者と合流して24時間以上行動を共にせよ】

【又、他のプレイヤーが近くにいる場合は速やかに攻撃をしかけよ。ただし必要以上に殺さず、最小限の被害に抑えよ】

郷田は画面を機能の一覧に切り替えた。

郷田「まったく、人使いが荒いわねえ」

郷田はグチをこぼしながら、PDAを素早く操作した。

郷田「たしかこの辺のはずだけど・・・」

郷田はPDAを真剣に見ていたが、ふと視線を通路の前方に移した。

郷田「あら？」

郷田の視線がある一点を捉えた。

・
・
・
・
・
・

麗佳は少し前を歩く高山の背中をずっと見つめていた。

この男、高山と出会ったのは、麗佳が4階の戦闘禁止エリアで休んでいた所に、いきなり高山が進入禁止エリアに入ってきたのがきっかけだった。

麗佳はとっさに武器を構えようとしたが、戦闘禁止エリアだと忠告され、反撃することが出来なかった。

それどころかたった一つしかないドアの方に高山が居たこと。それに出会い頭になった時、まったく動じなかった様子からこの男の強さを悟り、その場から逃げ出すことは叶わなかった。

そこに高山が協力を依頼してきたので、手を組むフリをして隙を見て逃げ出すなり攻撃を仕掛けるなりしようと思んだ。

しかしその思いも虚しく、まるで隙の見当たらない高山を前に、従わざるをえない状態が続いていた。

人に裏切られることを恐れる麗佳にとっては、今一番警戒するべきは、周りの敵ではなくこの目の前にいる人物だった。

そんな時、丁字型の通路を曲がろうとした高山が、麗佳の前に腕を伸ばして制止した。

麗佳「!？」

麗佳は一瞬びくつとして身をすくませたが、それが止まれという合図に気づき、麗佳は足を止めた。

麗佳の視線に気づいている高山は、視線で通路の前方を指す。

麗佳は高山が向けている視線の先を辿った。

麗佳「あれは・・・」

そこに1人の女性がいた。それは麗佳も知っている人物であった。

この場には似合わぬゴテゴテとした服装や装飾。たしか綺堂渚という名前だったはずだ。

その渚は、まるで無警戒なその様子で高山達に背を向けて佇んでいる。

高山達とはある程度の距離があるものの、どうやら高山達に全く気

づいていないようだった。

高山はT字型の通路の角に身を潜ませ、しばらくじっと様子を伺っていたが、とたんに反対側の角に身を潜めた麗佳に視線を向けてきた。

『どうする?』

その視線はそう言っていた。

麗佳は手に持っていた銃を、軽く動かす。

攻撃を仕掛ける。そう認識した高山は、自身のPDAを麗佳に向けた。

そこには地図が書かれており、ちょうど麗佳達がいる通路がアップで映し出されていた。

そして高山はある通路を指でなぞっていく。

それはちょうど通路を迂回して渚を挟む感じだった。挟み撃ちにしようという作戦のようだ。

麗佳はそれに気づきうなずく。

本来なら移動していない渚を前にして、ひそひそと相談することも出来たはずだが、必要以上に高山と距離を縮めるのを麗佳が嫌った。

高山もそれを予想していたらしく、距離をとったまま作戦を知らせ

たのだった。

そして、高山は通路を迂回する為に行動を開始した。

麗佳はその場に留まり、渚の様子をずっと観察していた。

だが、この時麗佳の考えていたことは全くの別のことだった。

今なら逃げ出せる。

麗佳は、高山が通路を迂回しきる前に攻撃を仕掛け、手早くPDAを回収してその場を逃げ出す算段だったのだ。

麗佳は焦り気味だった。

麗佳のPDAは『8』である。JOKERを除く5台のPDAを破壊しなくてはならなかった。

しかし、いまだに麗佳は一つもPDAを得られていなかった。それに高山が居る事で緊張状態が続き、正常な思考は失われつつあった。

もはや麗佳には、他人を蹴落とすことしか考えていなかった。

だから、躊躇なく渚に向けて銃を構えたのであった。

・
・
・
・
・

通路をひた走る高山は、今回の作戦が上辺のものだということを十分に理解していた。

あの様子からすると、恐らく麗佳は逃げだすだろう。そう踏んでいた。

それでもあえてこの作戦を提示したのは、自身が首輪を外す上で、麗佳はもはや用無しだと判断したからだ。

必要な情報はすでに麗佳の口から得ることが出来た。

だがしかし、あの様子ではいつか裏切るだろう。それならリスクを避けつつ手を切るのが良いと考えた。

高山は地図を映す画面を操作し、トップの画面に切り替えた。

そこにはクラブの『2』が描かれていた。JOKERの破壊が首輪の解除条件である。

破壊なので、慌ててJOKERを入手する必要はない。

麗佳がJOKERを持っているか否かは不明だが、首輪を感知するソフトがあるぐらいだから、他のソフトを収集してから対策を練る方が良い。

早い内から打って出る必要はない。慎重な高山はそう考えていた。

高山はPDAを操作しながら、通路を駆け抜けていた。

慎重な彼が、通路をあまり警戒せずに走り回っているのは、彼にインストールされている首輪を探知するソフトのおかげであった。

これは5階に上がった直後に発見したものだ。麗佳と2人で少し探索をしていたが、このツールボックスを見つけ、麗佳に気づかれないうちに

密かにインストールしたものだ。

もちろん麗佳はこの存在に気づいていない。

だから近くに敵がいないことも、麗佳が逃げたかどうかもこれを見ればすぐに分かるということだ。

高山「さて、あのお嬢さんはどう出るか」

高山はPDAで首輪の位置を再び検索しながら、もう少しで渚がいる所に到着しそうな時、通路の向こう側から銃声の音が数回響き渡った。

その銃声は渚がいるであろう方向から聞こえてきた。

高山「む、もう戦闘は始まっているのか!？」

高山は走る足を止めず、検索が終了したPDAを覗き込んだ。

首輪が3つ!？

高山「どういうことだ?」

さつき検索した時は、比較的近くに首輪の反応がいくつかあったのは確認したが……。

高山は幾多もの状況を想定しながら、首輪の光点があった通路の曲がり角の前まで来て、そこからそつと角の向こう側の様子を窺った。

高山「なに……？」

そこで高山が見たものは、お互いに対面する形で立つ2人の女性。

1人は渚、そしてもう1人は妙齡の高貴な感じの女性だった。

そして麗佳は……、

2人の間に挟まる形で、床にうずくまっていた。

そこから血を大量に流していることは、遠目から見ている高山にも分かった。

麗佳「ぐっ、ごぼっ……」

まだ反応はあるみたいだが、どう見ても助からない。高山は一瞬でそれを悟った。

郷田「全く、もう少し周りを警戒しなさいな」

渚「すみません」

2人の会話が高山の耳に入ってくる。高山はじつとその会話を聞い

ていた。

渚「でも、麗佳さんが私を狙っていることはちゃんと見抜いてましたよ」

渚はそう言って両手に持っているサブマシンガンを前に掲げた。

郷田「・・・あなた、私の前でもそのしゃべり方を続けるつもりかしら？」

郷田はいぶかしげな目で渚を見る。

郷田「ま、いいわ。ところで、あなたの方にも指令が届いているはずでしょう？」

渚「はい、ちゃんと届いてますよお」

指令？どういうことだ？

高山は思考を巡らせる。

郷田「一応あなたと行動を共にするけど、ただ首輪の解除条件を満たすだけじゃダメなのはわかってるわよね」

渚「そうですねえ。あ、それなら」

郷田「と、その前に」

郷田の視線が通路の向こう側へと向けられる。

まずい！？気づかれた！

高山が気づくや否や、高山に向けて郷田の銃撃が襲う。

ガン！ガン！

高山「くっ・・・」

高山は急いでその場を後にした。

あの2人は追って来ない。

高山はそれでも距離をとる為走り続けた。

高山「気配は完全に消していたはずだ。あの2人、まさか・・・」

高山は思考の先にたどり着いた憶測に対し、眉間にしわを寄せた。

・
・
・
・
・
・

第11話「それぞれの思惑」（後書き）

麗佳が瀕死の状態になり、ますます混沌としてきたゲーム。郷田 & 渚の2人は、次は何を仕掛けるつもりなのでしょう？

そして高山、麗佳の運命は・・・？

次回は第12話「暴走」物語も中盤戦。さらに波乱の展開が待ち受けています。

第12話「暴走」

第12話「暴走」

作・桐島成実

【残りの生存者・・・10/13人】

現在の状態

「グループA」	PDA	状態	総一との
関係			
御剣 総一	(A)	腕を負傷	
陸島 文香	(6)	健康	信
頼			
北条 かりん	(K)	肩を負傷	信
頼			
色条 優希	(9)	健康	信
頼			
「グループB」			
綺堂 渚	(?)	健康	
??			
郷田 真弓	(?)	健康	未
接触			
高山 浩太	(2)	健康	未
接触			
葉月 克己	(?)	??	陰

悪

長沢 勇治

(?)

??

険悪

矢幡 麗佳

(8)

重傷

敵

対

姫萩 咲実

(?)

死亡

普通

漆山 権造

(?)

死亡

知らない

い

6階へと急ぐ総一達だったが、突然総一のPDAが鳴る。

総一「なんだ？」

総一は走る足を止めてPDAを取り出す。

他の3人もそれに気づき、総一に注目する。

かりん「どうしたの？総一」

総一「なんてこった・・・」

総一が見ていたのは残りの生存者数だ。

さっきまで10人だったが、それが9人になっていたのだ。

総一「一体誰が・・・」

総一達4人は、蒼白な顔をしてPDAを覗き込んでいた。

ほんのしばらくの間だったが、周りへの警戒を怠ってしまった。

だから最初に気づいたのは、カランカランという音だった。

文香「!？」

いち早く反応した文香が、銃を素早く手に持ち、身構える。

その時、床を何かが滑っていくのが見えた。

それは四角い角材だった。それが総一達のいる床の上を通り抜けていった。

一瞬どういうことか考えた文香だったが、角材が通り過ぎた時に一瞬細い糸らしきものが見え、それが切れたように見えた。

文香「まさかっ!？」

文香が事態を飲み込む前にそれは起こった。

ガラガラガラ・・・

総一達の真上から急速に何かが降りてくる。

何が起こったのかわからない3人は身動き出来なかった。

文香「みんな、避けて!」

その声に総一達はとつさに身をかわした。

ガシャン！

総一「シャッター！？」

それは防火用のシャッターだった。それに気づいた時はシャッターは完全に降りきっていた。

シャッターを挟んで、総一・かりんと文香・優希にそれぞれ分断されてしまった。

総一「文香さん！？優希！？」

総一は目の前に降りてきたシャッターを思い切り手で叩くが、びくともしない。

文香『2人とも無事なの！？』

シャッター越しに文香の声が聞こえてきた。

総一「こっちは大丈夫です！今すぐそっちに行きますから」

かりん「総一、急ごう！」

かりんはそう言って駆け出そうとしたその時、

ガキン

シャッターに何かがぶつかる音がした。

総一達が手で叩いていたのとは明らかに違う音。そしてその後には文香の叫び声が聞こえてきた。

文香『あ、あなたは！？』

郷田『油断したわね。ちょっと緊張感が足りなかったのかしら？』

ガン！ガン！

そして銃声が聞こえてきた。間髪入れずに郷田の銃撃は複数回続いた。

だがその銃撃は文香には当たらず、文香はとっさに腰にあった銃を構え、その人物に向けて反撃した。

文香『優希ちゃん！逃げて！』

今の状況を把握した文香は、武器を持っていない優希に逃げるようにと急かす。

優希『え、で、でも・・・！』

文香『いいから、早くっ！』

シャッター越しにでも、文香達が危機的状況に陥っていることは総一達にもすぐ伝わった。

総一「どうにかしてこのシャッターを開けないと！」

かりん「で、でもどうすれば？」

回り込んでいたのでは時間がかかり過ぎる。総一は壁の周りを探っていた。

かりん「そ、総一！？」

その時かりんが何かに気がついた。その視線はシャッターとは反対側に向けられていた。

総一「なっ、あなたは・・・」

総一の目は驚きに見開かれていた。

渚「んっふっふ」。総一君、元気にしてた？」

この危機的な状況にまるでそぐわない、笑顔を向けたその人物。それはかつての仲間、渚の姿がそこにあった。

総一「な、渚、さん・・・」

そしてそれ以上に驚きなのは、渚が両手に持っていたサブマシンガンだった。

渚の可愛らしい派手な格好に、その重々しい黒い塊はあまりにもアンバランスだった。

その時総一は過去の記憶が思い出される。

葉月『渚くんが、咲実くんを・・・殺した』

葉月さんの話が本当なら・・・。総一はゴクリと喉を鳴らした。

渚はいつも以上に笑顔を向けていた。だが総一のことを心配するその台詞とは裏腹に、総一達に向けて手に持つ大型の銃を総一達の足元に向けた。

渚「なぐんちゃって」

渚はそうやっておどけてみせた。そして笑顔のまま引き金を引く。

ガガガガッ！

一瞬の内に、総一達の目の前の床がいくつもの銃弾で抉られていた。

かりんはあまりの展開に、ただ呆然とするしかなかった。

総一「なっ、ど、どうしてですか！渚さん！」

総一は自らを襲う恐怖に駆られながらも、そう叫ばずにはいられなかった。

だが渚はその叫び声を無視して、少し真剣な表情になって逆に問いかけてきた。

渚「ねえ、かりんちゃん。そのままずっと総一君と一緒にいてもいいの？」

かりん「！？どうして私の名前を・・・」

かりんはいまだ渚とは出会ったことがない。名前を知っているのは総一達だけのはずなのに・・・。

だがその疑問を打ち消すかのように、渚は鋭い視線をかりんを浴びせていた。

渚「もしかしたら総一君は裏切るかもしれない。そうは考えないの？」

渚はそうやって煽り続ける。

渚「もし万が一でも命を落としたら、妹さんも助からないんじゃないの？」

かりん「なっ！？ど、どうしてそれを」

かりんは動揺した。いきなり核心を突かれ、そしてそれをなぜこの人が知っているのか。

かりんは様々な思考が重なり、視線を彷徨わせたが、その時総一の姿が目に入ってきた。

総一が、私を裏切る！？

だが、その後に優希の姿が思い出され、その嫌な思いはすぐに捨て去った。

かりんは気を持ち直すと、負けじと鋭い視線を渚に浴びせ返した。

かりん「そんなわけないでしょ！私は総一を信じてる。そして、みんなの事も」

渚はその言葉に一瞬言葉を詰まらせた。が、さらにかりんを煽ろうとする。

渚「本当にそうかな？実はかりんちゃんの事をだまし」

かりん「うるさいっ！総一からあなたのことは聞いている。裏切り者のあなたに言われたくないわよっ！」

『裏切り者』

その言葉は渚の心に深く突き刺さった。

そう、私は裏切り者。かつての親友を手につけ、この手で何十人もの人を騙し、欺き、そして命を奪ってきた。

そして、人は誰しもが裏切る。まして初対面であるこのゲームでは日常的なものであった。

人は裏切る。渚の過去が、その思いを縛り続ける要因であった。

だが、かりんのその言葉は、私はあなたとは違う。私は決して裏切らないし、総一達もかりんを裏切らないと断言した。

それはもはや信条とも言える今の渚の原動力を打ち負かすのに十分だった。

だが、自分の間違いを認めることは、今までに犯した罪を認めることでもあった。親友の最後の姿が頭によぎり、それを許さなかった。

渚「じ、じゃあ、これならどうかな？」

渚は動揺を必死で押し隠しながら、手に持ったサブマシンガンを片手に持ち替え、残った手で総一達の前にあるものを出す。

それは『Q』のPDA。渚が殺した咲実から奪ったものだ。

渚「エースの解除条件はクイーンのPDAの持ち主を殺す事。だから総一君が私を撃てば、総一君は助かる」

私は間違つてなんかない。もはや渚もなりふり構つてなんかいられなかった。

総一「！？一体どういつつもりなんですか！？あなたは！」

当然、総一は驚きの目で見てくる。渚は今度は総一君の方の視線を向けた。

渚「さあ、総一君。私を撃つて。そうすれば」

そうすれば、かりんはきっと恐れるはず。自分が助かる為に人に銃を向ける総一を。

私だってそうだったもの。

もはや渚には、その事しか頭になかった。

総一「出来ません！そんなこと」

だが総一は渚のその誘発をあっさりと退けた。

渚「どうして!？」

総一「あいつとの約束なんです。絶対にズルをしてはいけないって」

渚「・・・!？」

その時、渚はすべてを悟った。総一のプロフィールはゲームが始まる前に確認していた。

恋人が交通事故で死に、そして総一はその恋人との約束を必死で守ろうとしている。

その約束が、恋人との唯一の繋がりだったから・・・。

渚「うつ・・・」

渚は完全に動揺していた。

かりん「動くな!」

そこにかりんが銃を向ける。

その声に驚き、思わず片手で持っていたサブマシンガンを落としてしまう。

渚「あ・・・」

渚はいてもたってもいられず、サブマシンガンには目もくれず、総一達に背を向け、その場を立ち去ろうとした。

かりん「逃がさない！」

かりんは銃を向けたまま後を追おうとしたが、それを総一が制した。

かりん「なんで、どうして止めるのー！」

総一「今はそれよりも、文香さん達を助けるのが先だ」

総一はそう言い、渚が立ち去った方向とは別の通路に向けて走り出した。

かりんも慌ててそれに続く。

どうか、無事でいてください。文香さん、優希。

そして総一達は、文香達がいる通路へと急いだのであった。

・
・
・
・
・
・

第12話「暴走」（後書き）

渚との確執、そして文香達の危機。ゲームという名の舞台は、一重と総一達、そして渚をも絡めとっていくのでありました。

次回は第13話「決死の突撃」そしてとうとうそれが現実のものとなって総一達に突き刺さるのであります。

第13話「決死の突撃」

第13話「決死の突撃」

作・桐島成実

【残りの生存者・・・9 / 13人】

現在の状態

関係	「グループA」	P D A	状態	総一との
	御剣 総一	(A)	腕を負傷	
頼	北条 かりん	(K)	肩を負傷	信
「グループB」	陸島 文香	(6)	??	信
	頼			
頼	色条 優希	(9)	??	信
敵対	綺堂 渚	(?)	健康	
接触	郷田 真弓	(?)	??	未
接触	高山 浩太	(2)	??	未

葉月 克己	(?)	??	険
悪			
長沢 勇治	(?)	??	険悪
矢幡 麗佳	(8)	死亡	敵
対			
姫萩 咲実	(Q)	死亡	普通
漆山 権造	(?)	死亡	知らな
い			

総一とかりんは、文香達が襲われた場所へと急いでいた。

シャッターで分断された総一達は、通路を大きく迂回しなくては、文香達の元へはたどり着くことは出来なかった。

今度こそ救うんだ、今度こそ・・・。

総一は敵が襲ってくるかもしれない状況にも関わらず、ひたすら走り続けていた。

そして半分ほど迂回した所で、通路の角を曲がった時、前方の何かにぶつかった。

総一「わっ！」

??「きゃっ！」

人とぶつかっただけ、総一は後ろに仰け反りそうになったが、ぶつかった相手は衝撃で吹き飛ばされてしまった。

かりん「ゆ、優希!？」

優希「かりんお姉ちゃん！」

それは襲われた場所から逃げてきた優希だった。

総一「優希!文香さんは？」

総一が問いただすと、優希は今にも泣きそうな表情で訴えてくる。

優希「知らない女の人に襲われて、文香お姉ちゃんが、私に逃げなさいって、その人と争って・・・」

優希は泣き声で矢継ぎ早にそう言った。

かりん「優希・・・」

総一「そうか。無事でよかった、優希」

優希「良くないよっ!私、逃げただけで、文香お姉ちゃんを置いてきてっ」

総一「いいんだ、優希」

総一は優希をそっと抱きしめ、頭を撫でた。

かりん「優希、怪我はない？」

かりんも総一達の隣に来て心配そうに尋ねる。

優希「私は、大丈夫。でも文香お姉ちゃんが・・・」

泣き止んだ優希だが、その表情は暗い。

総一「・・・とにかく急ごう。優希、ついてくれるか？」

優希「う、うん！」

かりん「総一、優希、急ごう」

総一が先頭を走り、かりんは優希の手を掴み、共に走った。

そうして総一達3人は、文香の元へと急いだのであった。

・
・
・
・
・

総一達は文香達と別れた場所までたどり着いた。

だが、そこには文香の姿も、襲ってきたであろう女性の姿も見えなかった。

総一「いない・・・？」

総一達は辺りを見渡す。

だが、目に付くものといえば、分断されたシャッターぐらいのもので、他はまるで何もなかったかのように静まり返っていた。

かりん「どこかへ移動したのかな？」

総一「だろうな。どうするべきか・・・」

総一は思考を巡らせた。

待てよ、たしか俺と文香さんのPDAは、前にインストールした

通信機の機能があつたはず。

あれで文香さんと連絡を取れば・・・。

そう考えた総一だったが、首を振って間違いを訂正した。

・・・だめだ。もし文香さんが戦っているのなら、通信できる余裕はないだろうし、もし隠れていたとしたら通信のベルの音で気づかれる恐れがある。

やはり、自分達で探すしかないか。

総一「優希、PDAのありかを検索してくれ」

優希「うん、わかった」

これで優希にPDAの検索を頼んだのは何度目だろう？最初は手間取っていた優希も、すっかり操作に馴れていた。

優希は素早くPDAを操作して、首輪を検索しはじめた。総一かりんは近くに文香達がいらないか、様子を探る。

優希「検索が完了したよつ。えーと・・・」

画面に映し出された地図と首輪を差す光点を見比べようとした。

バリン！

優希「え・・・？」

この時、優希は一瞬何が起こったのかわからなかった。

画面が突然消えてしまったのだ。

それだけではない。

PDAも何かにぶつかっただかのように、変形してしまったのだ。

そして、PDAを持っていた右手に感じる違和感。

優希「！！？」

優希は思わずPDAを落としてしまった。

ガシャン！

PDAの液晶パネルは粉々に吹き飛んだ。落とした衝撃のせいだけではない。

総一「優希！どうした！？」

周りを警戒していた総一は、優希の様子がおかしいことに気づき、何事かと優希の元へ駆け寄った。

優希「え・・・、あ・・・！」

優希の右手は赤く染まっていた。これは・・・血！？

そして更なる変化が訪れた。

かりん「うわああっ！！」

総一の背後から突然悲鳴があがる。

総一は慌てて後ろを振り返った。

かりん「ぐ、ううつ・・・！！」

かりんは前のめりに倒れていた。よく見ると、かりんの左足のくるぶしの部分から出血していた。

一体何だ！？何が起きているんだ！？

総一は焦り、優希とかりん、そして周りを見渡す。

かりん「総一！？あ、あそこ・・・！」

前のめりに倒れたかりんは何とか身体を起こして壁の一角を指差す。

総一「な・・・」

かりんが指差していたのは、天井近くにあるエアードクトへの入り口。本来そこには鉄柵がはまっているはずだが、それが無く空洞となっていた。

そして、そこにエアードクトに身を隠す形で銃を向ける人の姿があった。

長沢「よしっ、当たった！」

それはかつてかりんを襲ったあの少年、長沢だった。

彼は当たったことに感慨していた。その両手にはサイレンサー付きの狙撃用ライフルが握られていた。

あれで、ダクトの中から総一達を狙撃したのだろう。

長沢は端から総一達をターゲットにしたわけではない。ただこの5階、そしてこの場所にPDAが集中していることに気づき、そこを狙ってダクトを徘徊していたのであった。

彼のPDAにはエアードクトの地図と、PDA検索のソフトが組み込まれていたのだ。

そして彼はライフル銃をダクトの中に引っ込めると、片手で新たに何かを取り出した。

長沢「俺の勝ちだあぁっ!!」

彼はエアードクトから身を乗り出し、叫び声にあわせて、手に持つ物を総一達に向けて投げた。

カン、カン、カララ・・・

突然の奇襲に驚いていた総一だが、転がってくるそれを見た瞬間、さらに驚愕の表情を浮かべた。

手榴弾!?

その事に気づいた総一は、その後に起こるであろう事態に気づいた。

総一「そうかつ。だから俺達の動きを封じてから、これを」

長沢にとっては、ライフル銃ですべてを仕留める気はなかった。ただ、1人そこから身動きをとれなくするだけで十分だった。

そこに手榴弾を繰り返し投げていけば、最低でも1人は殺れる。それが長沢の計算だった。

総一「させるかつ!」

総一は手榴弾を投げ返すべく、それを掴みにいった。

そして足元に転がってきた手榴弾をしっかりと掴む。

どっちに投げる!?

総一は一瞬後ろを見たが、そこにはシャッターが下りたままだった。

総一は長沢がいる前の方に視線を戻し、手榴弾を投げた。

ズウウウン

だが、総一が投げた手榴弾は、手から離れて空中に舞った瞬間に爆発した。

総一「ぐわあああつ!!」

かりん「そ、総一いつ!!」

優希「お、お兄ちゃん!!」

総一は手榴弾の爆風に巻き込まれ、そのまま吹き飛ばされる形で身体を後ろに投げ出した。

かりん「総一! 総一っ!!」

かりんは動かぬ左足を引きずりながら、総一の元へ這って行く。

だが、かりんの必死の呼びかけにも、総一は反応しなかった。

き、気絶している！？

かりんがそれに気づいた瞬間、目眩がした。

もう、だめ……。

優希は右手を負傷し、かりんは動くこともままならず、そして総一は気を失っている。

そして総一は全身に傷を受けている。出血はさほどではないが、このままでは命すら危ういだろう。いや、ひょっとしてもう……。

かりんは絶望のどん底に落とされた気分だった。

長沢「ちょうど良い感じだったな、今のは」

もうもうと煙が立ち込める中、爆風をかわす為にダクトの中に身を隠した長沢は、自己満足に浸っていた。

長沢は手榴弾のピンを抜いてから、爆発するまでの時間を計算していた。

手榴弾を拾った時、ために一発投げたが、その時は5秒のタイムログがあった。

そして、この距離と総一が投げ返す時間を計算して、恐らく4秒くらいで爆発するのが良いだろうと判断した。

長沢「へへっ！これで、とどめだ！！」

長沢は、先ほどと同じ様に手榴弾のピンを抜いて、1秒ほど間を空けてから再び総一達に向けて投げた。

カン……

そしてそれが床にぶつかる。

優希「あつ!？」

優希はその時決心した。総一お兄ちゃんもかりんお姉ちゃんもとても戦える状態じゃない。

それを瞬時に悟った優希は、自分の中の勇気を必死で奮い立たせた。

私が、2人を守らなくちゃ!

そして優希は転がっていく手榴弾に向かって駆け出した。

かりん「ゆ、優希!!」

いったい何を!?

かりんのその疑問をよそに、優希は手榴弾に向けて突進したのであった。

そして、2回跳ねた手榴弾を両手でキャッチする。

優希「うっ!」

右手を怪我していた為一瞬呻いたが、もはやそんなことはお構いなしだった。

私の肩じゃ、このまま投げてもお兄ちゃん達を守りきれない。

それに気づいた優希は、手榴弾を抱えたまま、長沢の元へ突撃していった。

長沢「なにっ!？」

煙が消え始め、総一達が見えるぐらいに視界が回復した時、こちらに向けて猛烈に走ってくる優希の姿が目に入った。

長沢はとっさに背中に置いてあったライフル銃を取り出す。

ガンッ

長沢「く、くそっ！邪魔なんだよっ！」

だが長身のライフルは、取り出す時にダクトの壁にぶつかってしまった。

長沢は銃を持ち替え、なんとか銃口を外に向けた後、ライフルを構える。

長沢「な・・・」

だが、銃口を向ける瞬間気づいた。長沢のすぐ下に優希がいる事を。

そして優希は怪我をしていない左手で、長沢に向かって手榴弾を投げつけた。

ズウウウウン

それは、ちょうど長沢と優希の真ん中で爆発した。そして再び辺りは白い煙に包まれた。

かりんお姉ちゃん。賞金をあげる約束、守れなくてごめんね。
。。。

爆撃にその身を裂かれる優希の脳裏に浮かんだのは、妹を思っ
かりん「優希いいいいっ!!」

かりんの悲鳴も虚しく通路に響き渡るのであった。

・
・
・
・
・
・
・

ほんのしばらく時間が経ち、煙は少しずつ薄らいできた。だがかりんにとっては、それが永遠の時のように感じられた。

その間、長沢の追撃はなかった。

かりんは自分の怪我の痛みも忘れ、ただ優希が消えていった方向をじっと見つめていた。

やがて煙がほとんどなくなり、まわりが見渡せるようになってくると、かりんの思考が再び動き出す。

かりん「あ・・・あぁっ・・・」

だが、そこで見たのはあまりにも悲惨な結末だった。

かりんは悲鳴をあげることも忘れ、視線を逸らす事もせず、ただ震えていた。

優希は変わり果てた姿で床に倒れていた。優希は、総一とかりんを守って、そして帰らぬ人となったのだ・・・。

・
・
・
・
・
・
・

第13話「決死の突撃」（後書き）

優希、長沢が死に、そしてこのゲームは失意の底にあるかりんを無視して、さらに絶望の淵へと追いやるべく暗躍するのでありました・・。

次回は第14話「不条理な世界」いよいよ物語は終盤戦へと駒を進めていきます。

第14話「不条理な世界」

第14話「不条理な世界」

作・桐島成実

【残りの生存者・・・7/13人】

現在の状態

悪	葉月 克己	(?)	? ?	険
接触	高山 浩太	(2)	? ?	未
敵対	郷田 真弓	(?)	? ?	
敵対	綺堂 渚	(?)	? ?	
頼	陸島 文香	(6)	? ?	信
頼	北条 かりん	(K)	満身創痍 足を負傷	信
関係	御剣 総一	(A)		総一との
「グループA」		P D A	状態	

色条 優希 (9) 死亡 信

長沢 勇治 (?) 死亡 敵対

矢幡 麗佳 (8) 死亡 敵

対

姫萩 咲実 (Q) 死亡 普通

漆山 権造 (?) 死亡 知らな

い

激闘の末、気を失っていた総一が目覚めたのは、事が終わってから10数分経ってからだった。

総一「ん・・・？」

目を開けた瞬間、天井が見える。

一瞬意識が遠のいた。だがすぐに記憶が蘇り、危機的状況である事を思い出した瞬間、思い切り身体を起こそうとした。

総一「ぐっ・・・！」

だかその瞬間、全身に耐え難い痛みが走った。

そのせいで、身を起こすことはかなわなかった。

かりん「あ・・・」

すぐ側にかりんがいた。かりんは総一が意識を取り戻したことに気づき、怪我を負った足をひきずりながら総一のところにやってきた。

かりん「そ、総一！」

総一「か、かりん・・・」

総一は頭だけをかりんを向けて、その名を呼んだ。

かりん「総一！優希が、優希があー！！」

だが、かりんの返してきた言葉は、総一でもかりん自身でも、まして襲ってきた敵の事でもなく、優希のことだった。

総一はそのことに気づき、頭だけを動かして周りを見渡した。

だが、どこにも姿が見えない。

優希の行方は、かりん自身の口で語られた。

かりん「ゆ、優希は、私達をま、守って、し・・・」

かりんは言葉に詰まり、総一に覆いかぶさるようにしてうつくまっ

た。

守って、どうした！？

総一は嫌な思いが湧き上がった。まさか……。

かりん「こんなっ、こんな事って……！！」

かりんはうずくまったまま、大粒の涙を流していた。それに気がついた総一は、優希がもうここにはいなくなったという事を悟った。

総一「そんなバカな……！嘘だろ！かりん！？」

総一は全身の痛みもかまわず、身体を動かして必死でかりんに訴えた。

かりん「ひどい、ひどすぎるよっ……！」

だがかりんの口から出てくるのは、後悔と悲しみ、怒りの凝り固まった負の言葉だけだった。

また、守れなかったというのか、俺は……。

総一はもはや悲しみを通り越して、自分の無力さに絶望していた。

結局、誰も守れなかったのか……。

総一はもはや生きる気力を失っていた。

文香『総一君。あなたがしっかりしなくてどうするの！？』

無意識の内に思い出したのは、かつて総一に訴えかけた文香の励ましの言葉だった。

文香『あなたは私やかりんちゃん、優希ちゃんを助けた。お互いに支えあってきたじゃない！』

咲実さんが殺されて、葉月さんに背を向けられた時も、こうして支えてくれた。

文香『あなたがいないと、一体誰がかりんちゃん達を助けるの！』

総一の目に、泣き崩れるかりんの姿が見える。

・・・そうだ、今は文香さんはいない。俺がかりんを支えなくてどうする！？

その事に気づいた総一は、再び気力を取り戻し、痛む右手をなんとか動かし、かりんの頭にのせる。

総一「ぐっ、か、かりん、悲しむのは後だ。今はみんなを助ける事が大事だ」

総一の言う『みんな』とは、総一やかりん自身、そして文香さんとかりんの妹も含まれている。

かりんは顔を上げて、総一の目を見る。

かりん「で、でもっ・・・！」

総一「俺達が今ここで死んだら、ぐうつ、優希の想いが無駄になる」

かりん「想い・・・？」

かりんは今も流れ続ける涙を拭おうともせず、言葉を反芻した。

総一「はあ、はあ・・・そうだ、優希は俺達に生きていてほしいから、だから」

かりん「！？」

かりんはその言葉に、再び泣き崩れた。

かりん「優希！優希い！う、うわああああっ！」

かりんはしばらくの間泣き続けた。涙が枯れるまで。そうして、かりんが落ち着くまで、総一はずっとかりんの頭を撫で続けた。

そうしないと、この現実を受け入れられないから。

総一もかりんも、自身の怪我の痛みよりも、心の痛みの方が辛かったのだ・・・。

・
・
・
・
・

文香『総一くん！聞こえる？』

かりんが泣き止み、落ち着きを取り戻した頃、突如文香の声がどこから聞こえてきた。

総一「え？」

文香『お願い、返事をして』

それは、総一のポケットから聞こえてきた。

そうか、たしか通信機のソフトを総一のPDAにインストールしていた。

総一はそれを出そうとしたが、思うように身体が動かない。

総一は今もなお、身体を起こせずに倒れたままだった。

かりん「あ、私が・・・」

かりんは総一のポケットをまさぐり、PDAを取り出した。

そしてそれを耳元に当てる。

かりん「文香さん、無事なの！？」

文香『その声は、かりんちゃん！？』

PDAから文香の心配そうな声が聞こえる。

かりん「私達は、とてもじゃないけど動ける状態じゃない・・・」

かりんは目を伏せてそう報告する。

文香『・・・何かあったみたいね』

文香は、ほんのしばらくの間無言だったが、やがてこっぴどく切り出した。

文香『今どこにいるの？』

かりん「シャッターで分断された所、文香さんが居た側に」

文香『分かったわ、すぐ行くからじっとしてて』

文香はそう言うなり、通信を切った。

・・・どうやら、文香さんの方は無事みたいだな。

2人の通話を聞いていた総一は、胸を撫で下ろした。

・
・
・
・
・

文香「総一君！かりんちゃん！」

文香は5分ほどして総一達の所へたどり着いた。

かりん「文香さん！こっち！」

そして総一達の所にまっしぐらに向かってきた。

文香は今も床に倒れている2人の側に行き、怪我の状態を確認する。

文香「！？ひどい怪我、すぐに治療するわ」

文香は携帯していた救急箱を取り出した。それは総一達が以前使っていたものよりも、はるかに大きな箱だった。

そして素早い手つきでかりんの足を手当てしていく。

かりん「あ、ありがとうございます」

文香「いいのよ、これくらい」

文香は元気付ける為に微笑んだが、すぐに真面目に顔つきに戻った。

次に総一を手当てしていく。

文香「これは、手榴弾？なんてこと・・・」

文香は険しい表情を見せたが、道具を使って、総一の身体に刺さった手榴弾の破片を一つずつ器用に取り除いていく。

幸い、爆発した所から距離があった為、深くまで刺さってはいなかった

ものの、幾多もの破片が総一の身体に傷をつけていた。

なんとかあり合わせのもので応急処置はしたものの、きちんとした処置が必要なのは明白だった。

文香「とりあえずはこれで……。えつとあとは……」

文香はそう言って優希の姿を探す。

かりんは悲しげな表情で、文香に伝えた。

かりん「優希は、もう……」

その言葉で察したのだろう。辺りを見渡していた文香の動きが止まる。

文香「……そう」

文香はそう言って目を伏せる。不思議とその顔は無表情だった。

あまりにもあっけない返事が、かりんの逆鱗に触れた。

かりん「そう、ってそれだけなの！？優希があんなつ……」

だが、かりんのその言葉は途中で止まる。そしてそのまま硬直する。

文香はある一点をずっと見つめていた。それは、総一達とは離れている優希の亡骸を見ていた。

そして、文香の目から涙が零れる。それは一つの筋となって頬を伝い、床へと落ちていく。

それは悲しみの涙だけではなかった。

こんな不条理なゲームが存在することの、そして助けることが出来なかった自らの無力さに対する、純粋な怒りの涙だった。

文香は無表情のままだった。だが齒を食いしぱり、身体は怒りで震えていた。

その文香の気持ちを察したのか、かりんはもう何も言わなかった。

やがて、文香は怒りを抑えるように言葉を搾り出した。

文香「・・・とにかく移動しましょう。6階の階段のすぐ近くに戦闘禁止エリアがあるわ」

足を負傷したかりんを文香が支え、総一は身体を引きずる感じで、6階への階段へと歩んでいった。

かりん「優希、ごめんね・・・」

かりんは置いてきばりにした優希の方を向いて、謝った。

そして未練を断ち切るように、前を向いたのであった。

・
・
・

・・・

悪戦苦闘しながら、6階の戦闘禁止エリアにたどり着いた総一達3人は、ひとまず休息をとることにした。

ここに来るまでに随分と時間を費やしてしまった。さすがに前の様に早くは動けない。

文香が足を負傷したかりんを担ぎ、総一はなんとか自力で歩いてはいるものの、歩きたびに全身に痛みが走り、しばらく歩いては止まりを繰り返していた。

だからといって1人ずつ順に運んでいたのでは、その間1人だけ残されてしまうことになる。

文香「大丈夫？もう少しだから」

文香は総一とかりんをベッドに寝かせるべく、奥の寝室の扉を開けた。

文香「えっ・・・？」

戦闘禁止エリアに来て、警戒心が薄れていたからだろうか。文香は驚きの表情を見せた。

2つのベッドの間のスペースに、人が立っていたからだ。

文香は一瞬動揺したものの、すぐに気を引き締めた。

高山「ここは戦闘禁止エリアだ。武器は持たない方が良い」

その人物は、文香が行動を起こす前にそう牽制した。

文香「・・・あなたは？」

文香はとりあえずの危険はないと判断し、相手の男にそう問いかけた。

かりん「あ！この人たしかあの時の」

担がれていたかりんは、その顔を見るなり鋭い眼差しで睨み付けた。

文香「たしか麗佳さんと一緒にいた・・・」

それを聞いた高山は、表情一つ変えずに問い返してきた。

高山「彼女を知っているのか？」

文香「ええ、最初の頃に出会ったことがあるのよ。・・・麗佳さんは？」

文香は麗佳の姿がないことに気づき、表情を崩さず高山に尋ねた。

高山「彼女は殺された。女の2人組に」

高山は無表情のままそう答えた。

文香「なんですって!？」

文香は驚愕の表情を浮かべる。

すると文香達の後ろにいた総一も会話に加わってくる。

総一「女の2人組って、まさか・・・」

総一達が今まで出会ったのは総勢12人。その中で該当するのは・・・。

文香「渚さんと私を襲ったもう一人の女性、しかないわね」

高山「ほう」

高山はそれまで無表情だった顔をぴくりと動かした。

そして、総一達はこれまでの経緯を高山に順に語っていった。

高山「ふむ・・・」

それをずっと聞いていた高山は、聞き終わった後、しばらく考えるしぐさをした。

高山「お前達の話からすると、俺達を除く残りの3人は、すべて敵対している、とそういうわけだな？」

すべてを話し終えた総一は、高山の質問に無言で頷く。

そして暫くの沈黙のち、こう切り出した。

高山「一応聞いておくが、お前達。JOKERを持っていないだろうか？」

高山の突然の質問に、総一達は顔を見合わせる。

総一「いえ、持ってません」

文香「私も見たことはないわね」

かりん「私も・・・」

高山「そうか・・・。残念だ」

高山は軽く表情を曇らせたが、すぐに元の真面目な表情に戻った。

高山「するとやはり当初の予定どおり動くしかないということか」

高山は独り言のようにそう呟く。

文香「当初の予定？」

文香の疑問に、今度は高山が順を追って説明する。

高山「俺はJOKERを探している。だが他の人間と話が出来そうにない以上、交渉するだけ無駄な話だ」

高山「ならば別の方法を取る必要がある」

総一「別の方法？」

総一の疑問に、高山はPDAを取り出し、それを操作して総一達に見えるように前に出す。

するとそこにはある説明の一覧が書かれていた。

01・地図拡張機能。地図上に部屋の名前を追加表示する。

02・擬似GPS機能。マップ上に現在位置を表示。

03・首輪の位置をマップ上に表示。作動した首輪は除外。

04・JOKERの位置をマップ上に表示。

05・PDAの現在位置をマップ上に表示。破壊されたPDAとJOKERは除く。

06・館の動体センサーが収集した振動を、PDAに表示する。

07・ネットワークを利用したトランシーバー機能。双方にインストールする必要あり。2個セット。

08・ネットワーク経由で遠隔操作可能な自動攻撃機械のコントローラー。

09・ドアのリモートコントローラー。

10・爆弾とそのコントローラーのセット。

11・探知系ソフトウェアに映らなくなる。

1 2 ・残りの生存者数を表示。

1 3 ・侵入禁止エリアへの侵入が可能となる。

1 4 ・今いるフロアが侵入禁止エリアになるまでのカウントダウン機能。

1 5 ・フロアにある罠を探知し、PDAの地図上に表示する。

1 6 ・ソフトウェアの一覧表。

1 7 ・ルールの一覧表。

1 8 ・換気ダクトの見取り図。

文香「これは・・・?」

高山「PDAのソフトの一覧だ。俺はその内の4番を探してみようと思う」

文香「4番、ってことはJOKERを探知するソフトのことね」

高山「そうだ」

高山は総一達にそう説明したが、実は他の事情もあった。

4番以外のソフトも集め、奇襲を防ぐための手段として用いるつもりだった。

戦場で暮らしてきた高山にとって、突然の襲撃がどれほど防ぎ難い

事を良く知っていた。

なので、ソフトで相手の位置を知り、もしJOKER探知ソフトが見つけることが叶わなかったら、最悪の場合逆にこちらから奇襲を仕掛け、他の参加者を葬ってでもJOKERを見つけ出すつもりでいた。

だから総一達にはこれ以上は話さなかった。

文香「高山さん」

高山がそう考えていると、文香が尋ねてきた。

高山「なんだ？」

そんな考えなどおくびにも出さず、高山は聞き返した。

文香「もしJOKERを見つけた場合、破壊するのは待ってもらえないかしら？」

高山「ほう・・・」

文香「私達の首輪を外すのに必要なのよ」

高山「ふむ、わかった。5回偽装機能を使用すればいいと言っただな？」

文香がそう言う前に高山が先にその台詞を言う。どうやらお見通しのようだ。

高山「善処しておこう」

総一「ありがとうございます」

総一達にとってはそれは願ってもない事だったので、素直に礼を言った。

高山「それともう一つ提案がある」

総一「为什么呢？」

高山「明日、6階でもう一度会えないだろうか？」

文香「どういう意味？」

高山「これは最後の手段でもあるのだが、お互いの首輪がそのタイミングで外れていない場合もあると思う」

文香「だから、その時にPDAや道具を交換し合えば、首輪が外れるかもしれないって事？」

今度は文香が高山の考えを先読みした。

高山「そうだ。聡明なお嬢さんで助かる」

文香「どういたしまして」

文香は礼を言うが、その表情に笑顔はない。

高山「集合時間はゲーム終了の2時間前。合流地点はこの場所で良

いな？」

文香「ええ、わかったわ。それよりもこちらには怪我人がいるの。早く休ませたいのだけど」

高山がベッドの前にいるので、怪我人をベッドに寝かせられない。そう言いたいのだろう。

高山「ああ」

高山は素早い動作で、ベッドから離れる。

文香はそこに担いでいたかりんを寝かせる。

それと入れ替わりに、高山はドアの方に向かっていった。

高山「俺はもう十分休んだ。お前達も休める時に休んでおくんだな」

高山はドアを開けて別れ際にこう言った。

高山「では、また会おう」

そう言つて高山は去つていった。

それを確認した文香は、総一の方に向き直つた。

文香「総一君も休みなさい。あなたも怪我人なんだから」

総一「俺は平気です、ぐっ……」

緊張が解けたのか再び痛みが走った。

文香「無理しないで、ちゃんとベッドで休む事。いいわね」

文香は総一に付き添いながらベッドへと寝かせる。

文香「お姉さんの言うことはちゃんと聞くべきよ、総一君」

そして文香はいたずらっぽく笑う。

文香「私は向こうの部屋でゆっくりしてるから、何かあったら呼んで頂戴」

総一「すみません、文香さん」

総一達はこうして一時の休息をとることになったのだった。

・
・
・
・
・

第14話「不条理な世界」（後書き）

高山ととりあえずは協力する事になった総一達。休息をとる総一達だが、降りかかる災いは一向に止む気配はないのでした。

次回は第15話「望まぬ来訪者」いよいよ決戦の時が迫ります。果たしてどのような結末をむかえるのでしょうか？乞うご期待

第15話「望まぬ来訪者」

第15話「望まぬ来訪者」

作・桐島成実

【残りの生存者・・・7/13人】

現在の状態

関係	「グループA」	PDA	状態	総一との
	御剣 総一	(A)	満身創痍	
頼	陸島 文香	(6)	健康	信
	北条 かりん	(K)	足を負傷	信
頼	綺堂 渚	(?)	??	
	敵対			
敵対	郷田 真弓	(?)	??	
	高山 浩太	(2)	健康	
普通	葉月 克己	(?)	??	
	葉月 克己	(?)	??	
険悪				

色条 優希 (9) 死亡 信

長沢 勇治 (?) 死亡 敵対

矢幡 麗佳 (8) 死亡 敵

姫萩 咲実 (Q) 死亡 普通

漆山 権造 (?) 死亡 知らな

かりん「! ?、誰!」

かりんはドアを開け、部屋の中に人がいることに気づき、思わず声を張り上げた。

優希「えっ! ?」

その人物はかりんの声に反応し、こちらへと向いた。

優希「お姉ちゃん、だあれ?」

その少女は、ちょうどかりんの妹と同じぐらいの背丈だと一目見て分かった。

てっきり誘拐犯がいると思っていたかりんは、目の前に立つ少女に言葉を失った。

だが、少女の不思議そうに見つめるその視線に気づき、慌てて返事をする。

かりん「あ、え、えっと」

かりんはあからさまにうろたえる。それがおかしかったのか目の前の少女の少し緊張した表情がほころぶ。

優希「あ、相手に名前を聞く前に名乗らなきゃいけないんだよね」

かりん「え？」

優希「私、優希。色条優希って言うの」

その少女は笑顔でそう名乗った。

かりん「あ・・・」

かりんは暫く啞然としていたが、

かりん「え、えと、私の名前は北条かりん」

優希「じゃあ、かりんお姉ちゃんって呼んでいいかな？」

かりん「お姉ちゃん・・・」

その響きに、思わず妹のかれんの姿がよぎる。

これが、かりんと優希が出会ったきっかけであつた。

・
・
・
・
・
・

かりん「うつ、うつ・・・優希・・・」

総一とかりんは文香の言うことに従い、ベッドの中で休んでいた。

総一は、かりんがうなされていることに気づき、目を覚ました。

やっぱり、優希が死んだことを気に病んでいるんだな・・・。

総一もその気持ちはよくわかる。

総一自身も過去に同じような体験をしていた為、多少は慣れているが、まだ永遠の別れを経験したことのないかりんにとっては耐え難い苦痛なのだろう。

だが、それに対してあまりにも無力だということは総一自身は知っていた。

だからせめて悪い夢から目覚めさせようと、総一はベッドから身を起こした。

ガン！ガンツ！！

総一「え・・・？」

突然、聞いたこともある音が、文香がいるはずの隣の部屋から聞こえてきた。

それが銃声であると認識した総一は、瞬時に危機が迫っていることに気づき、慌てて隣の部屋へのドアに向かって駆け出した。

総一「文香さん！」

総一が隣の部屋に入ると、そこには文香が戦慄の表情を浮かべてある一点を見つめていた。

その突き刺さるような視線の先には、入り口のドアが開いた状態になっている。

そしてそのドアの向こう側にいる人物。

郷田「あら？お休みの所悪いわね」

その人物、郷田はドアから出てきた総一を見るなり悪びれる様子もなくそう言った。

そして、銃を文香に向けていた。

文香「総一君！逃げて！」

文香は視線は逸らさず、そう叫ぶ。

総一「どうして！？ここは戦闘禁止エリアなのに！」

総一は、恐らく銃を撃ったであろう郷田が、今も健在なことに驚いていた。

文香「すっかりしてたわ・・・」

文香は唇を噛む。

郷田「そう、あなたたちの居る所は戦闘禁止エリアなのね」

まるであざ笑うかの様に、状況に合わない淡々とした口調で語る。

総一は、何とかやり過ごそうと、部屋の回りを見渡す。

・・・そうだ！？

総一は文香にそつと耳打ちする。

総一「あの人と反対側にも出入り口があります。そこから文香さんだけでも逃げてください」

文香「私だけって、総一君達はどうするの？」

総一「俺達は奥の寝室に隠れています。さすがに部屋の外からは銃

撃は届かないはず。文香さんはその間に外に逃れて何か対策を」

文香「それはだめよ、総一君」

文香は総一の提案に反対した。

文香「忘れたの？あなたは手榴弾で攻撃されたのよ。もしあの女がそれを持っていたらどうするの？」

そうか、そうだった。

いかに部屋を一つまたいでいるとはいえ、手榴弾やもっと強力な武器で攻撃されたら、無事では済まない。

考えあぐねている総一に、さらに危機が訪れた。

文香に逃げるように進めた反対側のドアが開いたのだ。

そしてそこには、

総一「な、渚さん・・・」

渚「・・・」

そこには渚が立っていた。総一達は2つの出入り口を封鎖され、この戦闘禁止エリアに袋小路にされてしまったのだ。

文香「なんてこと・・・」

文香は、今更ながらここで休息をとったことを後悔した。

そんなことはお構いなしに、郷田は話を進める。

郷田「ここで1人か2人始末しておけば、残りの生存者は高山さんに葉月さん。ちょうどバランス良くなるわね」

そして郷田は、部屋の反対側にいる渚に視線を移した。

郷田「一時的にでも仲間になったんだし、あなたが始末する方が盛り上がるんじゃないかしら？」

郷田は渚に総一達を殺せ、とそう言っているのだ。

渚「くっ・・・」

当の渚は迷っていた。裏切りや仲間の死と、そして殺されるかもしれない恐怖に遭い続けても、いまだに手を繋いでいる総一達を前にして。

総一達と長沢が戦っている際、渚は一時的にモニターが立ち並ぶ控え室で、そのやりとりを見ていた。

仲間が傷つき、止む事の無い攻撃にも臆することなく、あの少女、優希は自らの身を犠牲にしてまで仲間を守り抜いたのだ。

それは、渚が今まで見たこともない情景だった。

総一、かりんが傷ついたのを見た瞬間、見切りをつけて自分だけでも逃げようとするだろう。そう思っていた渚は、その一連の出来事

に、自分の目を疑った。

だが、モニター越しに見たそれは、紛れもない真実なのだ。

そのことが、渚に迷いの袋小路へと追いやっていた。

郷田「聞いているのかしら？あなたなら1人や2人、殺すなんてこと訳ないでしょう」

郷田は少しイラついた感じで渚に呼びかける。

その声に反応して、渚はゆっくりとした動作で右手に持っていた拳銃を構える。

総一「文香さん！」

総一はとっさに文香の前に出て庇う。

文香「そ、総一君！」

お互いを庇いあい、助け合う2人。

それを辛辣な目で見ていた渚だったが、その迷いを振り切り銃口を向けた。そして

ガンッ！

無情にも、その銃から弾が放たれた。

その銃弾は抗うことなく真っ直ぐに飛んでいき、身体に吸い込まれ

ていった。

郷田「なっ・・・!？」

郷田は、突然の出来事が理解出来ず、思わず自分の胸に手を当てる。

触れた手には、べっとりと血がついていた。

それを見た郷田は、自らの身体に銃弾が打ち込まれたことに気づき、信じられないという表情をした。

郷田「・・・わかって、るの？私を、殺したり、したら・・・、あなたの、く、首輪が・・・」

そして身体から力が抜ける。

郷田は最後までその言葉を言い切らないまま、床に倒れこんだ。

総一と文香は、銃弾が郷田に向けられたことに気づき、祖先を移すと、倒れていく郷田の様子を目撃した。

文香「どういうこと・・・？」

2人は自分達に向けられなかったことに安堵を感じたが、それ以上に驚愕の表情を浮かべていた。

そして撃った渚は、構えたままの銃を持つ手を解き、床に落とした。

渚「総一君、文香さん……」

渚は一步踏み出し、戦闘禁止エリア内に入ってきた。

総一達は身構えたが、渚はまるで警戒せず、うつむき加減に総一達に目を向けた。

渚「総一くん……。前も言ったことだけど、『Q』のPDAを持つ私を殺せば、総一君の首輪を外せるわ」

この台詞を言ったのは2度目だが、今度は単に総一に生きていてほしいから。

偽りのない純粹な想いだった。

心なしか、渚の目には涙が浮かんでいた。

総一「渚さん……」

それに気づいた総一は、構えを解き、じっと渚を見つめ返した。

総一には、かつて渚が見せた冷酷で冷たい目とは、明らかに違うことに気がついた。

恐らく悪意はないのだろう。それが総一の出した結論だった。

だが、それでもやっぱり答えは一緒だった。

総一「……殺すことは出来ません。それが、あいつとの約束ですから」

総一はきっぱりとそう言った。

渚「・・・そうよね、それでこそ総一君だよね」

渚はその答えをある程度予測していたのだろう。その表情は涙と共に悲しげだった。

渚「総一くん、私は」

あなたに生きていてほしい。そう言うはずだった渚の言葉は、そこで途切れた。

その時、渚は時間が止まったのかと思った。

渚「え・・・？」

身体を動かそうとしているのに、動かない。まるで金縛りにあったかのように。

一瞬の間が過ぎ、まるで糸を無くした操り人形のように、力なく床に倒れこんだ。

渚「どう、して・・・？」

渚は床に倒れたまま顔を自分の身体に向けて、そこから血が流れていることに気がついた。

撃たれた！？一体誰に？

その疑問は、総一自身の驚きの声と共にすべてを理解した。

総一「は、葉月さん……」

戦闘禁止エリアから少し離れた場所から、銃を向けるその人物。それは渚が、咲実を裏切って殺した時に一緒にいた、葉月の姿だった。

渚「因果応報、なのね……」

倒れたままの渚は、自らの命がもはや風前の灯である事を悟った。

渚の目に溢れていた涙は、頬を伝って、下に落ちた。

『あの時』以来、本気で涙を流したことなんかないのに。

何に悲しかったのか渚自身にもよくわからない。ただただ悲しかった。

……もし、『あの時』に、総一君や文香さん達と出会えていたら……。

私達は絆を失わずに済んだのだろうか。

そして、自分の意思を見失うこともなかったのだろうか。

渚「真奈美……、ご……めん……ね……」

渚の最後の言葉は、誰の耳にも届くことはなかった。

• • •
• •
• •
•
•

第15話「望まぬ来訪者」（後書き）

郷田は渚に、そして渚は葉月に。それぞれ命を奪われました。

この悲劇に終わりはないのでしょうか？

次回第16話「度重なる悲劇」総一と文香、そして葉月。一体どんな結末を迎えるのでしょうか？

第16話「度重なる悲劇」

第16話「度重なる悲劇」

作・桐島成実

【残りの生存者・・・5 / 13人】

現在の状態

「グループA」

PDA

状態

総一との

関係

御剣 総一

(A)

満身創痍

陸島 文香

(6)

健康

信

頼

北条 かりん

(K)

足を負傷

信

頼

普通

高山 浩太

(2)

??

険悪

葉月 克己

(?)

??

綺堂 渚

(?)

死亡

疎遠

郷田 真弓

(?)

死亡

敵対

色条 優希

(9)

死亡

信

頼

長沢 勇治

(?)

死亡

敵対

矢幡 麗佳

(8)

死亡

敵

対

姫萩 咲実

(Q)

死亡

普通

漆山 権造

(?)

死亡

知らな

い

総一「は、葉月さん・・・」

総一は、部屋の外で銃を撃った葉月に、そう呟いた。

その葉月は、初めて総一達と出会った時とは、まるで別人のようであつた。

顔色は青白く、穏やかな人相も失せてしまい、まるで覇気が感じられなかった。

葉月は倒れて動かなくなった渚を尻目に、総一へと視線を向けた。

その時までずっと銃を構えたままだったので、総一に庇われている形で後ろにいる文香は、思わず前に出た。

文香「やめて！おじ様。これ以上犠牲を出さないで！」

文香のその叫び声は悲痛だ。

葉月「・・・」

だが葉月はまるで無反応のまま、反転して通路の向こう側へと走り出した。

文香「あ・・・」

文香は一瞬追いかけてようとすが、すぐ傍に怪我をしている総一と、向こうの寝室にいる、歩くこともままならないかりんが居ることを思い出し、躊躇した。

総一「・・・行って来てあげてください」

総一も、文香と同じく葉月のことが放っておけないらしい。だが怪我をしている総一では、全力で走ることは無理だろう。だから、文香にすべてを任せるつもりでいた。

総一達が知る葉月は、決して無意味な殺戮を好む性質ではない。

一度仲違いした間柄だが、心の奥底では葉月のことを信じていたのかもしれない。それがたとえ願望であつたとしても。

文香「・・・分かったわ。総一君、かりんちゃんのことお願いね」

文香はそう言いつつ、葉月の後を追いかけていった。

・
・
・
・
・
・

一度葉月の行方を見失いかけた文香だったが、通路の先からドアが開く

音が聞こえた為、音のした方へと向かっていった。

そして文香は一つの部屋の前まで来た。

恐らくここにおじ様が居る。

文香は周りを見渡しつつ、部屋のドアノブに手をかけた。

ガン！！

文香「！？」

その時銃声が部屋の中から聞こえてきた。

一瞬、文香に向けて撃たれたと思い身構えたが、弾はどこからも飛んでこなかった。

部屋の中で銃声が聞こえた。

文香「まさか・・・」

文香は嫌な予感がしていた。

ドアノブを回し、部屋の中をのぞく。

その予感は的中していた。

部屋の中で床に寝そべっている葉月。その葉月の胸の辺りから血を流していた。

そして右手には握られた拳銃。その銃口は、まっすぐ葉月自身へと向けられていた。

文香「おじ様!!」

文香は警戒することも忘れ、慌てて葉月の元へと駆け寄った。

葉月「う・・・」

文香「なんてことっ、今すぐ止血を」

文香はそう言い、手元を探るが、救急箱を総一達の所に置いてきたことを思い出し、歯をぎりりと噛み締める。

葉月「いいんだ、これで・・・」

葉月は初めて、側にいる文香に向けて呟くようにそう告げた。

葉月の視線は宙を浮き、もう目が見えていないということが伺えた。

文香「くっ、おじ様、どうして・・・！」

葉月はゆっくりと口を動かした。その声ももう途切れ途切れだ。

葉月「もう・・・、妻や、子に、・・・会わせる顔が、ない・・・」

かつての正しい僕は、もうこの世にはいないのだから。そう言いたげだった。

文香「！？な・・・！」

文香は狼狽したが、すぐに口を大にして叫ぶ。

文香「だから自ら死を選ぶっていうの！？残された者の気持ちも考えもしないで！」

文香は死にゆく葉月の身体を揺さぶり、必死で呼びかける。

文香「あなたの妻や娘が、それを望んでるっていうの！？そんなわけないでしょう！！」

文香の必死の呼びかけにも、もはや葉月は反応しなかった。恐らく耳ももう聞こえなくなっているのかもしれない。

だがそんなことはお構いなしに、文香は叫び続ける。

自らのやるせなさや無力さ、そしてこのゲームに飲み込まれてしまった葉月に対して。

それを拭い去ろうと、必死で自らの気持ちをぶつける。

葉月は意識が遠のき、視界が暗くなる中で、家族のその姿を浮かべていた。

僕は、総一君達を裏切り、人を殺した。こんな僕を家族が知ったら、どう思うだろう？

怒るのか、悲しむのか、蔑むのか、いずれにしても、愛する者達のそんな顔を見たくはなかった。

ついこの間、娘が愛人と婚約したという話を聞かされ、ショックを受けていたことを思い出した。

だが、しかし、今は妻と娘が幸せになってくれればそれでいい。

僕のせいで水を差す必要などないのだ。娘は立派に巣立っていったのだ。

だから、葉月は誰にも気づかれることなく、この世を去る決意を固めたのだった。

意識が途切れるその瞬間、葉月のうつろな目には涙が浮かんでいた。

それは変わり果ててしまった葉月の、最後の想いであった。

・
・
・
・
・
・

葉月が息を引き取り、ショックを受けてうつむく文香の元に、PDAから総一の声が聞こえてきた。

総一『文香さん！無事ですか！？』

文香は総一達のことのが気になり、悲しみを覆い隠すように明るく振舞った。

文香「え、うん。こっちは大丈夫」

PDA越しに、総一の安堵の声が聞こえてくる。

文香「事情はあとで話すから。今どこにいるの？」

総一「今、戦闘禁止エリアの近くにある部屋にいます。かりんも一緒です」

文香「わかった、今すぐ向かうわ」

そしてPDAの通信を切る。

文香「……………」

通信が切れ、声も聞こえなくなったPDAを閉まった。

文香は悲痛な表情を浮かべ、涙が浮かんだままの葉月の目を、そっと閉じた。

文香「・・・え？」

文香はその時葉月のズボンのポケットから何かがはみ出ていることに気づいた。

それが見覚えのある形だったので、文香はそつと手に取った。

文香「！？これは・・・！」

それはPDAだった。だがしかし、それは葉月のPDAではないことは一目で分かった。

いや、正確に言えば、葉月の首輪を解除する為のPDAではない、と言っべきか。

そのPDAの画面には、道化師の姿が映し出されていた。

そして角の部分にはJOKERの文字が書かれていた。

文香「まさか、おじ様が持っていたなんて・・・」

彼女は深いため息をつき、そのPDAを回収したのだった。

・
・
・
・
・

文香は急ぎ足で、総一達が述べていた通りの部屋へと足を運んでい

た。

そしてその部屋のドアを開ける。

総一「文香さん、無事でしたか！」

総一は、部屋に入ってきた文香を見るなり、安堵の表情を浮かべて文香の元へ歩んできた。

部屋には総一だけでなく、壁にもたれる形で座っているかりんの姿もあった。そしてもう1人。

文香「え、高山さん！？」

そこには2人と一緒に高山の姿もあった。高山は部屋の隅で煙草をふかしながら総一達のやりとりを見ていた。

高山「無事でなによりだ」

文香の驚きにも反応せず、そう言った。

文香「どうしてここに？」

文香は一瞬身構えたが、高山がそれを制した。

高山「お前達が居た場所に、2つの首輪が近づいていくのがPDAを見て分かった。だから何かが起これると思ってここにやってきた」

高山の話によると、ここに駆けつけた時に、総一達が戦闘禁止エリアから出て行く所にちょうど鉢合わせをしたらしい。

最初は警戒して銃で牽制していた高山だったが、総一の必死の説得により、今ここに居るとのことらしい。

総一「あ、ところで文香さん。葉月さんは・・・」

簡単に事情を説明した総一は、文香の方に話を振る。

文香はその声に反応して総一に向き直る。

そして、事の顛末を述べていった。

・

・

・

総一「そう、ですか・・・」

すべてを聞き終わった総一は、悲しげな表情を浮かべ、そのままうつむいた。

文香「・・・おじ様の事は残念だけど、悲しんではかりもいられないわ」

文香は悲しみを断ち切るかのように話題を変えた。

文香「とりあえず私達の首輪を外しましょう」

文香の提案に異論はないようだった。

文香「私や高山さんが探していたJOKERなんだけど、あれは葉月さんが持っていたわ」

文香はそう言つて、道化師が描かれたPDAを前に差し出す。

高山「ほう」

部屋の隅から総一達のやりとりを伺っていた高山は、そのPDAを前にぴくりと反応する。

文香「ただ、おじ様のことから、偽装機能は使用していない可能性の方が高いわ」

たしかに、あの状態の葉月が、PDAを偽って人を騙すとは考えられないし、そうでなくとも『6』のPDAを持つ人を解除する為に使用するほど気が回っていたとも思えない。

文香「だから、高山さん。あなたの首輪を解除するのは少し待ってもらえないかしら？」

文香は尋ねる。

高山「問題ない。ゲーム終了までまだ時間がある」

高山は自身のPDAを取り出し、時間を確認する。

ゲーム開始より56時間経過／残り時間15時間

偽装機能を5回使用するには最低でも4時間は必要だ。だから文香と高山の首輪が外れるのはそれ以降ということになる。

文香「えーと、かりんちゃんの解除条件はPDAの収集だから・・・」

文香はそう言ってかりんの方に目を向ける。

かりん「うん。ここに来る前に、えっと、あの2人からPDAを回収したんだけど」

かりんはそう言って回収したPDAを順に前に出す。

PDAは全部で4個あった。それぞれ『J』『Q』『5』『7』の数字が描かれている。

かりん「ただ、この中にJOKERが含まれていると困るから、今までそのままにしておいたんだけど」

回収した時はこの4個に総一の合わせて5個。その時点ではまだ『2』のPDAを持つ高山とは合流してなかったから、JOKERが含まれているかどうか分らず、文香が来るまで待つことにしたらしい。

文香「と、すると今すぐ解除出来そうね」

文香は喜びの表情を見せる。

かりんも頷き、さっそくそれらのPDAを自分の首輪に差し込んで言った。

そして5番目に総一のPDAを差し込み、最後に自分のPDAを差し込んだ。

ピロリロリン

この場にはあまりに場違いのけたたましい音が鳴り響き、続いて合音声が首輪から流れてきた。

『おめでとうございます。あなたは首輪の解除条件を満たし、見事に首輪を外すことに成功しました』

言い終わると、首輪の端子部分から2つに開き、あっけないほど簡単に首輪はかりんの首から外れた。

かりんは外れた首輪を手に取り、それをじっと見た。

かりん「取れた・・・」

総一「やったな！かりん」

総一と文香も、我が事のように喜んだ。

高山も声こそ出さなかったものの、総一達の喜ぶ様を見て、口元には笑みが浮かんでいた。

かりん「あ、ありがとう」

かりんはようやく、このゲームの呪縛から逃れることが出来たのだった。

総一「これであとは文香さんと高山さんの首輪は外せば、万事解決だな」

総一のその言葉に、かりんの喜びは一瞬で失せてしまった。

文香「総一君・・・」

そう。残りの問題は総一の首輪だった。解除条件は【QのPDAを持つ人物の殺害】である為、どうやっても総一にはこの首輪が外れないのであった。

それに気づいた文香とかりんは、沈痛な面持ちを浮かべた。

そこに高山が口を挟んできた。

高山「少年の首輪を外す方法は後々探すとして」

そこで高山は一度言葉を切った。

高山「とりあえず身体を休めることだ。見たところお前達の疲労は著しい」

高山の意見に反対するものはなく、そのまま休息をとることにした。

・
・
・
・
・
・
・

第16話「度重なる悲劇」（後書き）

敵対するプレイヤーがいなくなり、文香達の首輪が外れるのも時間の問題。あとは総一の首輪を外すのみ。果たして総一は自身の首輪を外し、無事帰還することは出来るのか！？

次回は第17話「文香の過去」文香も総一同様、悲しい過去を持っていたのです。乞うご期待

第17話「文香の過去」

第17話「文香の過去」

作・桐島成実

【残りの生存者・・・4 / 13人】

現在の状態

関係	「グループA」		P D A	状態	総一との
	御剣	総一			
情	陸島	文香	(6)	健康	愛
		北条	(K)	足を負傷	信
普通	高山	浩太	(2)	健康	
		葉月	(4)	死亡	
疎遠	綺堂	渚	(?)	死亡	
		郷田	(?)	死亡	

敵対

色条 優希

(9)

死亡

信

頼

長沢 勇治

(?)

死亡

敵対

矢幡 麗佳

(8)

死亡

敵

対

姫萩 咲実

(Q)

死亡

普通

漆山 権造

(?)

死亡

知らな

い

総一と文香、かれんは、部屋の隅の方で隣り合って壁にもたれかかっていた。

3人共、木箱の中にあつた毛布に身を包んでいる。

高山はしばらくPDAを調べていたが、やがて確かめたいことがあるから2、3時間後に戻ってくると言い、総一達を残して何処かに行ってしまった。

高山の考えが読めなかった総一ではあつたが、JOKERがこちらにある上に、この状況では下手な手出しはしないと判断した為了承した。

かりんは首輪が外れた安心感からなのか、それとも優希の事で泣き

疲れたからなのか、すっかり寝入ってしまった。

その隣には文香が、さらに隣には総一がいた。

その総一も、しばらくは起きていたのだが、暫くすると寝息をたてていた。

文香は、さきほどの出来事が頭を駆け巡っていた。それは葉月が自ら死を選んだこと。

この出来事は、文香にとって到底受け入れがたい事だった。

文香は自分の生い立ちを思い出していた。

文香「私の両親が他界したのは、私が9歳の時だったわね・・・」

総一達を目覚めさせないように、心の中でポツリとそう呟く。

文香の人生は、はるか昔から続いているこの忌わしきゲームによって、すべてを狂わされたと言っても過言ではない。

それは文香の両親が、とある事故で死んだことを警察の人から聞かされた事に始まる。

独り身となってしまった文香は他に身寄りもなく、養護施設へと入れられることになった。

その院長を務めている人物は、とても優しい人で、まだ幼い文香を献身的に面倒を見てくれた。

他の、私と同じような境遇の人達とも、共に仲良く暮らしていた。

そんな文香に驚愕の事実が告げられたのは、文香が16歳になった頃だった。

ある日施設に、1人の男性が尋ねてきた。

院長「文香ちゃん」

文香「あ、院長センセイ。何か御用ですか？」

初めて院長に会ったときにちゃん付けで呼ばれていた為、16歳になった今も、この呼び方は変わらない。

院長「君に客が来てるんだ。今、応接室に居てもらっている」

文香「お客さん？」

この時文香は学生だった。アルバイトをしながら、今も施設に入れられている幼い子供達の面倒を見る日々だった。

その影響で、人との交流もある程度あった為、てっきりその内の誰かが尋ねてきたのだと思った。

だが、院長は浮かない顔だった。

院長「うーむ、その人とは、どうも会った記憶がないんだよねあ・・」

今までもここに来客がくる事は何度かあったが、院長先生の知らな

い人らしい。

文香「アルバイト先の人かなあ？とりあえず、会ってみます」

文香はそう言い、足早に応接室へと向かっていった。

ガチャ

文香はドアノブを回し、中に居る人物にお辞儀をした。

文香「こんにちわ」

そう言つて下げた頭を元に戻した時、その人物が、文香の知らない人物である事に気がついた。

文香「えーと・・・」

文香は必死に思い出そうとするが、中々思い出せない。

男性「あー・・・、とりあえず座ってくれまいか」

男性の促され、文香は男性の座るソファーと対面にあるソファーに腰掛ける。

その男性は30代から40代くらいの屈強な男性で、スーツを着ていた。

服装だけ見ると、どこかのサラリーマンの様にも見えるが、鍛え上げられた身体が、どうにもアンバランスに見える。

文香「ええと、大変申し訳ないのですが、どちら様ですか？」

結局誰なのか思い出せず、文香は正直にそう尋ねる。

だが、男性の返ってきた答えは意外なものだった。

男性「こうして顔を合わせるのは初めてだから、知るはずがないよ」

文香「??」

文香は首を傾げるが、男性はかまわず話を続ける。

男性「君のご両親が事故で亡くなられたことは覚えているかね？」

突然の質問に、文香は困惑する。

文香「はあ・・・」

間の抜けた返事だったが、男性は一通り説明していく。

男性「君のご両親は車で運転中に崖から転落死した。というのが事故の内容だと言われているが・・・」

そこで一度言葉を切る。そして真剣な眼差しで文香に視線を向ける。

男性「実はこれが偽りの、作られた事実だと言うことが、我々の見解だ」

文香「えっ・・・？」

文香はそこでゲームの存在を知り、文香の両親がそのゲームに巻き込まれて無残な最後を遂げたことを告げられた。

文香「あ、あの・・・」

それがあまりに荒唐無稽な内容だった為、最初はこの男性の作り話かと思った。

文香が戸惑っていると、男性は手荷物のスーツケースからパソコンを取り出した。

そしてそれを起動し、文香に見える様にパソコンを移動させた。

文香「！？」

文香が見た、パソコンに映る映像には、幼い頃の記憶に残る、両親の姿が映し出されていた。

文香「お父さん、お母さん・・・」

文香が思わずそう呟いたが、その表情は次第に驚きの色に染まる。

そこに流れる映像は、あまりにも無残なものだった。

知らない男に、文香の母親が刺されるシーン。

それを助けようとした父親が反撃を喰らって怪我を負い、思わずその男を刺してしまうシーン。

そして、血まみれの手で亡骸となった母親を抱きしめ、悲痛な叫び声をあげる父親の姿。

そして、その父親も銃撃によって・・・。

文香「う、ぐふっ・・・」

あまりにも惨たらしいその映像を見た文香は、思わず胃の中のをすべて吐き出しそうになった。

男性「・・・すまない」

男性はそう謝罪し、パソコンの映像を止めた。

そして文香が落ち着くのをしばらく待った。

文香が落ち着きを取り戻した頃、その男性は再び文香と目を向き合うに訴えかけた。

男性「先週、この養護施設に幼い少女が入居したそうだね」

男性の突然の話の切り替えに、文香は疑問に思う間もなく、うなずいた。

その男性の言うとおり、先週に、文香と同じ様に事故で亡くした両親の娘である少女が、この施設に送られてきた。

その子は文香が始めてここに訪れた時よりさらに幼く、まだ6歳の子であった。

男性「その子の両親も、君の両親と同じく、このゲームに巻き込まれた犠牲者なんだ」

文香「えっ!？」

文香は驚きの声をあげた。

男性「もちろんそれは世間には公表されていない。知っているのはゲームの関係者と、我々だけということになる」

そして男性はいよいよ本題に入る。

男性「我々はこのゲームを運営している組織に対抗する為に作られた、いわばレジスタンスのようなものだ」

そして男性は文香の肩に手を置いた。

男性「我々は同じ境遇の人を集め、いつかはこのふざけたゲームを運営している連中を潰す為に活動している。そこでぜひ君の手を借してもらいたい」

そこでやっとな文香は、この目の前にいる人物が何者なのかを悟った。

おそらく、この男性も同じ様な境遇にあったのだろう。そしてそれを行った連中に復讐しようとしている。

だから身体を鍛えて、こうして仲間を集めているのだと。

とは言うものの、当初は半信半疑であった。だが、やがてそれが真実なのだということが分かってきた。

更にはかなりの回数、このゲームが行われ、そしてたくさんの命が失われていることを知り、彼らの組織、レジスタンスへと身を投じたのである。

それから10年間。文香は様々な訓練を受け、戦いを中心とした様々な鍛錬を積む日々が続いた。

そして、今日。このゲームに一般人として密かに参加しているのであった。

そう、すべてはこの忌わしきゲームを壊す為の下準備をするために。

心優しい文香は、その想いを胸の内に秘め、このゲームに身を投じていたのであった。

文香「思えば、この10年間。本当の休息なんてなかったなあ・・・

」

訓練の積み重ねの毎日で、本来なら青春真っ盛りの年頃である文香には、まるで青春とはかけ離れた日常だった。

一般人を装う為、ある有名な会社の受付嬢に就職した。

だが、遊ぶ時間などほとんど皆無の文香は、恋愛はおろか、友人と遊び歩くこともままならなかった。

文香が今、欲していたのは、疲れきった心を癒す場だったのかもしれない。

今の文香には、本当の意味で心を寄せ合うことの出来る相手はいなかった。

だからだろうか。自ら親しき人との別れを選んだ葉月の事が、どうしても頭から離れられなかったのだ。

死んでしまつては、もう2度と話すことも、分かり合うことも出来ないのだから。

・

・

・

文香が物思いにふけっていると、隣にいる総一がもぞもぞと動き出した。

思わず視線を向けてみると、目を開けて虚空を見つめる総一の姿があった。

文香「お目覚め？」

文香はいまだブーツとしている総一に、優しく語り掛ける。

総一「あ・・・、文香さん。・・・起きてたんですか」

総一は寝ぼけた表情のまま、顔だけを文香の方に向けた。

文香は、その表情を見て、自然と微笑みが浮かんでいた。

総一「うーん・・・」

あまりにもだらしないその顔を見て、文香にちょっとしたイタズラ心が生まれた。

文香は両手の指を、まぶたを擦っている総一の頬に持つて行き、引っ張った。

総一「ふやっ！？ふあ、ふあんふえふか？」

総一のその驚きの声が可笑しくて、つい笑いがこみ上げてきた。

文香「くくっ、あはははっ」

心の底から笑ったのは、ずいぶんと久しぶりの様な気がした。

文香はひとしきり満足すると、引っ張っていた両手を離れた。

総一は何がなんだかわからない、といった表情だった。

文香「ゴメンゴメン、総一君の驚く顔が見たくって、ふふっ」

文香は手を振り、笑いをこらえつつ謝る。

総一「もう、ひどいですよお、文香さん」

だが、文香の満面の笑みを見た総一も、つられて笑顔になった。

やがて、笑顔を向け合う2人だったが、文香がふと語りかけた。

文香「ねえ、総一君」

総一「なんです？」

文香「もし、ここから出られたら、私とデートしましょうか？」

総一「え・・・？」

総一は驚きの表情を浮かべたが、文香の軽いノリなのかなと思い、OKする。

総一「いいですよ。文香さんが相手なら」

文香「そっか」

文香はそう言っ総一を真正面から見つめる。

文香「それなら、約束の印として」

文香はそつと総一に顔を寄せ、そして、

チュッ

総一の唇に自らの唇を押し当てた。

総一「!？」

文香の突然の行動に、総一は目を白黒させた。

そして文香が唇を解放するまでの数秒間。文香にとって、長く、大切なひとときであった。

総一「あ・・・」

文香「これが約束の印。だから約束破っちゃ嫌よ」

文香は頬を赤く染めながらそう言った。

文香「だから必ず生き残りましょう。私が、あなたを絶対に守ってみせるから」

文香は心にそう固く誓うのであった。

・
・
・
・
・

第17話「文香の過去」（後書き）

安らぎを与えてくれる人とめぐり合うことが出来た文香。果たして文香は無事、総一を生還させることが出来るのか！？

次回は第18話「わずかな希望を求めて」総一を生き残らせる為に、文香達は足掻く為に行動を開始します。乞うご期待

第18話「わずかな希望を求めて」

第18話「わずかな希望を求めて」

作・桐島成実

【残りの生存者・・・4 / 13人】

現在の状態

「グループA」		PDA	状態	総一との
関係				
御剣	総一	(A)	満身創痍	
陸島	文香	(6)	健康	愛
情				
北条	かりん	(K)	足を負傷	信
頼				
高山 浩太		(2)	??	
普通				

総一と文香のやり取りから4時間あまりが過ぎた頃、どこかに出かけていた高山が戻ってきた。

文香「あ、おかえりなさい。高山さん」

総一と文香はそう言って部屋に入ってきた高山を迎え入れた。

かりん「んん・・・」

かりんもそれに気づいて目を覚ます。

総一「・・・どうしたんです？その格好」

総一は高山の姿を見て驚きを隠せなかった。

その両手に持っているのは狙撃用のライフル。腰には小型のサブマシンガンを装備しており、手榴弾がいくつか、あと大型のサバイバルナイフまで所持していた。

高山は手に持っていたライフルを壁に立てかけ、そこに腰掛けた。

そして煙草を取り出し、ライターで火をつけて一度吸ったのち、息を吐いた。

高山「予想はしていたが、やはり武器を使うことになったな」

高山の言う意味が分からず、総一達は困惑する。

すると高山はポケットをまさぐり、あるものを取り出した。

文香「PDA・・・？」

それは『5』の数字が描かれたPDAであった。

そして高山は事の成り行きを説明する。

高山「俺は以前、例の女2人組と接触したことがある、というのは前に話したな」

高山のその問いに、総一達はうなづく。

高山「その時に、2人が会話をしていたんだが、引つかかることを言っていたのを思い出してな」

高山は煙草をふかしながら、話を続ける。

郷田『ところで、あなたの方にも指令が届いているはずでしょう?』

渚『はい、ちゃんと届いてますよお』

この台詞は、麗佳が殺された際に郷田と渚が話していた会話である。

高山「『指令』ということは、俺達以外の誰かの干渉があったということだ」

総一「干渉・・・?」

高山「そうだ。そして、俺のPDAに首輪を探知するソフトが組み込まれているんだが、検索した際に一度だけ首輪の数が足りなかったことがあった」

総一「えっ!?!」

文香「首輪が足りない・・・」

総一と文香はお互い顔を見合わせる。

高山「お前達と初めて出会う少し前だったか。あの時に首輪を検索したんだが、数が5個という結果になった」

高山「だがそれはおかしいことに気づいた。なぜならその後例の女2人組が現れたからだ。俺とお前達3人と合わせて4個。どう考えても数が合わん」

高山「最初は2人組のPDAに首輪の感知を阻害するソフトが組み込まれていると考えていたが、後でPDAを調べたがそのソフトはなかった」

総一は、高山が熱心に渚達のPDAを調べていた事を思い出した。

高山「だがこう考えれば納得がいく。阻害したのはソフトではなく、彼女達自身だということだ」

文香「それは、どういうことかしら？」

文香は問い返す。高山は淡々とした口調で続けた。

高山「簡単なことだ。PDAに書かれた地図の範囲外に出た、ということだ」

総一「あつ、そうか!？」

総一はハツと気がついた。便利なものがあると、ついそれをあてに
してしまい気がつかなかったが、少なくとも俺達がここに連れ込ま
れた秘密のルートがあるはずだ。

1階のエントランスはセメントで固められていたし、まさかあそこ
から出入りしたとは考えられない。

渚さん達はその秘密のルートに行ったが為に、総一達の地図には投
影されなかったのだ。

高山「だから彼女達が持っていたPDAを徹底的に調べた。その結
果2つのPDAの地図に、他のPDAにはないルートが書かれてい
た」

高山「だからそのルートの付近を調べれば、何かがわかるかもしれ
んと思つてな。調べに行ったということだ」

総一達は驚きを隠せなかった。秘密のルートの事もそうだが、高山
さんがそこまで考えていたなんて。

高山「案の定隠し扉があった。無理やりこじ開けて中に入っただけ
いが、熱烈な歓迎が待っていた。オートガンや自走ロボット、自走
地雷なんかもあったな」

それを見越して、武装していたということか……。けど、一つ腑
に落ちないことがあった。

総一「それなら、なぜ俺達に知らせなかったんです？」

総一の疑問ももつともだ。

高山は新しい煙草をくわえてライターで火をつけた。

高山「秘密にしていた訳だから、奴等にとっては知られたくないルートだったはず。そこに行つた場合、有無を言わさず消される可能性がある。そうなった時にお前達まで居ては全滅しかねん」

総一「しかし、知らせるくらいは・・・」

高山「お前達に全部知らせたら、断つても付いて来るつもりだっただろう？」

高山はすべてを見越して、総一達に知らせないことにしたのだ。

もし高山自身に何かがあつても、総一達を巻き込まない為に。後から秘密のルートに総一達が侵入した場合、高山と同様の道を歩むことになるからだ。

・・・というのは建前で、実際の所、怪我人を連れて行つても足手まといになると考えたのだが。

総一の首輪を外すだけではなかった。もし連中が見境なく殺す手段に出た場合、ゲームが終了した時点でもはや用済みと消される可能性が大だ。

そうなつては、首輪の解除など意味をなさない。多大にリスクを背負つてでもそうせざるを得なかったのだ。

高山は煙草の煙をふうと吐くと、そこで一旦言葉を切った。

高山「・・・だが、奴等はそれすらも想定内だったようだな」

総一「どういうことです？」

高山「奴等はたしかに攻撃してきたが、あれでは始末するというより、争わせそうという感じだった。俺達を殺す手段なら、もっと確実な方法もあったはずなのに、だ」

高山はそこで初めて、眉をひそめる。奴等の手のひらの内で踊らされている事が不愉快なのだろう。

高山「奴等はその秘密のルートに入れ、と暗に言っているんだろうな。だがしかし・・・」

高山はそこで考え込む仕草をする。

総一「どうしたんです？」

高山「いや、何でもない。ともかく、そのルートの障害はすべて取り除いた。もちろん後で再度配備される可能性もあるが・・・。一緒に来るか？」

文香「あ、待って、高山さん」

文香が不意に呼び止める。

高山「ん？なんだ？」

高山は文香の方を見た時、それに気づいた。

文香の首にはまっているはずの首輪。それがなくなっていた。

そして文香はJOKERを取り出して、高山に手渡した。

文香「せっかくだから、首輪を外してから行きましょう」

こうして、文香と高山の首輪は、それぞれの主から外れたのであった。

首輪が外れたことに素直に安堵した高山は、再び気を引き締めて、話を本題に戻した。

高山「ここからだ、さほど遠くない位置にそのルートがある。外への出口は見当たらなかったが、コンピューターらしきものがあった。・・・俺はコンピューターの扱いには慣れていないから、その点の手助けを願いたいのだが」

文香「わかったわ、じゃあ私が・・・」

文香が名乗り出たが、言い終わらない内に総一も名乗り出てきた。

総一「俺も行きます」

文香「だめよ、総一君。あなたの怪我も軽くないんだから」

文香はそう言ってたしなめようとする。だが総一も引かない。

総一「俺、もうこれ以上人が死ぬのは見たくはないんです。もう後悔はしたくない・・・」

文香「総一君・・・」

文香はそつと総一の肩に手を置いた。

文香「あなたは、ここに残つて。かりんちゃんを守ってほしいの」

ずつと話を聞いていたかりんは、自身の名前が出てきたので、とつさに口を挟む。

かりん「私も一緒に」

言いかけて、やめた。自力では歩くことも出来ない自分は、足手まといにしかない。その事はよく分かつていた。

総一も、かりんを1人にさせるわけにはいかないと判断し、文香の言い分を受け入れた。

総一「じゃあ、文香さん達にすべてを託します」

文香「まかせておいてっ！」

文香は大げさに胸を張った。

総一「何かあつたら、PDAの通信機能を使って、俺達に知らせてください」

文香「ええ、わかつたわ」

先に立っていた高山は、腰に下げていた小型のサブマシンガンを手

に取った。

高山「気休めになるかどうか分かんが、これを持っておけ」

そしてそれを総一に投げ渡した。

総一はあやうく落としそうになったそれをしっかりとキャッチする。

高山「他のプレイヤーが襲ってくることはないが、備えあれば憂いなしだ」

総一は小型のサブマシンガンを手に持ってみる。それは今まで持っていた拳銃よりもはるかに重かった。

文香「じゃあさっそく行きましょうか、高山さん」

高山「了解した」

こうして、文香と高山は総一の首輪を外す為、引いてはこのゲームの舞台となった建物から抜け出す為、行動を開始したのだった。

・
・
・
・
・
・

近くの部屋で武器をかき集めた文香達2人は、秘密のルートがあるという場所まで一直線に向かっていた。

文香「ところで、高山さんはその秘密のルートのどこまで行ったのかしら？」

文香は周りを警戒しつつ、すぐ隣にいる高山に話しかけた。

高山「狭い通路の角を2つほど曲がった先に扉があった」

高山「その扉の先には部屋があったが、その奥の方に大型のコンピュータやら多数のモニターやらが部屋を中心に置かれてあった」

文香「と、いうことは、そこが制御室ということになるのかしらね」

高山「恐らくな。だが奴等がそんな重要な箇所をいつまでもガラ空きにするとは思えん」

高山は手に持っているPDAを操作した。

ゲーム開始より65時間経過／残り時間8時間

高山「間に合うか・・・」

自然とその足取りは速くなる。高山が以前相手をした時よりさらに重厚に阻まれてしまえば、それだけ時間をロスしてしまう。

だが、高山のその不安とは裏腹に、文香達は難なくあっさりと中央制御室へと足を運ぶことに成功したのであった。

・

・
・
・
・
・

文香「ここが中央制御室・・・」

文香はその部屋に足を踏み入れるなり、そう呟いた。

このゲームの壊滅を企む文香にとって、そこに入れるのは絶好の機会であった。

文香はさっそく、コンピュータの端末を使い、片っ端から調べ始める。

高山は何か仕掛けられた際に対処する為、周りを警戒していた。

文香「こうじゃないか。こっちも、ああ違う・・・」

文香の手と指はせわしく動く。何か手がかりが得られないか、無音の部屋に、カタカタと端末をいじる音だけが響く。

文香「くっ、予想はしてたけど、やっぱりダメか・・・」

文香は思わず端末を叩く。

高山「どうした？」

高山は視線を文香に向けた。

文香「このコンピュータの制御プログラムにアクセスしようとした

んだけど」

文香はそう言っただけで目の前にあるモニターの画面を見た。

そこには、パスワードを要求する画面が表示されていた。

文香「どうやら、このパスワードを入力しないと、アクセスは出来ないみたいね」

文香はその画面を恨めしそうに見た。ここさえ突破できれば、システムを暴くことだって出来たかもしれないし、総一を殺すペナルティを解除することだって出来たかもしれない。そんな淡い希望は文字の壁に打ち砕かれてしまった。

文香「パスワードを解除する術も時間もない。どうすれば・・・」

文香はあきらめず別の方法を考えた。

だがどれもこれも失敗に終わり、文香の顔にも焦りが出始めていた。

そして最後の手段として、文香はある決断をする。

文香「高山さん！」

高山「なんだ？」

律儀に警戒を続けていた高山は、コンピュータの端末から離れ、床に伏せて前かがみになっている文香を目撃する。

文香はコンピューターの内部を調べていたようで、コンピューターの蓋が外されていた。

文香は高山を手招きする。

高山が文香と同様前かがみになり、文香の指が示す先へと目線移動す。

文香「これ、恐らくこのメインコンピューターの集積コードなんだけど」

文香はいくつか束になっているコードを手に手繰り寄せた。

文香「これを切断してほしいの」

高山「すると、どうなる？」

高山は視線を文香に移す。

文香「コンピューターの制御が行き渡らなくなって、総一君に対するペナルティが作動しなくなる」

文香「ただ、それで完全に危険が排除できるかどうか。他の障害が発生するか、不確定要素があまりにも多すぎるけど・・・」

高山「もはや手段を問う余地はないということか」

文香はうなずく。

高山「だが、それならいっそのことコンピューター自身を破壊すれ

ばよいのではないか？」

高山の提案に文香が首を横に振る。

文香「そうになると、2度とコンピューターは使えないわ。もしそれで不都合が出た場合、致命的になりかねない」

高山「なるほど。コードだけなら、切れても繋ぎなおせば良いだけか」

もつとも、すべてのコードを繋ぎ合わせる時間があるかと言えば、かなり際どくはあるのだが。

高山「わかった。さっそく開始しよう」

高山はそう言つて腰にあるナイフに手をかける。

それを強引にコードに当てて切断していく。

ブチ、ブチブチ・・・

束になっているコードは、1本ずつ真つ二つに分かれていった。

そして最後の1本まで切断した時

文香「あ！」

突然、部屋の照明が消えてしまった。

文香「高山さん！」

真っ暗になった空間の中、高山がいるはずであろう方向を見る。

高山「どうやら、ここの照明のコードも含まれていたらしいな」

暗闇の中から高山の声が聞こえてくる。

どうなら無事のようなのだ。

部屋を見渡すと、コンピューターだけでなく、総一達の様子を映し出していたテレビ画面もすべて電源が落ちていた。

文香「とにかく、ここから出ましょう」

高山「了解した」

そして文香は、扉を探す為、足を1歩踏み出した時、突然文香達を持つPDAのアラームが鳴り始めた。

文香「!?!」

文香は慌ててPDAを取り出す。PDAの画面の光が、この部屋の唯一の明かりだった。

そこに描かれていたのは、カボチャ型のキャラクターが大写しになっていた。

そのキャラクターは、同時に流れてきた場違いとも言える軽快な音楽と共に軽快なステップを踏んでいた。

しばらくすると、ステップを止め、かわりに身振り手振り3頭身の身体を動かし始めた。

??『やあ、ようやっとボクの出番だねっ。もう退屈で退屈で死にそうだったよ』

更にその力ボチャの怪人は耳につく甲高い声で喋り出した。

音楽やしぐさ同様、その口調も軽快だった。

それと同時に喋った内容が文字となって画面に表示されていく。

??『おっと、まだ名乗ってなかったよね。ボクの名前はスミス』

そう言うのと、スミスは右手を開いて手を振った。

スミス『お、どうやら首輪が外れた人がいるみたいだね。とりあえず、おめでとうと言っておくよ。死ななくてよかったね!』

まるで他人事のスミスの発言に、文香は底知れぬ怒りを覚えていた。

スミス『おやあ?、まだ首輪を外してない人がいるよお』

スミスは大げさに表情を作り変える。

スミス『早く外さないと、あと2時間で首輪が作動しちゃうから、急いで急いで!』

ゲームの残り時間はあと3時間。首輪の作動はその1時間前に作動

してしまうから、実質残り2時間・・・。

スミス『あ、そうそう。肝心なことを言うのを忘れてたよ!』

スミスはそう言って話を切り替える。

スミス『今君たちがいる中央制御室なんだけど、確かにそこから色々制御をコントロールすることが出来るんだよね』

君たちというのが、もちろん文香自身を指すのだろっ。

スミス『でもさ、実はそのメインコンピュータがなくても、別のルートからコントロールすることが出来たりするんだよね』

文香『なん、ですって・・・』

文香の顔がみるみる青ざめていく。

スミス『君たちがいる建物からはるか遠くに離れた位置からすべてをコントロール出来る。もちろんペナルティもね。そういうわけだから、残念だったね、文香さん』

最後に自身の名を呼ばれ、文香は床に膝をついた。

文香が所属する組織では、たしかにこの建物のはるか遠くから、運営者側の人間や、それを見ている観客達がいることは知っていた。そして、ここでの惨劇が放送されている事も。

そこからゲームの運営、進行をしている事ももちろん知っていたが、

ここでの情報を得る為には、当然コンピューターを介して運営者側に伝えられるはずだった。

だから、中継の役目を果たしているメインコンピューターを使えなくしてしまえば、少なくとも向こうからの指令、つまりペナルティの制御は利かなくなるのではないかという狙いだった。

だが、それは甘かった。

文香の願いは、虚しく散っていったのだった。

そんな文香の様子を無視して、スミスは喋り続ける。

スミス『だからさあ、君たちがどうあがいても、このゲームを止めることは不可能って訳』

そこでスミスはしばらく間をとった。

スミス『ん〜、でもさ。君の必死で総一君を生き残せようという熱意を観客が感じとってるんだよねえ』

スミス『そこで、君たちに朗報だよっ！』

スミスは変わらないの甲高い声でそう宣言した。

スミス『実は、あと2時間でペナルティが開始されちゃうんだけど、ペナルティが執行される1時間。君たちがそれに耐えられるかっていうエクストラゲームを用意したんだ！』

文香「え・・・？」

伏せていた文香の顔があがる。

スミス『前に漆山のおじちゃん。あー、君たちが最初に見たペナルティの犠牲者の事なんだけど。あの時に使用した【追跡ボール】なんだけどね』

スミス『ペナルティが執行される1時間の間だけ、その追跡ボールのみの執行にしようと思うんだ』

スミスはそこで、目の形を斜めに変える。

スミス『ボクとしては、もっと派手なのがいいんだけど。まっ、しょうがないかつ！』

文香は記憶を手繰りよせる。たしか自走地雷は時速6キロの速さで移動し、対象者を追跡して接触した瞬間に爆発するというシロモノだったはず。

うまくすれば1時間逃げ切れることが出来るかも……。

スミス『あ、でも、もし首輪が外れてない人が1人でも死んじゃったら、君たち4人も一緒にペナルティの対象になっちゃうから気をつけて！』

文香『なっ！？』

文香は絶句した。今に始まったことではないが、命を玩具のように扱う彼らに、必死で怒りをこらえていた。

与えられた希望ではあったが、藁にもすがりたい気持ちだった文香は、それに乗らざるを得なかったのだ。

みんなが生き残る可能性、そしてみんなが死ぬ可能性。

もちろん犠牲を出したくない文香にとっては選択の余地はなかった。

文香「高山さん！」

文香はPDAから目線を外し、いまだ暗闇の中にいる高山に話しかけた。

高山は文香が何を言いたいのかわかった。だが難しい表情のまま、立ち尽くしていた。

そしてふと目線を文香へと向けた。

高山「いまさら聞くようだが」

文香「え？何？」

高山は目線を鋭くして尋ねた。

高山「お前達はなぜこつもお互いに信頼出来る？誰かが裏切るとは思わないのか？」

高山が見てきた文香と総一達を見る限り、お互いに疑いというものが感じられなかった。

それは高山がずっと思っていた疑問であつた。

それを聞いた文香は、軽く息をついた。そして腰に手を当て、静かに語つた。

文香「私は他人を見る目は持つてゐるつもりよ」

文香「そして一緒に行動を共にしている内に確信したの。あの子達は絶対に裏切らないつて」

文香のその自信にあふれたその表情が、その言葉を裏付けていた。

高山「しかし、物事に絶対はないぞ」

高山はピシヤリとそう断じる。だが文香の心に迷いは一欠けらもなかった。

文香「たしかにそうね。それでも、私はあの子達の事を信じてる」

高山は鋭い目線をずっと向けていた。どうやら文香の真意を探っているようだった。

やがて高山は、その視線を逸らした。

高山「・・・いいだろう。乗りかかった船だ」

信頼は理屈ではない、か。それでいいのかもしれない・・・。

高山も、この文香の想いが偽りだとは思えなかった。それは高山自

身が心で感じ取ったものだった。

そして、総一達と運命を共にする決意を固めたのであった。

高山は行動の端々から、文香に対する力強さを感じ取っていた。

このゲームに必死で抗おうとする、歴然とした意志が。

ここで死なせるにはもったいない。高山はそう率直に思ったのだった。

文香「とりあえず、総一君たちと合流しましょう」

高山「了解した」

文香は手探りで扉のノブを探し出し、その扉を開けたのだった。

・
・
・
・
・

第18話「わずかな希望を求めて」（後書き）

総一達の最後の戦いが始まろうとしています。果たして総一達は無事この戦いで勝利を収めることが出来るのでしょうか？

次回は第19話「ラストゲーム」物語は最終局面へと突入していきます

第19話「ラストゲーム」

第19話「ラストゲーム」

作・桐島成実

【残りの生存者・・・4 / 13人】

現在の状態

「グループA」 関係	御剣 総一	(A)	??	??	PD A	状態	総一との
北条 かりん	信頼	(K)	??	??			
「グループB」 陸島 文香	愛情	(6)				健康	
高山 浩太	良好	(2)				健康	

暗闇に包まれた中央制御室から出た文香達は、通路を壁沿いに進み、慎重に暗い床の上を踏みしめていた。

そして、隠し通路を脱出した文香は、突如目に入ってきた眩しい光に目を細める。

文香「どうやら、ここの電気は生きているみたいね」

高山「そのようだな」

一面コンクリートの通路には、天井に幾多もある蛍光灯が、変わらず明かりを灯していた。

文香「さっそく総一君達と連絡を取りましょう」

文香は素早くPDAを操作して、通信機能のボタンを押した。

ガ・・・ガガ・・・ガ

暫くの雑音のち、PDA越しに総一の声が聞こえてきた。

総一『文香さん！無事ですか！？』

総一の心底心配する声が聞こえてくる。

文香「大丈夫よ。何も危険なことはなかったわ」

総一を安心させる為、文香は率直にそう言った。

文香「それより、総一君。そっちの方で変わりはないかった？」

文香がそう言うなり、今度は焦り気味の声が聞こえてきた。

総一『ついさつき、PDAにカボチャのキャラクターが現れて、エクストラゲームを開始するって』

どうやら、文香達が見たあのカボチャの怪人は、総一達の所にも同様に現れたらしい。

文香「それなら話が早いわ！今すぐそっちに向かうから」

こうして、文香達は総一達の居る所へと急いだのだった。

・
・
・
・
・

4人が合流し、お互いの無事を確認した後、高山の提案で更なる武装をすることにした。

近くの部屋を素早く探索して、適当な武器をかき集めた。

文香「出来れば総一君達に、こんな物騒な兵器は使ってほしくないけれど、そうも言っていられないわね・・・」

文香は今自身の手に持っているアサルトライフルを見ながら、そう思わずにはいられなかった。

総一達が入った部屋には、これまでの武器とは比べ物にならない武器の数々が敷き詰められていた。

強力なガス弾とガスマスク、大型のロケットランチャーなんかあ

った。

もはや文香自身も驚きというより、ただただ呆れるしかなかった。

追跡ボール相手にガス弾は役に立たないし、ロケットランチャーは大きすぎてかさばってしまう。

結局手にしたのはアサルトライフル2丁と大量の予備の弾薬だった。

それを文香とかりんが手に持った。総一はかりんを支えているので、武器を持つことが出来なかった。

次は一本道の通路の前後に、部屋にあったものを移動させ、即席のバリケードを作っていた。

こうしておけば、追跡ボールの進入を少しは防げると思ったからだ。

バリケードを2つ作り、総一達はその間に陣取った。

すべての準備が整ったその時、総一的首輪から電子音が聞こえてきた。

『あなたは首輪の解除の失敗しました。ペナルティが15秒後に開始されます』

それは、これから始まる死闘の開始の合図だった。

・
・
・
・
・

ズガガガカッ

銃声があたりに木霊する。

ガシャンバリン！

次々にこちらに向かってきては打ち落とされる追跡ボールの数々。

だが、その数は半端なものではなかった。

文香「一体いくつあるって言うのよ！」

文香は思わず毒づく。

総一達はバリケードを両側に構え、片方を高山、反対側を文香、その2人に挟まれる形で総一とかりんがいた。

2人とも怪我をしている為、満足に動けない。又、反動の強い連射式の銃を撃つとなると、身体への負担が大きいと判断して、2人を守る布陣を敷いた。

高山「全くだ。このゲームには際限がないようだ」

ズガガガガッ

バリングシャ！

バリケードはすでに追跡ボールの爆発によってボロボロになっていた。

爆発はしても、手榴弾のように破片が飛んだり爆風が発生したりすることは無い為、今の所総一達自身には被害がないものの、開始10分にも満たない間に、既に50個を超える数が、総一達に襲い掛かってきていた。

床に散らばる残骸の数々。そして銃撃により、コンクリートにいくつもの削られた跡を作っていた。

高山「むっ」

高山が待ち構えている側の通路から、一斉に追跡ボールが固まってこちらへやってきた。

通路に敷き詰められたボールの数々。高山は腰にあった手榴弾のピンを抜き、接近してくる追跡ボールめがけて投げつけた。

高山「伏せろ！爆風が来るぞ！」

高山のその叫び声と同時に、手榴弾が爆発した。

ズウウン

そして同時に聞こえてくる金属の破壊される音。

爆風が収まり、そして床一面に残骸が敷き詰められる。

高山「これではキリがないな・・・」

息をつく暇もなく続けて襲ってくる追跡ボール。その為、銃撃が止むことはなかった。

高山は手持ちの弾薬をちらりと確認する。

高山「まずいな。このまま続けた場合、弾薬はあと30分持つかどうか分からんぞ」

銃撃を開始してから15分経過していた。しかし弾薬はすでに3分の1以上を消費していた。

探索した部屋の弾薬はすべて持ち出して、手元に持ちきれないものは各々のリュックサックに入れていたが、それでも十分とはいえなかった。

もしかしたらバリケードを作るより、弾薬を探すべきだったかもしれん。

高山は自身の判断ミスを、今更ながら後悔していた。

かりん「このままじゃ、いつかはやられちゃうって事？」

総一に支えられる形で高山の後ろにいたかりんは、高山の背に向けてそう尋ねる。

高山「そうなるな。どこかで補充をしなくてはならんが・・・」

だが総一達が居る通路には部屋がなく、補充する為にはこの場所を放棄しなくてはならなかった。

高山「止むを得ん。移動するぞ」

総一はPDAを取り出し、近くに部屋がないか確認した。

総一「この通路に部屋がいくつか並んでいます。ここに移動しましょう」

迷っている暇はなかった。その間もひっきりなしに戦闘は続いていた。

総一はかりんを担ぎながら、高山の隣まで行きPDAを見せた。

高山「わかった。そこまでの案内は頼むぞ」

総一と高山が先頭に立ち、追跡ボールを破壊しながら少しずつ進んでいった。

・
・
・
・
・

一本道の通路を進んでいた総一達は、その先に左に曲がる通路があるのが見えた。

総一「あそこを左に曲がってください」

高山「了解した」

そしてその通路の前まで歩んだ。そうすると、位置的に3方向から自走地雷がやってくることになる。

かりん「ここはわたしが」

かりんは左に曲がる方の通路に向けて、アサルトライフルを構えた。

総一「待て！かりん」

側にいる総一が、かりんを止めようとした時、その左側の通路の壁の一部分が空いたのに気づいた。

そしてそこから追跡ボールが転がり出てくる。

かりん「わっ！」

かりんはとっさに出てきた追跡ボールに銃口を向けて、弾を放った。

ガガガッ

バリッ！

追跡ボールを破壊する事に成功したが、その反動で支えていた総一とかりんの身体が大きく揺らいた。

総一は、とつさに足を動かして、なんとか体勢を立て直した。

総一「かりん！無茶を」

ガコン

総一「えっ！？」

総一が踏ん張った際に踏んだ床が、少し沈んだ。

それに気づいた時は、すでに事が始まっていた。

ガシャーン！

突然総一達の足下から床が消えた。床が真下に開いたのだ。

高山「なに！」

通路の一面が落とし穴となったその上には総一、かりん、高山の3人の足があった。

文香「総一君！！」

素早く反応した文香は、とつさに武器を手放し、総一に向けて手を伸ばした。

だが手は届かず、とつさに身体を投げ出すように勢いをつけた為、文香は倒れる形で総一達と共に落とし穴に落ちてしまった。

・
・
・
・
・
・

落とし穴に4人揃って落ちたその下には、ベッドがあった。

最初に3人が落ちた時はそれがクッションの役目を果たした。

だが、そこから後から文香も落ちてきて、先にベッドの上に居た総一の上に押しつぶす形で落ちてしまった。

総一「ぐわああっ」

文香が落ちた時の衝撃が、総一の身体にのしかかる。元々全身に怪我をしていた総一は、全身に走る激痛に、たまらず悲鳴をあげた。

その事に気づいた文香は、慌てて総一の身体から飛びのいた。

文香「そ、総一君！」

文香は慌てて総一に呼びかける。気を失ってはいないものの、総一は今も感じる激しい痛みに呻いていた。

高山「ここは、戦闘禁止エリアか!？」

同じく飛び起きた高山はとっさに周りの状況を確認した。他の部屋にはない立派な内装。間違いなく戦闘禁止エリアだった。

それに気づいた高山は側にいる3人に叫んだ。

高山「急げ！ここにいてはやられるだけだ！この部屋から出るぞ！」

スミスは、すべてのフロアの進入禁止エリアを解除するとは言ったものの、戦闘禁止エリアを解除するとは一言も言っていなかったのだ。

高山はアサルトライフルを背中に担ぎ、有無を言わず、総一の身体を半ば担ぎ上げる形で部屋の出口へと急いだ。

文香「た、高山さん！？」

とっさに止めようとした文香だったが、今置かれている状況に気づき、最善の行動を取るべきだと理解した。

文香「かりんちゃん、大丈夫！」

そう言いつつ、かりんの身体を引き寄せ、肩を貸して高山の後に続いた。

戦闘禁止エリアに出るその時まで、追跡ボールが接近してこなかったのは、総一達にとって幸運だっただろう。

部屋の外に出た高山は、とっさに持っていたPDAを取り出し、地図の画面を呼び出した。

高山「ここは・・・5階か」

地図を見ていた高山だったが、すぐに目を離し、総一達の方を向く。

高山「ついてこい！良い迎撃場所がある」

高山は総一を抱えたまま、先頭を歩き出した。

通路の先にも追跡ボールが現れたが、まだ集結していないのか、その数はまばらだった。

高山は総一の足を持つ手を離し、総一の腰に付けてあったサブマシンガンを片手で持ち、追跡ボールに銃口を向けた。

ガガガッ

グシャッ！

片手の上、無理な体勢から撃った為、狙いは正確ではないが、それでも破壊する事に成功した。

だが銃の反動で身体が揺れ、総一がうめき声をあげる。

高山「もうすぐだ！それまで我慢しろ」

高山は意識がもうろうとしている総一に向かって必死で呼びかける。

そしてたどり着いた先は、この5階の片隅にある、通路の行き止まりの部分だった。

文香「ここは？」

後ろから文香が尋ねるが、すぐに驚きの表情へと変わる。

高山「説明は後だ。とりあえず部屋の中へ入れ」

高山が指差すその先には、小部屋へと続くドアがあった。

文香が驚いたのはそのドアの手前にあるものだった。

まず最初に目に付いたのは、ドアの前に積み上げられて作られたバリケード。

そしてそのバリケードの向こう側には大型の黒い機関砲が通路の中央に陣取っていた。

また、それ以外にも爆発物を始めとする軍用の兵器など色んな種類の武器に、食料や医薬品まで置かれていた。

高山はその内の医薬品が入った大箱を手を持ち、部屋の中を警戒しつつ、中に入った。

文香も後に続く。

この部屋から追跡ボールが出現している可能性を考慮しての警戒だったが、幸いその姿はなかった。

先に部屋に入った高山は、抱えていた総一を床におろした。

高山「陸島、お前達3人はこの部屋にいろ。俺は通路から来る追跡ボールを迎撃する」

高山はかりんを床に座らせている文香に向かってそう言った。

高山「壁から現れる可能性もある。陸島は周りを警戒してくれ」

文香「わかったわ」

文香は背中に背負っているアサルトライフルを両手に持つ。

高山「かりんは総一の手当てを頼む」

かりん「わかった」

一通り指示した後、すぐに部屋の外へ出ていった。

高山の素早い判断力には、文香も感服するほどだった。

文香「総一君、大丈夫？」

文香は周りを警戒しつつ、かりんの手当てを受ける総一のことを心配した。

かりん「総一！しっかりして」

総一「う・・・ぐ・・・」

総一に巻かれている包帯からは、再び出血していた。

かりんは手当てをしつつ、総一に繰り返し呼びかけていた。

総一君はとても自力で動ける状態じゃない。

文香も総一の事が心配でたまらないのだが、警戒を緩めるわけにはいかなかった。

ドオオーンッ！ドオオーンッ！ゴゴゴゴゴ・・・

壁ごしに大きな発射音が響いてくる。高山がさっきの機関砲を使って追跡ボールの集団を迎撃しているのだろう。

通路の方は高山さんに任せるとして、問題は総一の方だった。

文香達がいるこの部屋は狭い。もし複数の箇所から追跡ボールが出てきた場合、迎撃しきる前に総一に当たってしまうかもしれない。

文香はこの状況を打開する為の方法を考えていた。

文香「・・・追跡ボールは、どうやって総一君を狙っているのかしら？」

モニター越しに誰かが操作している？それともサーモグラフィを使っている？

文香は以前に漆山が死んだ状況のことを思い出していた。

あの時、漆山はまず足を狙われた。そして倒れた漆山に一気に追跡ボールが襲った。

じゃあ、その追跡ボールが止んだのはいつ？

漆山は下半身をほとんどやられてしまっていた。その時に追跡が止まって・・・。

文香「あ」

たしかその時、首輪の警報音が止んだはず。ということは首輪が鍵ということ・・・？

さらに記憶を探り、文香はふと自身が持っていたPDAを取り出した。

それは『J』のPDA。以前高山が調べていたが、今は『5』のPDA以外はすべて文香が持っていた。

文香「これにたしか・・・」

文香は機能の一覧を呼び出した。たくさんある機能の内、一つの項目に指を触れる。

そこには【ジャマー】と書かれていた。それは本来、探知系ソフトウェアに映らなくなる機能である。

これを使うと首輪の位置も特定出来ないから、もしかしたら追跡ボールも首輪の位置が特定できないのではと文香は考えた。

その時、壁から追跡ボールが、それも別々の箇所から2つ同時に出てきた。

文香「悩むより、やれることはやらないと」

文香は迷わずその機能を使用した。

そしてジャマー発動中の画面が表示される。

文香「お願い、うまくいって・・・」

文香は手元にあるPDAを総一の側に置き、再び銃を構えた。

追跡ボールの動きが止まった。だが効果があったと思ったのは一瞬でしかなかった。

文香「くっ！」

それは錯覚でしかなかった。追跡ボールは休まず総一のいるところへ今も向かっていた。

文香は片方の追跡ボールに銃口を向け、素早く引き金を引いた。

ガガガッ

パリン！

かりん「こっちは私が！」

かりんは総一の手当ての手を止め、素早く銃を抜き、もう片方の追跡ボールめがけ、連射した。

ズガガッ

パン！

その追跡ボールは総一の近くで破裂した。割れた破片がいくつか総一の顔を掠める。

だが、直接の被害がないことを、とつさに総一に顔を向けた文香が確認した。

文香「え！？」

文香が振り向いた先、総一のちょうど上側、天井のコンクリートが一部開いているのが目に入った。

それが何を意味するのか、文香は瞬時に悟った。

銃口は総一とは反対を向いている。

文香は考えるより、先に身体が動いた。

バン！

文香「あっつ、ぐうっ！！」

天井から落ちてきた追跡ボール。とつさに文香が総一の上に覆いかぶさるようにした為、総一には当たらなかった。

だがそれは、文香の右肩に直撃した。

文香はその衝撃で、たまらず銃を落としてしまう。

文香「くっ、ううっ・・・」

かりん「文香さん!!」

総一「ふ・・み、か・・・さ・・」

かりんと総一は同時にその名を呼ぶ。

文香の右肩は着ていた服を焼き、その肌は火傷で赤く焼け爛れてしまっていた。

文香は総一の上に被さる形でうずくまる。

これじゃ、銃をまともに扱うことは出来ない。

それはこのゲームの手によって殺されることを意味していた。文香も総一達も。

ずっと意識がもうろうとしていた総一だったが、残った力を振り絞り、必死で文香に手を伸ばす。

文香「総一君・・」

文香は総一の顔を見る。その顔は怒りとも悲しみともつかない複雑な表情だった。

総一は自分の無力さに怒りを感じていたのだ。そして文香が自身を犠牲にしてまで自分を守ってくれた事にも。

どうしてそこまで・・・。

総一はその思いで一杯だった。

そんなやりきれない表情の総一を見た文香だったが、ふと総一の首輪が目に入る。

それは今もなおアンプが赤く点滅して、アラームと合成音声が繰り返して流れていた。

そうだ！？

文香は右肩の痛みを必死でこらえながら、弾薬や食料などを入れているリュックサックを手を取った。

そして左手であるものをいくつか取り出す。

総一も途切れそうな意識を必死で繋ぎとめ、それを目で追う。

文香が取り出したのは、かつて文香達の首に巻かれていた首輪だった。

文香、かりん、高山の3つ。

文香「これを・・・」

文香はジャマーを使用しているPDAの端子を、それらの首輪に順に差し込んでいった。

『あなたはルールに違反しました。15秒後にペナルティが開始されます』

その首輪は赤いランプを発しながら、合成音声を流しだす。

文香「かりんちゃん！」

文香は、今も必死で迎撃しているかりんに向けて、首輪を一つ投げる。

かりん「こ、これは？」

文香「それを床に置いて」

文香はそう言いつつ、残りの2つの首輪をそれぞれ床に置いた。

3つの首輪は、総一と文香を囲む形で、正三角形を描いていた。

そう、それは首輪のバリケード。

追跡ボールが接近してきても、その首輪の方に引き付けられる為、その分時間が稼げるので、真っ先に総一が狙われることはない。

文香「あと気にするのは・・・」

文香は天井を見た。ここからさっきの様に落ちてきた場合のみ、総一にそのまま当たってしまう。

文香は残る左手で、落とした銃を拾い、その銃口を天井に向ける。

文香「あと、あと少し持ちこたえれば・・・」

文香は、痛みに震える手を必死でこらえ、天井に狙いを定めた。

そして残り時間が過ぎ

『ゲームが終了いたしました！またのご来場をお待ちしております！』

・
・
・
・
・

第19話「ラストゲーム」(後書き)

ゲーム終了の合図。彼らは戦い抜き、多大な犠牲を出しながらも、見事に生還を果たしたのでした。

次回は最終話「手に入れた安らぎ」生き残った4人はその後、一体どうしたのでしょうか？

第20話「手に入れた安らぎ」

第20話「手に入れた安らぎ」

作・桐島成実

青々とした空、風に揺れる木々。そして日常の喧騒とは程遠い静けさ。

ここは郊外にある公園。そこに置かれているベンチに並んで座る形で、2人の姿があった。

総一「もう、あれから3ヶ月ですか」

総一は、側にいる文香と肩を寄り添いながら、ふと呟く。

文香「なあに？突然」

文香は身体を寄せたまま、顔だけを総一の方に向ける。

あの時、文香達が必死で戦った後、気が付いたら病院の一室だった。

意識を取り戻した文香は、総一達を慌てて探したが、総一は傷がきちんと手当てされた状態でベッドに寝かされていた。

そして、その隣のベッドにはかりんの姿もあった。

高山は文香が目覚める前から起きていたらしく、状況を把握する為に病院内を調べまわっていたらしい。

そして、3人の傷が癒えるまでここで過ごし、先に完治したかりんは、手にした賞金を元に、妹のかれんを海外に治療を受けに行く為に準備を始めた。

本当は文香も一緒に付いて行くべきだと思ったが、かりんに『恋人を放つてはダメ』と言われ、同じく海外に行く予定だった高山と共に旅立っていった。

そして傷が癒えたばかりの総一を連れて、近くの公園に足を運んでいたのだ。

総一「かりんはうまくやってるでしょうか？」

文香「あの子なら、もう大丈夫よ」

心配そうな総一に対し、確信に近いほどの自信に満ち溢れた表情の文香。

病院で目が覚めたあの時、優希の死に、再び喪失しそうなかりんだったが、自分が落ち込んでいてもどうにもならないと文香が言い聞かせ、再び立ち直らせたのであった。

総一「優希・・・」

総一はあの時の記憶を思い出していた。

俺達はあの閉鎖された空間から出ることが出来たが、他の9人はそ

れが出来なかった。

心半ばにして、無念を抱きながら命を落としたのだ。

そして、総一やかりんを助けるべく、自らを犠牲にした優希。

あの時のことは心の奥深くに焼きついていた。

沈痛そうな面持ちの総一を見て、あの時のことを思い出しているのだと気づき、文香は努めて明るく振舞った。

文香「こーらっ、私とのデート中に暗い顔はイヤよ？」

文香はそう言って総一の腕を右腕を自らの身体に抱き寄せる。

すると、総一は文香の右肩に視線を注ぐ。

総一「すみません、あの時俺がもっとしっかりしていれば・・・」

文香の右肩の傷は、傷こそとくに癒えているのだが、今も傷痕が目立たない程度ではあるものの、かすかに痕跡が残っていた。

文香「総一君を守った証だと思えば、なんてことはないわ」

だが文香はあまり気にした様子もない。

文香にとっては、すでに覚悟していたことだった。

そう、このふざけたゲームを潰す為、組織に対抗するレジスタンスに入った時から。

それは危険と隣り合わせの日常だった。

だが、そのおかげで私は自分の人生を切り開く手段を手に入れ、こうして総一やかりんを救うことが出来た。

文香「だから気にしないで、総一君」

総一「文香さん・・・」

愛すべき人が隣にいる。その事が私にこれほどの力を与えるもののね。

その事実は文香にとって、眩しいくらいの感覚だった。

そして仲間を、弱き人を助けようとする、文香と同じ意志を持つ総一が、傍に居てくれる事に例えようもない嬉しさを感じていた。

そんな文香はゲームが終了してから今まで、ずっと総一の元に居た。

ゲームに潜り込んで情報収集と対抗する為の仕掛けを施す任務が終了してから、しばらくの休暇をもらっていた。

ゲームに参加したプレイヤーには、しばらくの間組織に監視される事を文香達は知っていた。

それはゲームが外部に漏れないようにする為、組織が行っていることだった。

だからゲームで得た情報をレジスタンスに報告するのは、ほとぼりが冷めてからだった。

つまりその間は文香は本当の意味で自由を手に行っていたのだった。

文香は今後の事を考えていた。

総一君なら、私達に協力してくれるかも・・・。

レジスタンスも人手不足だ。1人でも人材が欲しいところである。

総一君なら、一つ返事でOKしてくれることだろう。でも『文香さんにはそんな危険なことはさせられない』とも言つことは、文香には容易に想像できた。

だが文香の本心としては、このまま総一君には平和な日常を過ごしてもらいたいというのが本音だった。

真実を話すべきか、話さないべきか・・・。

文香はずっと悩んでいた。

そうやって、文香が深刻そうな表情しているのを総一が読み取った。

総一は文香もゲームによって心を痛めている、とそう思ったのだろう。だから今度は総一が努めて明るく振舞った。

総一「そういえば、あの時ことなんですが」

文香「あの時？」

文香は考えを打ち切り、総一の言うことに耳を傾けた。

総一「ホラ、4人で落とし穴の罠にかかった時ですよ」

総一が言うのは、追跡ボールとの戦いの最中での出来事だった。

総一「あの時、文香さんが俺の上に落ちてきましたけど」

そこで、総一はいわくありげに笑みをこぼす。

総一「あの時の文香さん。結構重かったです」

文香「ええっ!？」

文香は驚き、ほんの暫くの間ぼかんとしていたが、やがて総一の頬にさつと両手を添える。

そして、頬を軽く引つ張る。

文香「そんなことを言うのは、この口かあっ!」

文香はそう言いつつ満面の笑みを浮かべる。

総一「ふあっふえ、ふおんほにいややっふあんふえすふあら」

総一もそれに合わせ、律儀に返答する。

文香は、こんなやりとりを嬉しく思っていた。そしてお互いの心を

満たしていった。

ま、いつか。今はこの安らぎを楽しむってことで……。

文香は悩みを捨てた。今後のことは後で考えよう。総一に真実を話すのは、それからでも遅くはない。

総一の楽しそうなその表情を見ると、そう思わずにはいられなかった文香であった。

……後に総一と文香は、長く険しい戦いを共に歩んでいくことになるのであった。

～END～

第20話「手に入れた安らぎ」（後書き）

いかがでしたでしょうか？活躍したプレイヤー。出番さえもなかったプレイヤーなど様々でしたが、お楽しみいただけたでしょうか？

エピソード『5』ではこのような結果になりましたが、他にもエピソード『6』『7』も掲載しておりますので、そちらの方もぜひ閲覧いただけたら幸いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2425m/>

シークレットゲーム KILLER QUEEN ～エピソード5～ 【文香編】

2010年10月11日04時09分発行